811.1-H66ウ
1200500753309
.1
.6
ウ

始

M
K 1 1
8 3

811.1
H66

平野秀吉編

國語聲音學 全

東京 株式會社 國光社

國語聲音學

はしがき

吾邦の、汗牛充棟も啻ならざる刊行書の中で、聲音に關するものは、今日何があるであらうか、或る一二種のものを除いては、殆ど無いではあるまいか、もと聲音は、言語の、形式を成すもので、基礎たるものなれば、初等、中等、ことに初等教育に於ての言語教授、國語教授者には、聲音の智識が必要であることは言ふまでも無からう。家屋を建てるに、木や石の必要なることを、拒否するものはあるまい。言語と云ふ家に對して、聲音は木や石の如き原料である。

聲音の研究は、言語教育の上に、此くの如く必要なるものを、一般

國立圖書館
昭 24. 3. 15 和
寄贈

に注意せられて無いのは、木や石によらずして建てようとする空中樓閣ではあるまいか。

おのれ、嘗て深く之に感じたまゝに、聞き得た音、思ひついたことの有る毎に、採錄もし、分類もして、二三部の外國聲音書などを參考して、之を學校にも、講習會などにも講說したのが、此の稿本である。其を、いつしか書肆に聞きつけられて、懇望せらるゝので、一二度は斷つたが、つら〳〵考へると、此の未熟な、不十分な研究も、缺乏せる目下の學界には、多少の補益が有るであらうか、明日の江湖よりは、今日の一杯の水が、轍鮒の急を救ふに、必要なりしためしもあると、覺つたまゝに、更にスキート氏の、プライマー、オヴ、フォネチックによつて、材料を分類もし、整頓もし、增減もして、それに、同氏のプラクチカル、スタデー、オヴ、ランゲージ、其他、彼此に

散見せるものを參考とし、國語聲音學と名づけて、需めに應じ、公にすることゝした。

初めには、譯書とする積りであつたが、必ずしもスキート氏の說にのみ據らぬのと、自己の僻見をも多く加へたのとで、羊頭をかけて狗肉を販ぐ誹りを恐れて、止めは止めたが、大體に於て、同書から益を蒙つたことの多いことは勿論である。

獨斷はなるべく避けた積りであるが、尙大方諸君の指摘を得たり、己れの氣付いたことなどは、再版の時に訂正しませう。其のうちには、伊澤、岡倉等諸先輩の誘掖や、言語學會などの唱導により、て、江湖の如き、河海の如き、造詣の深い、學識の豐富なる方々の著述も出ませう。否、斯學のために、一日も早く出してほしいのである。

此書の說く所は、聲音である故に、文中引く所の用例は、從來の假名遣ひなどに拘らず、一に音に基いて、音に近いものを擇んで、カハ(河)、ユエ(故)、などは、皆カハ、ユエの如く用ゐた。

文章は達意をむねとして、いはゆる談話體を用ゐたので、中古の文法に適合せぬところが多くある。

明治三十五年十二月

編者識

國語聲音學

目次

第一章　緒論……一
第二章　聲音學……五
第三章　基礎學科……八
第四章　標準音……八
第五章　文字……一一
第六章　音の二研究、及び、單音、綴音……一六
第七章　發音機關……一九
第一節　肺臟……二一
第二節　氣管……二五

第三節　喉頭……二五
第四節　咽頭……三八
第五節　口腔……三九
第六節　鼻腔……四五
第八章　喉音……四八
第九章　有聲音、無聲音……五〇
第十章　口音、鼻音……五一
第十一章　續音、斷音……五二
第十二章　母音……五三
第一節　母音狀態……五七
第一節　廣母音、狹母音……六二
第三節　圓口母音……六二
第四節　母音各論……六四

第五節　中間母音……六八
第六節　鼻化母音……七二
第十三章　二重母音……七三
第十四章　父音……七五
第一節　父音の分類……七七
第二節　父音各論……八三
第十五章　母音化父音……一〇六
第一節　口蓋化……一〇七
第二節　唇化……一一六
第三節　齒化……一一九
第十六章　母音、父音、及び綴音表……一二〇
第十七章　類似音……一二五
第十八章　拗音、直音……一四九

第十九章　清音、濁音、半濁音……一五一
第二十章　音中止……一五六
第廿一章　促音……一五八
第廿二章　音量……一六一
第廿三章　音勢……一六四
第廿四章　音調……一七〇
第廿五章　音色……一七五
第廿六章　階段音……一七七
第廿七章　音變化……一七九
第一節　音通……一八六
第二節　音同化……一八七
第三節　鼻化……二〇三

第四節　母音の調和……二〇四
第五節　母音の不調和……二〇五
第六節　音顚置……二〇六
第七節　音の增減……二〇九
第八節　音の自然傾向……二一八
第九節　音量、音勢、音調、及び音色の變化……二二〇
第廿八章　附錄……二二〇
（一）幼兒の聲音の發達……二二〇
（二）吃りに就いて……二二三
（三）啞に就いて……二二四

國語聲音學

第一章　緒論

平野秀吉編

聲音學、一名、音韻學は、人の聲音を科學的に研究するものである。人の聲音は、單に聲音として存するもので無い。必ず思想に結びつけられて、觀念を表し、概念を表し、所謂言語と云ふものゝ形となりて、存在するものである。故に吾輩は、音とは何ぞやの問題に、解釋を試みる前に、言語とは何ぞ、言語と聲音との關係は如何の大略を、解釋する方が便利である。のみならず、言語の何物たるかを知るのは、やがて聲音の幾分かを知ることにもなる。如何となれば、聲音は言語の部分なれば、聲音を離れて、言語の成り立つ筈は無く、言語を離れて、聲音は孤立するものでない。

言語に就いて、古來學者の間に、廣義、狹義の二樣の見解から、定義が下されて居る。人が思想を發表して、他人に通ずる方法手段は、皆言語である。太古の社會人衆が、今世に殘したる建築物は、以て當時の人民の美惡好尙を知ることが出來る、故に言語である。繪畫は喜怒哀樂の情を寫し出すことが出來る、故に言語である。彫刻も言語で、船舶の信號も言語である。況や文字や、顏容口語に於てをや。

以上は、廣義の言語である。この定義によると、終には電信も寫眞も言語で、媚びを求むる犬も猫も、主人に對して言語を有つことになりて、甚だ散漫たるものなる故に、更に言語狹義說が起つた。

狹義で云ふと、言語は我々人類の特有するもので、吾人の思想を、自然に成りたる約束的に聲音もて表したるものである。文字や、繪畫や、顏容によりて、思想の一部が表さるゝには、違ひは無いが、表す方法が異なる故に、言語とは言はない。言語の隷屬物である。

此の狹義說は、今日一般に採用せられて居る定義である。即ち言語は、聲音と云ふ形式もて、思想と云ふ內容を表したもので、言語と聲音、聲音と思想とは、互に親しい

關係をもつものである。

とは云ふものゝ亦、言語や、思想聲音は、科學の上に、互に所屬が違ふことを知らねばならぬ。言語學と、思想の學問即ち心理學とは、人の心の上に建設せられたものを研究する、心的科學の所屬で、聲音學は、自然界の事物を研究する、自然科學の所屬である。

言語の形式は聲音である故に、重大なる注意で言語を研究する必要があれば、同じく重大なる注意で聲音を研究する必要がある。スキート氏は、聲音の智識の無い言語教授ほど、危險なるものは無いと言はれてあるが、實に至當の言である。唯實用の目的で、或る國語を學ぶことは、模倣に由て、ほゞ其の目的を達することが出來る樣なものゝ、少しく考へると、之はきはめて危險で、甚だ不得策であることが知れる。如何となれば、吾々の耳は、さほど精密なものでは無い。既に習ひ得た音に、此の音と彼の音と、此う違ふと云ふ前提を置いて、聞き分ければ、なるほどと頷かるゝ音でも、初めて聞く時には、其の差別を聽き分け難いものである。其の不たしかなる耳で得た音を、不たしかなる想像で、模倣し、發音することの、危險なことは、今更言

ふまでも無からう。其れ故に、子供が、自國語の音を習ふにも、甚だ長い年月を要し、學生が、外國人に就いて外國音を學んですら、自國語音の傾向や、偏癖から、免るゝことの出來ないのは、主として之に原因する。是等の聲音の基礎を、明白に、確實に、指示するものは、聲音學である。而して聲音學は、比較的に勞力少くして、功能の多い、結果の收め易い科學であれば、學生もなほ、其の學ぶ國語の聲音論に通ずることが得策である。學生すら然り、況や教師たるものは、なるべく精密なる智識を備へて、微細の差別も必ず認め、之を訂し、之を教へるといふことは、言語教授の上の大要件である。教授者其の人が、アは如何なる音質であるか、母音とは如何なるものを言ふか、シとヒとは如何なる點が同じいか、タとチとツとは、如何なる點が同じからざるかなどの智識に缺乏して居る今日の狀態は、慨嘆に堪へられぬ次第である。目下初等教育に從事せらるゝ方々の、研究さるべき學科であつて、等閑にされて居るものゝうちで、聲音學などは、其の甚しいものであるまいか。中には、頗る熱心に注意される人があつても、其が確實なる實驗や、學理の上からでは無くて、唯漠然たる智識や、不たしかなる想像の上から、之を論ずるのであるまいか。であるとすれば、スキート氏の所謂聲音の智識の乏しい、危險なる言語教授者たる人で、慨歎すべきことである。是と云ふのも、畢竟するに、此の方面に關する著書の乏しいにも原因する。今日では、昨年頃發刊せられた、伊澤、岡倉氏の視話法、發音學講話や、言語學會の雜誌等に、一二頁づゝ散見するものを除いては、聲音に關するものは殆ど無い。研究の必要は、此くの如く急であるのに、其に關する著述は此の如く乏しい。是れ實に昭代の恨事に非らずや。

たとひ今日標準語が行はれて、千島から臺灣まで、同一の語彙と、語法とで、談話する時が來たにもせよ、地方地方の方音訛音は、依然として舊態を改めなくて、ズーゝ音を語つたり、チ、ツやシ、スを一つにしたり、ダ行とラ行とを混同したり、音の長短が一致しなかつたり、やたらに鼻にかけたりするならば、其語は依然たる方言である。是故に聲音を研究して、之を統一することは、言語統一の一要素である。

第二章　聲音學

聲音學は、言語の原料たる、人の聲音の科學的研究で、實驗上、聲音の生ずる作用や、其

の音響を研究する學科である。既に科學的と言うたからには、何處から何處まで
も、根本的研究をしなければならぬ。從來の如く、之は略音である、同行同列の通音
であり、反切であるなとど、漠然たる臆斷を以て滿足してはならぬ。何故に略され
るか、通ふか、約まるかを、十分に研究しなければあらぬ。
是故に、實驗聲音學には、耳によつて各音を認識し、目によつて其の音に相當する發
音機關の狀態を認識しなければならぬ。此の研究をやる初めに、大なる注意と、警
戒とを求めなければならぬは、早合點と、頑固の意地張りとである。己れの鄕土の
訛音に執着して、標準音を拒む樣なことがあつてはならぬ。併し亦、其の音は、此く
の如き音狀態で語れ、此くの如く語つてはならぬと斷言するまでには、精密に精密
に思考しなければならぬ。頑迷と獨斷とは、何の科學にも愼むべきことであるが、
特にこの聲音學には陷り易い故に、精密なる實驗と、細心熟慮とは、聲音を學ぶもの
の忘れてはならぬことである。新しい一音を得た時には、出來るだけ綿密に傾聽
して、分解的に、綜合的に、極めて明に其の音を認識し、己れが之を模倣し、他人に之を
模倣させる時には、音狀態、音局部の如何なる點が同じいか、同じくないかを、看破る

ことが肝要である。
一般聲音學に就いては、此の通りではあるが、聲音は萬國皆同一のものでは無い、甲
の國にある音で、乙の國に無いもの、丙の國にも、丁の國にもあるが、其の音局部や、音
狀態や、音質に於て、やゝ異なるものなどがある。同一語から出て、同一の音から出
でたる語音でも、英倫の House, what. に於けるhは、殆ど脫落されるが、蘇格蘭や、亞米
利加音では、其が明瞭に響くとか。獨逸のjと、英吉利のjとは、發音が違ふとか云
ふが如く、日本の語音には日本の語音の特色がある。例へばfの音は外國には普
通であるが、吾邦には無いとか、si ti の音も彼にはあれど、此には無いとか、漢字音都
は支那音には tu であるが、日本音には tu の音が無いために、ツ tsu 或はト to であると
か、ハ行父音が舌根に摩擦せらるゝ傾きがあるとか、ラ行音の音狀態が違ふとか、そ
れ〳〵に特質がある。
本書の研究目的は、日本聲音にある故に、次に論じ行く音狀態も、音局部も、音質も、何
も彼も、盡く現今の國語音を標的として居る。萬已むを得ざる場合で無ければ、國
語音以外は言はぬことにして居る。要するに、此の書は國語聲音學で、日本の聲音

を研究すればよいのである。

第三章　基礎學科

聲音研究の二大分科は、音狀態と發音局部即ち咽喉、舌、齒、唇等の運動や、形狀の研究と、之によりて生ずる音響の研究とである。是故に、生理學と音響學とは、聲音學の基礎學科である。

此の二學科が、基礎學科であることを知つた以上は、精密の注意を以て音を聽き分けること、發音狀態を視分けること、即ち耳の練習と、發音機關の辨識とが、學習の方法手段であることを忘れてはならぬ。其の聽き分けた音は、やがて精密に同じ機關狀態を以て、同じく發音される樣にならねばならぬ。

第四章　標準音

吾々が如何に語らねばならぬかの必要を感じないうちに、此くの如く語れと强ひるのは無理である、矛盾であると言語學者は言うて居る。

實用聲音學で云ふ正音即ち標準音は、國人が此く語らねばならぬと言ふ音を新に建設して、國家に强ひるものでは無い。唯現在に廣く用ゐられて、最も徧く通ずる國語音が、其の標準音であつて、此の音を語らなくては言語の用が十分に足りないので、他の方音訛音は、次第に之に引き着けられて、自ら統一する傾向を有つのである。例へば、サ行の父音(s)に母音イを綴合したものは、スィ(si)で無ければならぬと云うて、今日の普通音シ shi を訛音であるとして、之を引き直すと言ふことは出來ぬ。土佐人がジ、とヂとの區別が出來る。其が上古の正音であつたからとて、今の國語音をヂに復古するといふことはなし得られない。もとは訛音であつたにせよ、現に國語音として一般に用ゐられる音は、現在の正しい標準音である。

是故に標準音を定めるとか、標準語を採用するとか云ふことは、合理の言では無い、標準音、標準語は、自然に定まらねばならぬものである。既に社會をなし、言語がある以上は、其の社會の標準音、標準語は、自然に定まつて居る筈である。語を換へれば、聲音學者は己れの理想などを本として、新しい音を建設すべきものでは無い、唯明白に定まつて居り、或は定まりつゝある標準音に就いて、之を認め之を助けて、自

然の傾向を逞うさせるに過ぎない。此の傾向に逆ひて計畫などをしても、成功するものでないことは、言語の原則からして斷言が出來る。即ち一人或は一地方に特別なる音、若しくは闕乏せる音などがあらば、言語の性質上之を正し、之を助けて、一般國民が共有する音の語られる樣に助けてやらねばならぬ。

隨ひて、國語及び國語音の標準とすべきものは何であるか、西京か、東京か、四國音か、九州音かなど云ふことも、合理の言と思はれない。何となれば、既に東京音と云へば東京の方音で、西京四國音と云へば西京四國の方音である。

標準音――方音、　方音――標準音

と云ふ方程式が、正しいものと認められぬ以上は、東京音即ち標準音で無いと云ふことは、明々白々である。それならば、吾國の標準音、標準語は、何であるか、言ふまでも無く、北海道より臺灣まで、既に行はれ、或は方に行れつゝある國語國語音である。たとひ、之がそれであると指示した人が無いにもせよ、暗々裏に定まつて居る言語と音とがあつて、地方々々の方音が、年一年と之に引きつけられ、併呑蠶食せられて居るでは無いか。之が眞正の國語國語音である。たとひ直接系統を東京語に引いて居るにもせよ、其が自ら國民に用ゐられて、全國に行はるゝ以上は、國語、國語音であつて、東京語、東京音では無い。然るを、言語は何方言を標準として、音は何方音が正しいなどゝ言ふことは誤りである。

此くの如くして、標準音の知れ、國語音の定まつた上は、地方音、訛音のことは言ふまでも無からう。

第五章　文　字

音の研究に就いて必要なのは、發音通りに音を記すべき音標である。此の音標が文字である、言語は思想を約束的に聲音もて表すものなり、と云ふ定義と同じ口調に文字の定義を置いたならば、文字は音の約束的符號であると言ふことが出來る。しかし文字には、標音文字の外に意義文字があつて、今現に吾國字は、意義文字の漢字と、標音文字の假字とを併用してゐる、此二種の文字中で、意義文字は思想を基礎として居るのである。たとひ音は同一でも、代表する思想が違へば文字も違ふ。或る方面からは頗る便宜な點もあるが、音と文字とを直接に結びつける上には、漢

文字はきはめて不便ある不都合なる文字である。それは

表音文字……聲音……思想
表意文字……思想……聲音

であつて、漢文字は音を基礎として居らぬ文字であれば、聲音の研究上に價値なきことは當然である。

標音文字には、綴音文字と單音文字との二種がある。我國の假名の如く、或る父音と母音とを綴りて、既に一綴音を成したる音を表すカ、コ、ス、セ、の如きは、綴音文字で、アルファベットの如く、父音を表す單音字K、S、と、母音をあらはす單音字a、o、u、e、とありて、綴音カ、コ、ス、セ、を表す時には、此の二つをKa、Ko、Su、Seと列記して表すが如きを、單音文字と云ふのである。

この單音文字と綴音文字とを使用する上に就いて、更に寫音的と歴史的との二つの使用法がある。寫音的とは、飽くまで音と一致させるので、異なる音は譬ひ其の相違が些細でも、其の相違が認められる樣に文字を書き綴るので、羅馬字の綴りや、獨逸の綴字などは、やゝ之に屬する、歴史的とは、從來の歴史や習慣に拘泥して、必ずしも音と一致せぬところがあるのである。栗も泡も、今日では同じくアワであるのに、昔は栗の方はアハであつたと云ふので、今猶アハと非音的の綴りをしたり、位は今日の發音ではクライであるのに、其語源が坐居（くらゐ）であるからとて、今もクラキと非音的な綴りをしたり、今日の發音ではナイトであるのに、昔はナイットであつたとて、今猶night.と非音的の綴りをするを云ふ。所謂假字遣ひと云ふものは是である。英國、とりわけ佛國の如きは、音として耳に響くは、二つか三つかの綴音であるのに、綴る音字は十五も十六もあり、語尾の父音は、殆ど皆音無き文字なので、如何に精密に佛蘭西音を學んだ人でも、なほ書取りには甚だ困難すると云ふは、是がためである。

吾人は、綴音文字と單音文字、寫音的用法と歴史的用法との利害得失を十分に比較し研究して居る暇はない。否其は本書の目的でない、唯此處に聲音の符號として用ゐる文字は、最も最も精密ある寫音的のものでなければならぬことを、斷言すればよい。

聲音の上では、飽くまで、音標即ち文字は音の符號である。音が同一である以上は、時

と場合との如何にかゝはらず、音標は同一で無ければならぬ。假字遣ひは、音や語の沿革を知る上には、勿論大なる利益はあらうが、實用聲音學の上には、甚だ價値なきものである。フヂ(藤)のヂも、フジ(山の名)のジも、昔は區別ある音であつたらうが、今日の發音に區別の無い以上は、音標は同一で無ければならぬ。家のエも、見のエも、故のエも、音の上に區別のあつた昔は、ヘ、エ、エと音標を區別する必要はあつたが、今日、其音が同じい以上は、音標も同じでなければならぬ。之に反して、昔は同一の音でも、今日其音が異なる以上は、たとひ微細でも、其の區別を聽き分けて、それ〳〵に異なる音標を用ゐなければならぬ。例へば旗のハと河のハとは、昔は同一音であつたにせよ、現今音が異なる以上は、ハタ、カワと云ふ樣に、音標を違へねばならぬ、同じ鼻音でも、唇鼻音、舌頭鼻音、舌根鼻音と、音が異なる以上は、音標も同じではならぬ。同じアと云ふ音でも、音量が異なる上は、長音はアー短音はアと、示す符號をかへねばならぬ。其他音の强弱とか、音の高低とかに就いても、皆それ〳〵に、之を表す精密なる音標が必要である。

今一つ、單音文字と綴音文字に就いて述べることは、音は、單音が綴られて綴音を成すので、單音文字を列ぬれば異音があらはされる。ゆゑに、單音文字を以て綴音文字の代用は出來るが、綴音文字で單音を標すことは出來ない。然るに我々は、果して單音を表さねばならぬ樣なことは無からうか。否々、我々は單音を表さねばならぬ場合に多く出遭ふのである。(第一)、音研究の上に、音を分解して、カ行の父音、マ行の父音と、說かねばならぬのに、之を記す文字を有たぬ、不便知るべし。(第二)、今日の國語音では、鼻音は言ふに及はず、父音が單音のまゝで、談話せらるゝことが少くない。シタ(下)のシ、フタツ(二つ)のフ、ンマ(馬)のンなどが、書きあらはす音標の無いがために、綴音文字、若しくは他の類似音で、標されて居るが、注意して實驗すれば、母音の綴合が無いので、Shta phtatsu. mma. の如く、父音の孤立であることが知れるが、之を書きあらはす方法は、綴音文字には無いのである。

そこで、聲音學の方面からして、最も完全なる文字は、精密なる單音文字で、寫音的に使用しなければならぬ。即ち如何なる細微な音の區別でも、明白に標されて、一たび此の文字の約束を理會した學生は、耳に聽くが如く、目からも、精密に音を學ばれなくてはならぬ。此の點から觀て、吾が國字の不完全なることは言ふまでも無か

らう。そこで、書中處々にアルファベットを借りて、單音其他を標したのは、實に止を得ざるのである。

第六章　音の二研究、及び單音、綴音

言語音は、單獨に孤立して居るものでは無い。音と音とが或る形に綜合せられて、連續せる一呼氣に成る音は、互に關係し、連絡するものである。之を音簇と云ふ。

は(葉)

はなおみる(花を見る)

わたしわゆきます(私は行きます)

時には、例一の如く、一個の綴音から一音簇の成ることもあるが、其は甚だ稀で、常に、例二三の如く、數個の綴音から成るものである。

次に音簇は、必ずしも語法の品詞の分類と一致するものでないことを知らねばならぬ。例の二に於て、語法では、名詞と、豆爾乎波と、動詞と、三つの品詞から成つて居るが、音の上からは、ハナとオとの間に於て、別に音の隔ては無いので、ハからナに滑るが如く、ナからオにも、オからミルにも滑る、例の三に於ても同じい。私のシと次の單語のワと續きたるシワも、元より一單語として存在するシワ(皺)も、音に於ては少しも相違がない、更に、

わたしゃゆっきゃす

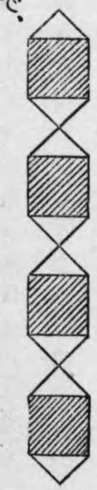
と發音して、音簇と單語との關係を考へたなら、何處から何處までが、單語の切れであるとか、三つの單語であるとか、四つの單語であるとか云ふことは、聲音の上には顧みて發音するではない。つまり聲音の上では、風管、即ち肺氣管に於ける空氣を入れ更へるまでは、切れることの無い一音簇である。各單語と各單語との間に、一休止でもあるが如く思うて居るは、誤りである。聲音は飽くまで言語の形式で、語法の品詞分類は、思想の上からしての論理的分類であつて、兩者は異なるものなることが知れる。此くの如く音簇を成すために、音と音とが關係し、連絡する狀態を研究するのが、音の綜合的研究である。

音簇は、異なる數多の音から成るもので、前に引いた例の二には五個、例の三に於ては八個の音がひゃく。更に一つ一つの音に就いて、精密に試驗すれば、單に母音か

ら成りたるものと、父音と母音との綴合、即ち綴音から成りたるものとの別がある、例の二に於て、ハナミルは綴音である故に、音研究上、更に之を父音母音の二つに分解することが出來る。この父音母音が單音である。ハナオのオは、もとより單音のまゝで存在する。上の如く音を解剖して研究するものを、音の分解的研究と云ふ。

音簇の基礎は綴音で、綴音の基礎は單音である。此くの如く、單音は綴音となりて存在し、綴音は音簇となりて談話せらるゝものなれば、音の基礎として單音を研究する必要があると同じく、言語として、綜合音を研究する必要がある。

是故に、分解的研究、即ち孤立音としての研究は、聲音の一つ一つに就いて、其の靜止狀態を研究するので、綜合的研究は、連續する聲音に就いて、各音と各音との關係を研究するのである。即ち各音が互に關係する關節狀態、及び音簇と音簇との關係を研究するのである。之を圖で示せば、



は分解的研究で、

は綜合的研究である。

音には、此の二方面の研究はあるが、先づ分解して、後に綜合する方が便利である。而して、單音には父音と母音とあるが、父音といひ、母音といひ、音質、音狀態等の相違で、此の差別を知るには、是非とも、發音機關の大體に通じて居らねばならぬ。

第七章　發音機關

言語の原料は聲音で、聲音の原料は、我々の呼吸する空氣である。併し空氣は、全く發音するために呼吸するものでは無い。他に生活機能として、片時も缺くべからざる必要があつて、行住坐臥に呼吸するので、聲音は其副產物である。即ち呼吸は、必ずしも聲音を生じて、言語と云ふ便利を與へるためにするものでは無くて、他に重大なる目的をもつものなれど、其の片手業、廢物利用として、聲音を生ずるのである。憐むべき啞者なども、呼吸は、片時もせずに居るわけにはゆかぬ。此くの如く、聲音は、呼出の空氣にも、吸入のにも作られる筈だが、今日吸入の空氣を原料として

談話するものは、亞弗利加の土人[ホッテントット]位のもので、其他は皆、呼出氣を用ゐるのである。之は吸入氣より呼出氣が、人の耳に音響を傳へるにも都合よく、聲音を作るべく加減するにも自由であるためである。即ち呼出氣が、喉頭に、咽頭に、其他口腔鼻腔に於て、或は摩擦せられ、或は顫動し、或は密閉せられ、破裂して、吾人の耳に聞ゆる一種の音響を生ずる、之が所謂聲音である。之に關する身體の部分を名づけて發音機關と云ふ。

同一の音は、必ず同一なる發音機關の、同じい狀態に生ずるものであれば、或る聲音を知る人は、先づ或る發音機關、及び機關狀態を知らねばならぬ。故に各種の聲音を說く前に、各種の發音機關を說くのは、蓋し餘儀ないことである。餘儀なく說くことなれば、吾輩が發音機關の解說を、日本現在の聲音を明むる此書の目的を充たすに止めて置くは、當然のことであらう。

吾々は、發音機關を笛に譬へて、風管と瓣と副管との三つに區別して見よう。瓣とは、殆ど密閉せられて、僅に其の動作に必要なる間隙を存する、薄き膜樣の物で、風管よりの呼氣によつて顫動し、音を發するもので、吾々の發音機關にありては、喉頭の聲門帶がこの瓣である。風管は、此の瓣に空氣を送り、瓣の作用を起させるので、肺や氣管、氣管枝は、聲門帶に對する風管である、副管とは、瓣の上方に在りて、瓣に發したる音を共鳴する腔室で、モルガニー竇以上、咽頭、口腔、鼻腔等は、聲門帶に對する副管である。

されば、主要なる發音機關は喉頭ではあるが、之が原動力は肺である。故に先づ、風管部なる肺、氣管を說いて、逐次に瓣即ち喉頭、副管即ち咽頭、口、鼻腔と、呼出する氣息の方向に從うて說明しよう。

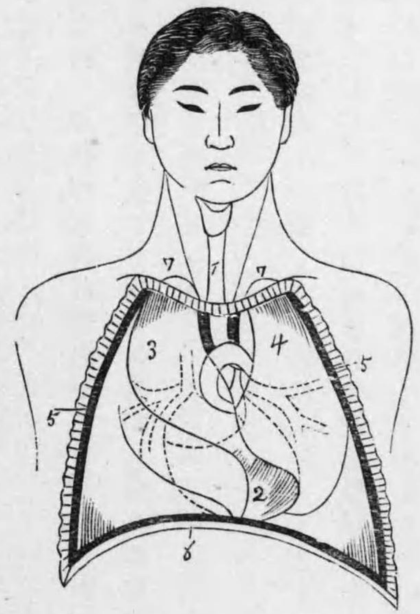
第一節　肺

肺は、殆ど胸腔內の全部を占め、心臟を挾みて左右の二肺に分る。構造は、海綿樣で强き彈力を有し、小氣管枝、血管、及び結締纖維から成り、漿液膜に包まれて居る。形狀は、三角錐體にして、色は灰白色で、大理石狀の紋理によりて、夥多の肺小葉の集合體であることが外面からも知れる。基底は、橫膈膜上面に一致し、尖端は胸廓の上口に達し、外面は胸腔の側壁に至り、內面は心臟に接す、其中央氣管枝、及び血管の出入する處を、肺門と云ふ。

小氣管枝は氣管枝の分岐せるもので、樹枝の如く漸次に分岐して、遂に盲嚢となる。之を漏斗と云ひ、漏斗の側壁に、桑實の如く附着せる許多の小胞を肺胞と云ふ。漏斗の集合したものが肺の外面に、大理石狀の紋理を見せた肺小葉である。

胸腔に於ける肺の位置

第一圖



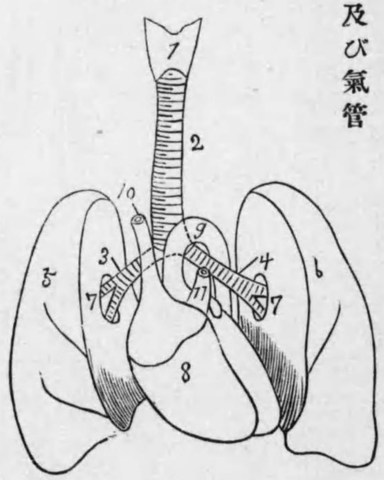
1、氣管　2、心臟　3、右肺　4、左肺
5、胸膜　6、橫膈膜　7、肺尖端

血管に、肺動脈、肺靜脈の二種あつて、動脈血管は心臟の右室に起り、肺門から小氣管枝に沿うて次第に分岐し、遂に血管網となり、肺胞にからみつきて、瓦斯の交換をなすものである。靜脈血管はこの反對で、血管から始まりて、小氣管に添うて、漸次に集合し、心臟の左房に歸るものなり。

胸廓は、絶えず擴張と縮小とを、交る交る續けて居る、擴張するのは吸息で、縮小するのは呼息である、肺は肺肋膜と胸肋膜とに包まれて、胸腔に密接し、抑壓せられて、其間には毫も餘地が無いために、胸廓の擴張縮小に應じて、肺もまた擴張し、縮小しなければならぬ。特に、肺は其彈力十分にして、其擴張力の大なるものなれば、胸腔の變化する毎に、之に應じて擴張し、縮小して、兩肋膜と離るゝことが無い。氣息は此くの如くして呼出せられ、吸入せらるゝもので、吸入せられたものは、やがてまた體外に呼出するものであるが、更に、肺内の氣壓の平均を保つために、口腔或は鼻腔より、咽、喉頭、氣管、氣管枝を經て、小氣管枝、漏斗、肺胞内に、空氣を吸入するものである。

第二圖

肺及び氣管

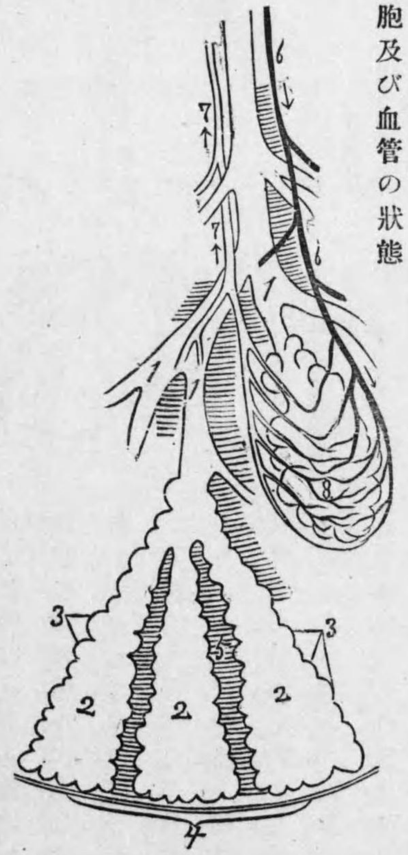


1、喉頭　2、氣管　3、右氣管枝
4、左氣管枝　5、右肺　6、左肺
7、肺門　8、心臟　9、大動脈弓
10、大靜脈幹　11、肺動脈

ハッチソン氏の確定した法式に從へば、女子は、重に胸廓及び肋骨の擧揚に由て、胸廓を擴張する。之を胸呼吸、肋呼吸と云ふ。俗に肩で息すると云ふは是である。男子は、專ら胸腔と腹腔との境をなす横膈膜の下降に由て、胸廓を擴張する。之を

第三圖

肺胞及び血管の狀態



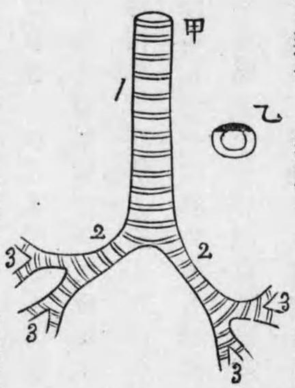
横膈膜呼吸、腹呼吸と云ふ。たゞし此の差別は、安靜に呼吸する塲合に限るもので、强き呼吸を營む時には、男も亦腹呼吸だけでは不十分である故に、胸呼吸、肋呼吸をなすものである。特に懷姙せる女子にありては、子宮即ち腹部の膨脹によりて、横

膈膜は常に壓上せられて、下降することを得ざるために、著しい胸呼吸、肋呼吸をなすものである。

第二節　氣管、氣管枝、及び小氣管枝

氣管は、喉頭に續いて其の下際に位し、食道と平行して其の前部に在り、呼吸に際し、空氣を通ずる道路である。形狀は圓柱形で、上圖の乙の如く、後側の斷えたる輪狀軟骨が十六個乃至二十個疊積して成るものである、後分れて左右の氣管枝となり、左右共に肺門に達し、肺の各葉に入りて小氣管枝となる、此くして氣管枝は氣管の如く、九個乃至十二個の輪狀軟骨より成りて、肺門に至り小氣管枝となつては、輪狀が不齊で、遂には認め難い。

第四圖



甲　1、氣管　2、氣管枝　3、小氣管枝
乙　氣管の横斷

第三節　喉頭

喉頭は、舌骨と氣管との間で、前頸部の中央に在り、種々の軟骨、靭帶、筋等より成りて、粘膜に蔽はるゝものである。空氣を通じ、聲を發する處で、發音機關の最も重要な

る裝置である。形狀は、三角漏斗狀をなし、上口は稍〻三角形にして、咽頭に開口す、之が漏斗の口である。それから下は漏斗の管で、直に氣管に通ずる第二圖の最上部にある1は是である。

(一)　軟骨

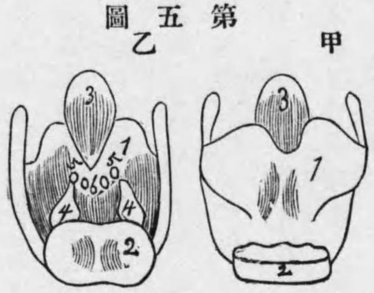
軟骨は、喉頭の原質となるもので、其數が九つある。(1)、甲狀軟骨は、喉頭の前側に在る。形狀は扁平方形で、二枚折の屏風の如く、左右に屈折して居る。舌骨の下に著しく突出する喉佛と云ふものが、此軟骨の前面の隅角である。前面は、左右より前方へ凸出し、中央に隅角即ち屈折部を有し、左右に斜線がある。この斜線は筋肉の附着する處である。內面は凹陷して、前隅の中央に小結節がある。之は聲帶の附着點である。後緣は、上下兩端が頗る延長して居て、其上端下端を上角下角と云ふ。(2)、環狀軟骨は、喉頭の最下部で、韌帶によつて下は氣管の第一輪に連り、喉頭の基礎をなすものなれば、又基礎軟骨の名がある。丁度指環の形をしてゐる故に、指環狀の軟骨即ち環狀軟骨と云ふのである。後部の幅廣きを板部と云ひ、前の狹き部を弓部と云ふ。板部は喉頭の後壁をなすもので、弓部は喉頭の前下部に在り。甲狀軟骨の下に、指でアーチ形に出でたるものを探られるのが是である。

(3)、會厭軟骨は、甲狀軟骨の內面の前隅に聯り、前面は凸にして舌骨に達し、後面は凹にして咽頭腔に向ふ。其の形は匙の樣で、呼吸する時には、直上して喉頭口は開かれるけれど、飲食物を嚥み下す時には、屈撓して巧に喉頭口を閉鎖するので、丁度喉頭口に於ける門番である。若し誤りて、一粒の飯、一滴の水でも、其の隙から飛び込まうとする時には、例の咽せ返ると云ふ狀態を呈するのである。

(4)、破裂軟骨は、喉頭の後上部で、環狀軟骨板部の上に在りて、左右に二個相對す、形狀は三角錐體である。基底は三角形で、環狀軟骨と關節する。前隅は聲帶の附着するもの故に、聲帶突起と云ひ、後外隅は筋肉の附着點なれば筋肉突起と云ふ。尖端は後內方に向うて、小角軟骨に連る。

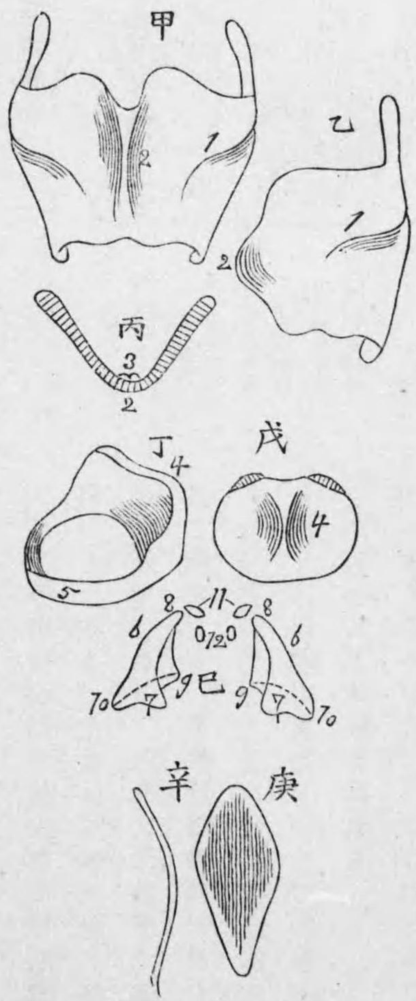
(5)、小角軟骨も左右に一個づゝ有りて、破裂

第五圖



甲、前面、
乙、後面、
1、甲狀軟骨
2、環狀軟骨
3、會厭軟骨
4、破裂軟骨
5、小角軟骨
6、楔狀軟骨

第六圖



甲、甲狀軟骨前面、　乙、同側面　丙、同橫斷面、丁、環狀軟骨の前側面　戊、同後面
己、破裂軟骨及び他の二種の軟骨、　庚、會厭軟骨後面　辛、同縱斷面
1、甲狀軟骨の斜線　2、同隅角　3、同內面小結節　4、環狀軟骨の板部
5、同弓部　6、破裂軟骨　7、同基底　8、同尖端　9、聲帶突起
10、筋肉突起　11、小角軟骨　12、楔狀軟骨

軟骨の尖端に在り。形は稍〻錐體である。

(6)、楔狀軟骨も亦左右對立で、小角軟骨の端にありて、楔狀をなす軟骨である。

(二)、靭帶

喉頭の靭帶は、軟骨と軟骨とを接合するもの、喉頭を上、舌骨、下、氣管に結びつけるもの、聲門を作るものの三種類がある。

軟骨を聯ぬるもの

(1)、中環狀甲狀靭帶は、甲狀軟骨の下緣と環狀軟骨の弓部とを聯ぬるものである。

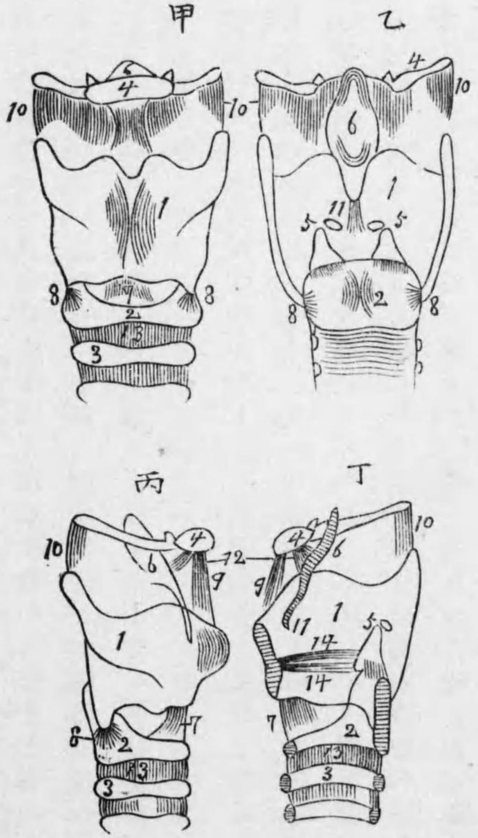
(2)、側環狀甲狀靭帶は、甲狀軟骨の下角と環狀軟骨とを關節するので、二種の運動をなす、其一は環狀軟骨の板部を前へ傾け、上緣を前下方へ向けるので、其二は環狀軟骨を輕く上下前後へ轉ずるのである。

(3)、環狀破裂靭帶は、環狀軟骨板部の上緣と、破裂軟骨の基底との關節で、此の關節は、破裂軟骨に二種の運動をさせる。其一は基底に於て、縱に其軸を廻轉するので。之が爲に前に向いてゐる聲帶突起を外へ廻し、外に向いて環狀軟骨の後方に突き出でたる聲帶突起を後內方に廻したり、或は之と反對の方向へ聲帶突起と筋肉突起とを廻すので、其二は基底を稍〻內方に、或は外方に移轉する運動である。

(4)、甲狀會厭靭帶は、甲狀軟骨の內面の前隅と、會厭軟骨とをつゞけるものである。

喉頭の靭帶

第七圖



1、甲狀軟骨　2、環狀軟骨　3、氣管第一輪　4、舌骨　5、破裂軟骨及び小角軟骨
6、會厭軟骨　7、中環狀甲狀靭帶　8、側環狀甲狀靭帶　9、中甲狀舌骨靭帶
10、側甲狀舌骨靭帶　11、甲狀會厭靭帶　12、舌骨會厭靭帶　13、環狀氣管靭帶
14、上下甲狀破裂靭帶(聲門帶)

甲、前面
乙、後面
丙、右側面
丁、內面(矢狀斷)

喉頭を他につゞけるもの

(1)、中甲狀舌骨靭帶は、甲狀軟骨の上緣と舌骨との間に緊張するもので、
(2)、側甲狀舌骨靭帶は、舌骨と甲狀軟骨の上角とをつなぐものである。
(3)、舌骨會厭靭帶は、舌骨と會厭軟骨とをつゞけ、
(4)、環狀氣管靭帶は、環狀軟骨と氣管とをつゞける。

聲門靭帶

喉頭の內面に在りて、甲狀軟骨と破裂軟骨との間に亙れるもので、甚だ彈力に富む靭帶で、上下二個ある、所謂聲門帶である。

(1)、上甲狀破裂靭帶は、甲狀軟骨の內面の前隅と、左右破裂軟骨の前緣との間に緊張す。之を上聲門帶と云ふ。

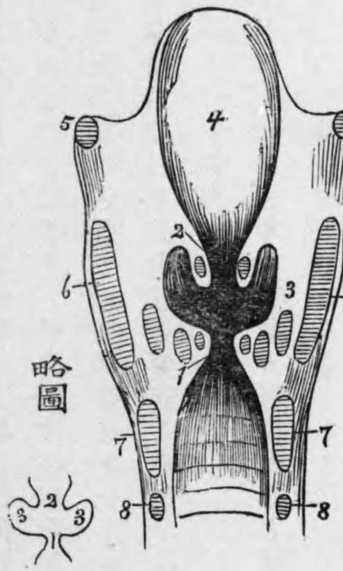
(2)、下甲狀破裂靭帶は、前の靭帶の下部に起り、左右破裂軟骨の聲帶突起に連りて緊張する。之を下聲門帶と云ふ。

此の上下二聲門帶の各〻が、左右破裂軟骨に緊張せる間隙を聲門と云ふ。即ち上聲門帶の間隙は上聲門で、下聲門帶のは下聲門である。就中、最も夥多の彈力纖維から出來て居て、空氣の衝動に遭へば其彈力作用によつて顫動し、調音を生ずるのは、

專ら下聲門帶の作用である。多くの粘膜や皺襞より成る上聲門帶は、其の數多の粘液腺より粘液を分泌して、下聲門帶を潤澤し、下聲門に發したる音を共鳴することがあるに過ぎぬ。故に又、下聲門、下聲門帶を、眞聲門、眞聲門帶と云ひ、上聲門、上聲門帶を、假聲門、假聲門帶とも、僞聲門、僞聲門帶とも云ふのである。聲門帶は常に略して聲帶と云ふが、吾々は眞聲帶を單に聲帶と呼ぶのである。

第八圖

聲門縱斷圖



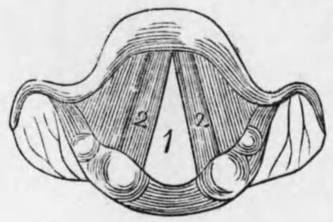
略圖

1、下聲門　2、上聲門
3、モルガニー氏竇　4、會厭軟骨
5、舌骨斷面　6、甲狀軟骨斷面
7、環狀軟骨斷面　8、氣管斷面

此の眞假兩聲帶の間の奥まりたる腔竇を、喉頭竇或はモルガニー氏竇と云ふ。下聲門帶の顫動に餘裕を與へる空地である。

第九圖

咽頭より見下したる聲門

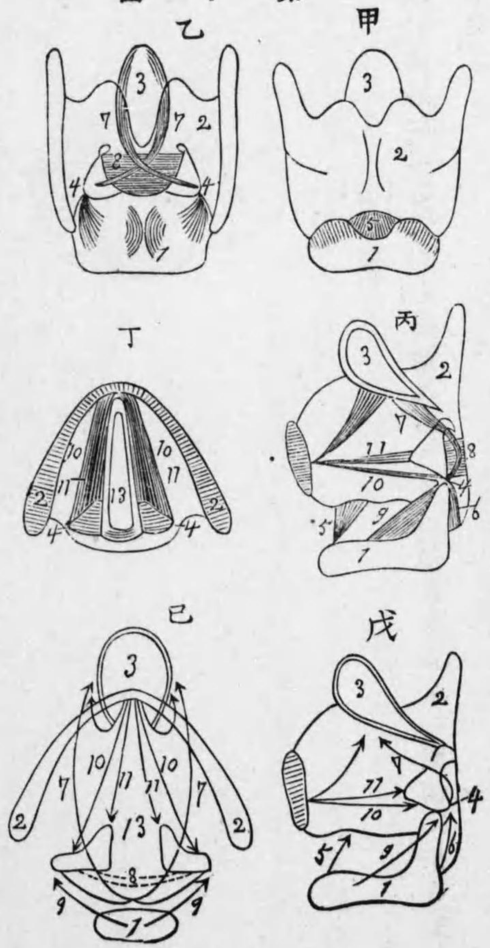


1、聲門
2、聲門帶

(三)　筋

喉頭の諸筋は、之を大別して、前にあるもの、後にあるもの、兩側に在るものゝ三つに別ける。

第十圖



1、環狀軟骨　2、甲狀軟骨　3、會厭軟骨　4、破裂軟骨の筋肉突起
5、前環狀甲狀筋　6、後甲狀破裂筋　7、斜破裂筋　8、橫破裂筋
9、環狀破裂筋　10、外甲狀破裂筋　11、內甲狀破裂筋　12、甲狀會厭筋
13、聲門

前にあるもの

甲、喉頭の前面
乙、同後面
丙、縱斷面
丁、橫斷面
戊、縱斷して見たる筋の想像
己、橫斷して見たる筋の想像

(1)、環狀甲狀筋は、環狀軟骨弓部の前側より、甲狀軟骨の下緣に至る。此の筋の作用は、甲狀軟骨を前下方に引きて、聲帶緊張の主力となる。

聲帶の緊張が、筋の作用によりて、聲帶の兩附着點の距離を增加するに由て生ずることは、護謨を或は張り、或は弛めて之を知られる。聲帶は護謨である。此運動は強聲を發する時、指を喉頭に觸れて容易く知ることが出來る。若し此筋が麻痺する時は、聲帶の緊張が不十分で、聲音は粗糙で、低調となることは、張りたる護謨の薄片を吹いて、其の張り方の强弱に由て、音に高低銳鈍があると同じい理である。

後にあるもの

(1) 後環狀破裂筋は、環狀軟骨板部の後面より、破裂軟骨の筋肉突起に至る。其作用は上圖の如く、破裂軟骨の筋肉突起を、後下方且つ內方に引き、聲帶突起をイの位置からロの位置に移す、是に由て左右聲帶間と左右破裂軟骨の內緣間とに、大なる三角腔を形つくる。此大三角腔は、開放せられた聲門である。

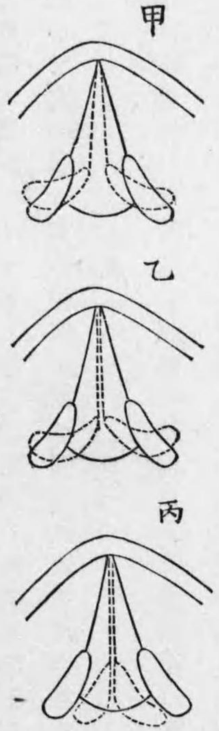
第一十圖

(2)、斜破裂筋は、左右破裂軟骨の筋肉突起より始まり、反對の方向を以て互に交叉して、破裂軟骨と會厭軟骨との間に至る。

(3)、横破裂筋は、一方の破裂軟骨より、横に一方の破裂軟骨に至る。

開けたる聲帶は、環狀甲狀筋の作用(圖甲)と甲狀破裂筋の作用(圖乙)とによりて、柳葉狀に、絲狀に、狹窄せらるゝけれど、なほ左右の破裂軟骨の間に、三角形の空虛がある。之をも閉鎖して、圖丙の如く完全なる喉頭のしめ括りをなすは、此斜横二破裂筋の作用である。故に此筋が麻痺して、喉頭の閉鎖が完全でない時には、發聲に際して、多量の空氣が、破裂軟骨間の空隙より遁れ出づるために、發聲は無力の嗄聲(かれこえ)となる。

第十二圖



兩側にあるもの

(1)、側環狀破裂筋は、環狀軟骨弓部の上緣より、破裂軟骨の筋肉突起に至る。其作用は、破裂軟骨を內轉して聲門を狹窄する。

(2)、外甲狀破裂筋は、甲狀軟骨內面の前隅より、破裂軟骨の筋肉突起に至る。其作用は、破裂軟骨の筋肉突起を前上方に動して聲門を狹窄する。

(3)、內甲狀破裂筋は、甲狀軟骨の內面の前隅より、破裂軟骨の聲帶突起に至る。作用は、發音の際に、破裂軟骨の聲帶突起を接近し、內下方へまはして、著しく聲門を狹窄し、聲帶を緊張する。

元來、聲門は、環狀甲狀筋及び後環狀破裂筋の作用に由て、緊張せられ、狹窄せらるゝものではあるが、此時にはなほ第十二圖の甲の如く、凹緣を呈して、柳葉狀の間隙があるものである。其を更に十分に緊張して、同圖の乙の如き絲狀とするには、此の內外二甲狀破裂筋の作用によらねばならぬ。

此の筋はまた、聲帶の彈力組織內に入込むがために、音の高さの差の少ない發音には、聲帶の緊弛を加減して、自在に之に應ずることが出來るし、又聲帶の顫動に必要なる抵抗力を與へることが出來る。此筋は又、其二三纖維が聲帶の彈力組織內に終るものもあるために、聲帶區々の部分を種々に張り緩めて音を變化させられる。

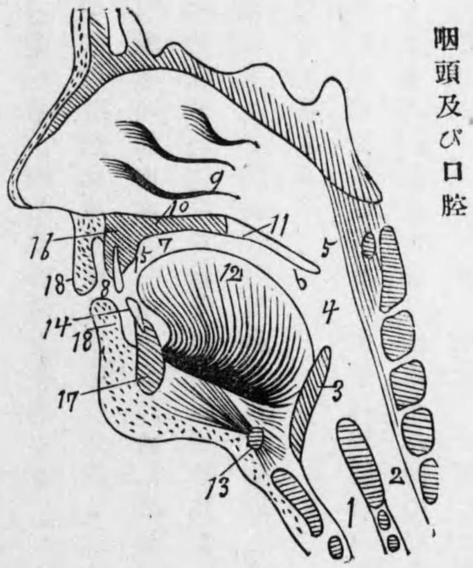
以上の三筋は、或は聲門を狹窄し、或は聲帶を緊張して、音を明瞭ならしむるものなれば、若し此等の諸筋が麻痺する時には、明に鋭い聲音は、聞くことが出來ぬ。

(4)、甲狀會厭筋は、同じく甲狀軟骨の內面の前隅より會壓軟骨に至る。其の作用は、喉頭のしめ括りを補助する。

第四節　咽頭

咽頭及び口腔

第十三圖



咽頭は、鼻腔、口腔の後下部より、喉頭に至るまでの間である。形狀は、扁平なる漏斗狀で、其の上方は後鼻孔に由て、直に鼻腔につゞき、前上方は咽峽によりて口腔に接し、前下方は喉頭口に通じ、下端は直に食道に接す。

1、喉頭腔　2、食道　3、會厭軟骨　4、咽頭
5、咽鼻腔　6、咽峽　7、固有口腔　8、前庭
9、鼻腔　10、硬口蓋　11、軟口蓋　12、舌
13、舌骨　14、齒　15、齒槽突起　16、上顎骨　17、下顎骨　18、上下唇

第五節　口腔

口腔は、顏面の下部で、上下二顎骨の間に在り、形狀は甚だ不齊なる空洞で、分ちて、前庭及び固有口腔とす。齒の物を嚙み、舌の物を味ふなど、皆それ〳〵に特殊なる任務を擔當する外に、喉頭より來た音を共鳴し、調節する等、聲音に甚だ大なる影響を與へるものである。

(一)　口唇

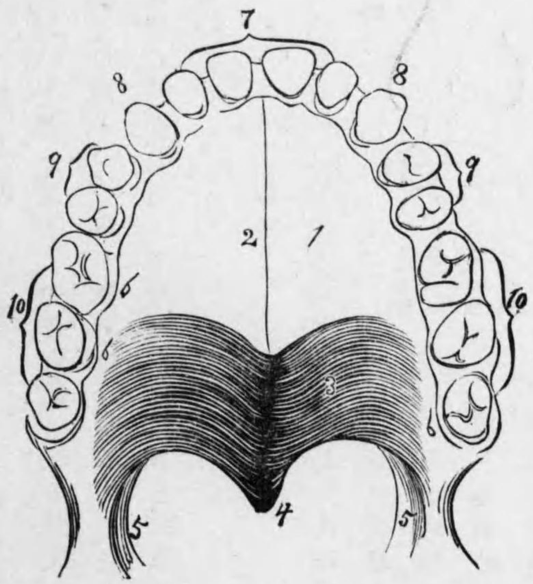
前庭と云ふは口腔に對する垣である、而して此垣は、二重であつて、其外垣は唇である、唇は所謂外口を構成するものである。此の上下兩唇の相會するところが口角である。同じ外垣の中でも、唇が面垣であるから、頰は側垣である。頰は唇の一系で、咀嚼の際に、飲食物の外へ洩れ出づるを防ぐと同じく、談話に際しては、聲音の漫に散亂するを防ぐのである。

第十四圖

（二）齒

唇の外垣に對して、內垣は齒である、齒は食物を咀嚼する要具である。また聲音調節の要具である。之を齒冠と齒頸と齒根との三つにわける。齒冠は齒の露出せる部分で、齒根は齒の沒入せる部分で、齒冠と齒根との境を齒頸と云ふ、齒冠はなほ之を齒尖と齒緣とにわける、齒尖は齒冠の咀嚼面で、齒緣は齒冠の側緣である。

第十五圖



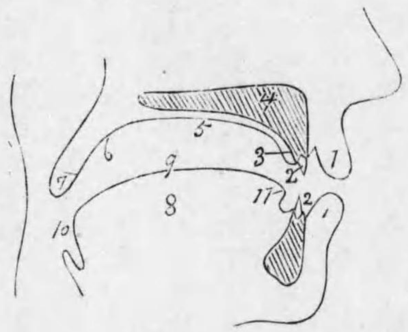
1、硬口蓋　2、同縫線　3、軟口蓋
4、懸壅垂　5、口蓋弓　6、齒槽突起
7、門　齒　8、犬　齒　9、小白齒
10、大白齒

上顎、下顎骨の一部で、齒根の嵌入せらるゝ溝を成す骨部を齒槽といひ、其外部の隆起せる部分を齒槽突起と云ふ。

完全なる大人の齒は、門齒上下各〻四枚づゝ顎骨の前部に在り。犬齒は門齒の左右に各〻一枚づゝ、即ち上下に各〻二枚、小臼齒が犬齒の左右に各〻二枚、即ち上下各〻四枚づつ、大臼齒は小臼齒の左右に各〻三枚、即ち上下に各〻六枚づゝ、合せて上下に各〻十六枚づゝ、即ち三十二枚の齒があるべき筈である。

アーチ形なる齒の行列から咽峽に至るまでの間が固有口腔である。

第十六圖



1、唇　2、齒
3、齒槽突起　4、上顎骨
5、硬口蓋　6、軟口蓋
7、懸壅垂　8、舌
9、舌　面　10、舌　根
11、舌　尖

固有口腔は、口蓋を以て天井とし、舌を床板とする。前は齒の後側に始まり、後は咽峽によりて直に咽頭腔に接するのである。

（三）口蓋

口蓋は口腔の天井張りで、硬口蓋と軟口蓋との二部から成る。

硬口蓋は骨質にして、强厚なる粘膜につゝまれて、中央に縱の縫目がある。今、指を齒槽突起の邊に壓しつけ、漸々に奥の方へ滑り行くに、硬き手ざはりを感ずる部分は此の硬口蓋である。然るに、口蓋の半程よりは、忽ち怪しく柔軟なる手ざはりを感ずる、之が軟口蓋である。軟口蓋の後端に、圓形の突起が下方に垂れて居る、之を懸壅垂と云ふ。俗に咽豆（のどまめ）と云ふものである。懸壅垂は顫動して一種の共鳴をなすが上に、鼻への門番を勤める重要の機關である。之が前下方に壓し下げられる時は、鼻への道が開けて鼻音發し、後上方に壓し上げられる時は、鼻への道が塞りて口音を生ずる。彼の口を閉ぢて呼吸する時の如きは、この懸壅垂が前下方に壓し下げられてあるのである。懸壅垂は、其の各側に前後二條の皺を生じて、舌及び咽頭の方へ移り行く、之を口蓋弓と云ふ。

（四）舌

舌は、肉質にして楕圓形をなし、口腔の下底にありて、口腔の床板をなすものである。運動きはめて自由にして、言語及び消化の調節をなす。發音機關部としては、之を別ちて舌根舌面舌尖の三つとし、外に下面と左右側緣とある。

舌根は、會厭軟骨の前部に當り。舌面は舌の上面で、穹窿狀をなし、中央に縱の溝あり、其後端は舌根につゞき、前端は舌尖である、便利上から舌面を前中後の三つに分け、前部を舌頭と云ひ、中舌面を稱して單に舌面と云ふことがある。舌尖は舌の狹小の角點部で、知覺が尤も鋭敏である、以上の位置と境界とは、先に第十五第十六圖に掲げた故に此には略する。

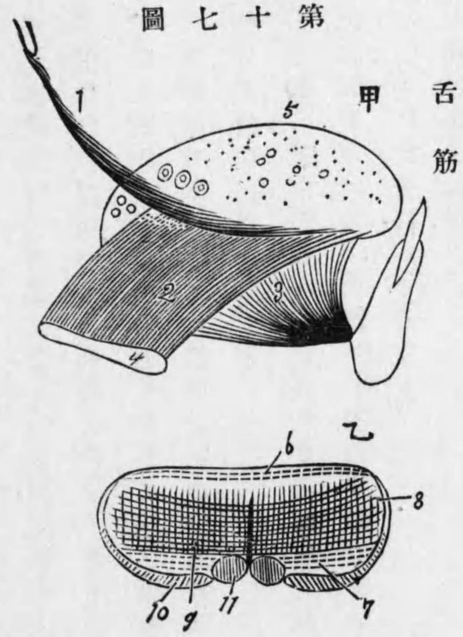
舌の運動の甚だ自在なるは、柔軟なる肉質であると、方向の異なる種々の筋に富むとに原因する。左に列記する筋の種類の多いのを見たなら、如何に運動の自在なるべきかは知られるであらう。

(1)、上縱舌筋は舌面に、

(2)、下縱舌筋は舌の下面にあつて、共に舌根から舌尖に走る。

(3)、横舌筋は、横に他側から他側に至り、

第十七圖



甲、側面　乙、横斷面

1、莖狀舌筋　2、舌骨舌筋
3、頤舌筋　4、舌骨
5、舌面　6、上縱舌筋
7、下縱舌筋　8、横舌筋
9、鉛直舌筋　10、舌骨舌筋斷面
11、頤舌筋斷面

(4)、鉛直舌筋は、舌面より舌の下面に至り、

(5)、莖狀舌筋は、舌の兩側緣に沿うて舌尖に至る。

(6)、舌骨舌筋は、莖狀舌筋と頤舌筋との間に在つて、舌骨に始まり舌の下面に走り、

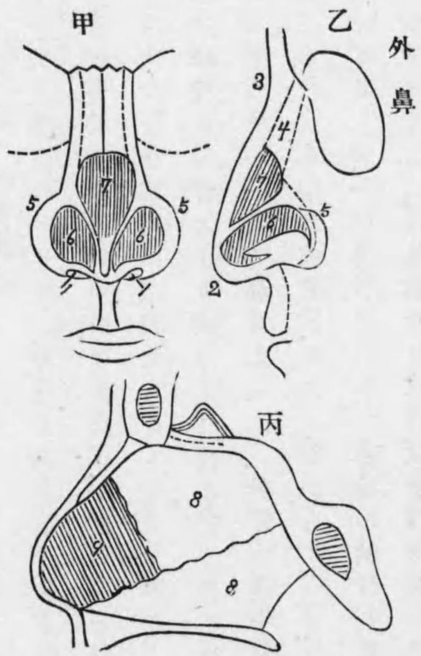
(7)、頤舌筋は、中部に在つて、下顎の頤の尖りより放線狀に廣がりて、舌の下面に達す。

舌骨は、喉頭の上に位して舌根に在り、形狀は稍〻半輪狀で、凸部は前へ向く。指もて喉頭より上を壓し上げて、少しく上に一の骨を探りつけられるのが、是である。靭帶によつて喉頭に連り、諸舌筋の基礎となるものである。

第六節　鼻腔

鼻は顏の中央にあつて、一部は外に突出し、一部は内に腔洞をなし、嗅器を藏めて氣

第十八圖



甲、前面　乙、側面　丙、鼻中隔

1、前鼻孔　2、鼻尖
3、鼻根　4、鼻骨
5、鼻翼　6、鼻翼軟骨
7、三角軟骨　8、硬骨鼻中隔
9、鼻中隔軟骨

體の香臭を嗅ぎわける外に、鼻音と云ふ重要なる聲音の一要素を成すものである。即ち懸壅垂が前下方にあつて、後鼻孔が開けたる時は、呼吸は之に由てせられ、聲は此より出でて鼻腔内に共鳴せらるゝものである。之を内、外の二鼻にわける。

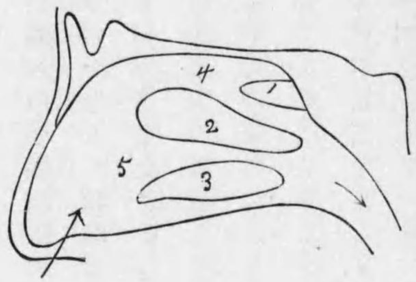
外鼻は、硬骨と軟骨とより成つて、外皮に包まれて居る。

硬骨は、顔面骨の一支で鼻骨と云ふ。軟骨は、鼻中隔軟骨と鼻翼軟骨とで、硝子樣の軟骨である。鼻中隔軟骨は、更に二部からなつて、一は硬骨鼻中隔の前部をなして、稍〻方形なるもの、一は鼻骨につきて鼻頭の軟骨をなすもので三角形である。故に三角軟骨とも云ふ、鼻翼軟骨は三角軟骨の兩側に在り、彎曲して鼻翼(一名小鼻)を作る。

内鼻は鼻腔内で、強厚なる粘膜に覆はれて居る。

鼻腔は前口を外鼻の下端に開き、後口を咽頭に開いて、口腔の上に在る不齊方形の腔洞である。鼻中隔と云ふ硬軟骨から成れる壁で、左腔右腔の二室をしきつて居る。若し、口腔を下座敷に譬へるならば、鼻腔は口蓋と云ふ床板を隔てた二階座敷である、即ち口蓋は、口腔の天井張と鼻腔の床板とを兼ねて居る。

第十九圖



此の左右兩鼻腔の側壁から鼻中隔に對して、骨質の粗鬆なる甲介狀のものが三つ出て居る。之を上甲介、中甲介、下甲介と云ふ。是に由て、鼻道は自から上鼻道、中鼻道、下鼻道にわかれる。

上鼻道は、上甲介の直下で、彼の香臭を嗅ぎ分ける感覺は此邊である。之を嗅部と云ふ。中鼻道は中甲介と下甲介との間で、下鼻道は下甲介と下底即ち口蓋骨との間である。此の中下二鼻道は單に空氣を通じて、呼吸する處である。故に之を呼吸部と云ふ。後鼻孔によりて、咽頭より來る聲を共鳴して、鼻音を成すは主として此の呼吸部である。

不完全ながらも、これにて胸廓内から口唇鼻に至るまで、發音機關の一斑を說いたつもりである。此より、此の發音機關に生ずる各種の音を說かう。

第八章　喉音

聲門單に聲門と云ふは下聲門である。以下同じい。）が、廣く開いて居る時には、咽頭や口腔内の摩擦密閉に由らでは、生ずる音は無いけれども、靭帶や筋や軟骨の作用で、帶門が著しく狹窄せられて、殆ど密閉せられる時には、肺、氣管、即ち風管より來た空氣が聲帶を衝き動して、其の道を求むるにいたる、然るに、尤も彈力に富みたる聲帶は、呼出氣の衝動を受けて、或は緊張し、或は弛緩して、規律ある顫動をなすものであるが、此の顫動によりて音の聞ゆるものを聲と云ひ、聲帶の顫動せざるもの、即ち廣開せる聲門を過ぐるものを息と云ふ。是等の二つが、別に副管の或る局部に摩擦せられ、密閉せらるゝことなくして、吾人の耳に聞ゆるものを喉音と云ふ。ア｜イ｜ウ｜エ｜オの五母音は、聲から成つた喉音である。息から成る喉音は、國語には存在して居らぬ。ハ行父音hは、やゝ息の喉音に近いが、舌根と軟口蓋の後部や、口蓋弓との間に於て、輕微ながらも摩擦せらるゝ以上は、純粹な喉音では無い。

此くの如く、喉音の聲の音、息の音は、聲門の狀態に關することである故に、之を試みるには簡單な方法がある。大指、食指の二指で、甲狀軟骨の隅角の上を強く壓しつけて、之を發音するに、指頭に顫動を覺える音と、覺えぬ音とがある、覺える方が聲の音で、覺えぬ方が息の音である。

なほ一種の喉音がある、其は空氣の通り路に於て、聲門が遽に密閉し、遽に破裂することがある。此際に於ては、他の口腔内に於ける密閉と同一なる結果、即ち破裂音を生ずる。此の聲門密閉に由て生ずる音の、尤も普通なるものが咳音である。若し、聲門が狹められるのみで、横破裂筋、斜破裂筋の作用が十分ならず、なほ左右破裂軟骨の間に、三角狀の空虛がある時は、風管より送られた空氣は、多く此處より遁げ去りて、聲帶を顫動するほどの力をもたぬ。之を吁語さゝやき音と云ふ。即ちさゝやき音は、聲の音と息の音との中間狀態に生ずるものである。此く言へばとて、聲の音、息の音、さゝやき音は、比較的の名であることを忘れてはならぬ。是故に、

第廿圖

精密に言へば、さゝやき音、息の音が、絶對に顫動が無いと云ふことでは無い。有るけれども、輕微で、之を認識することが出來ぬ故に、比較上無いと云ふのである。殆ど無い息の音から、次第に呟き音になる。けれどもまだ認識されない。次第に著しくなつて、筋肉感覺の上に、明に認識される樣になつたものが聲の音である。されば、呟きと聲との間にも、呟きと息との間にも、無數の中間喉音がある。彼の嗄音は、呟きのやゝ聲に近いもので、弱き呟きは、息に近いものである。

第九章　有聲音、無聲音

喉音は、母音の如く、聲其のまゝで、口、鼻腔の或る局部の調節を受けずに音を成すこともあるが、普通の場合に於ては、更に咽頭、口、鼻腔に生ずる音の感化を受けて、種々の音を成すものである。之を父音と云ふ。

されば、父音には、聲から成るものと、息から成るものとの別がある。聲から成るものを有聲父音と云ひ、息から成るものを氣息音或は無聲父音と云ふ。例へば、同じに、密閉した唇を破裂する音ではあるが、息の音ですればパ行の父音(p.)となり、聲の音ですればバ行(b.)となる。同じく上門齒尖と舌尖との摩擦音ではあるが、聲ですればザ行(Z.)で、息ですればサ行(S.)である。即ちサ行パ行は無聲音でザ行バ行は有聲音である。母音は無論有聲音である。

有聲音、無聲音は、また呟き音で語ることが出來る。就中有聲音は呟き易い。

有聲音 ｝母音
　　父音

無聲音―父音

パ行、サ行の父音は、此の如く無聲音であるが、單音のまゝで、國語音に存在することは稀で、常に有聲音なる母音と綴合して用ゐられるものなれば、精密な注意を以てしなくては、其の無聲音なることを認め難いものである。

第十章　口音、鼻音

音はまた、其の出づる場處に由て、口音と鼻音との二つに分けられる。

口音は、懸壅垂が後上方に壓し上げられるに由て、鼻への通路が遮斷せられて、聲も

しくは息の全部が、口から出づる音である。

鼻音は、懸壅垂が前下方に壓し下げられて、鼻への通路が開けるに由て成る音である。此際口腔内の或る局部を密閉して、息や聲の流出を防ぎ、全部を鼻より呼出しして、完全なる鼻音をおすものである。是故に鼻音發生に際して、燭光を前鼻孔の下に置く時は、火光の動搖を見、冷かなる鏡を置く時は、曇りを生ずる。マ行ナ行の父音等は皆鼻音で、母音及び多くの父音は皆口音である。

此他に、大部分は口音であるが、懸壅垂の壓し上げが完全で無いために、聲の一部分が鼻へ洩れる音がある。之は後の鼻化母音のところに細しく述べよう。

母音
父音　口音
父音—鼻音　鼻化母音

第十一章　續音、斷音

サ行ザ行ファ行ワ行等の父音は、或る局部の狹窄門に、息或は聲が摩擦せられるので、其局部を移動し、變更しなくて、聲と息との續く限りは、其音は連續するものであるが、タ行ダ行パ行バ行等の密閉音は、聲或は息が、流出の途中を密閉遮斷せられた局部の破裂に生ずる音なるが故に、其破裂の瞬間にきこゆるのみで、之を再生するには、再び同じ密閉狀態を作りて、之を破裂しなくてはならぬ。之を斷絶音即ち斷音と云ひ、前のを連續音、續音と云ふ。母音は無論著しい續音である。

續音　母音
　　父音
斷音—父音

第十二章　母音

母音は、吾國語音では、唯一なる喉音である。聲門帶で規律ある顫動を受けたる音が、副管部に共鳴せられて、吾人の耳に聞ゆるものを母音と云ふ。母音は、種々の音色を得るために、口腔内に共鳴されるが、決して或る局部に於て、吾等の聽き得られ、感じ得られる樣の摩擦を生ずるが如きことは無い。若し、有つたならば、其は母音

では無くて父音である。此の區別法は、極めて重大なる要件である。後のヤ行ワ行が、頗る母音に近い音であるけれども、父音たることを免れないのは是が爲である。

然らば、母音は如何なる特質で、他の音から區別されるかと云ふに、精密に之を論じたなら、隨分大なる問題であるが、大略左の四條件を基として、他とわけられて居る。

(1)、有聲音である。

母音は、風管より送り來れる空氣が、密閉せる聲帶を衝動して、顫動するに由て生ずるものなれば、有聲音であると云ふことは、母音の大なる特質である。母音はこの特質によつて、他の無聲音、氣息音から區別されて居るが、是れだけでは、同じく有聲音でありながら、父音なるバ行ヤ行ワ行マ行音と區別することが出來ぬ。

(2)、母音は連續音である。

規律ある聲帶の顫動に原由する母音は、風管より送り來る氣息の絶えぬ限りは、絶えず顫動を續ける音であると云ふことを以て、同じく有聲音ではあるが、密閉音なるガ行バ行ダ行から區別せられる。何とあれば、是等の音は、密閉せる局部の破裂

に由て一瞬間に聞ゆる音で、決して連續音で無く斷音である。然るに、母音は續音であると云ふ特質を以て、同じ有聲音中の斷音から區別される。然し、是だけでは、同じ有聲音で、續音なるワ行ヤ行ラ行ン等と區別し難い。

(3)、母音は純粹なる喉音である。

聲に成りたる母音は、上聲門や咽頭、口腔の間を通りぬけて、これに共鳴せらるゝが、決して、此處に於て聽き得べき摩擦音を生ずることは無いと云ふ特質で、同じく有聲音で、續音ではあるが、ザ行ワ行ラ行と區別せられる。就中、ヤ行ワ行は、半母音などと云ふ人もあるほどで、甚だ母音に近い音ではあるが、高められたる舌頭と口蓋との間に、摩擦音のかすれが聽かれるのみで、ヤ行(y)は父音であり、兩唇の間に明瞭なる摩擦音が認められるに由て、ワ行(w)は父音たるを免れない。久しく同一に視られて、今日では區別のない、母音のイ、エ、とヤ行のイ、エ、母音のウとワ行のウとの如きも、此の心得で、精密に考へ比べたならば、其の相違が知れる。即ちイエ(家)のエの如きは、今でもヤ行音に近く、スウル(据)、ウウル(植)のウには、今でもワ行音が存して居る。ラ行父音も、有聲音で、續音であることは、母音と同じであるが、やはり口蓋と舌

頭との摩擦音で、しかも聲帶の顫動に成りたる聲が、更に懸壅垂を衝き動かして、一種の顫動を生ずるに原因する音であれば、決して純粹の喉音では無い。決して母音と混同は出來ぬ。

(4)、母音は鼻聲を雜へざること。

母音の發生に際しては、懸壅垂は、必ず後上方に壓し上げられて、後鼻孔を塞ぐが故に、聲や息は、決して鼻に洩れることが無い。必ず口腔から出かければならぬ。此點に於て、同じく有聲音で、續音なる鼻音と、區別せられねばならぬ。加之、鼻音は、唇に舌頭に、舌根に、口の道を遮られるので、口腔局部の影響を受けぬものとは言はれない。彼の鼻化母音の如きは、習慣上懸壅垂の作用が十分で無いために、聲の大部分は口腔より出て、且つ、殆ど母音の特質を有すれども、其の一部分が鼻へ洩れる(東北の方音には多く此例が見られる)ので、大體に於ては母音であれど、唯、鼻にかゝると云ふために、純然たる母音でないのである。

母音は、此くの如く、四つの特質によりて、他の音と區別せられるので、母音と云ふ以上は、此の特質を具へねばならぬ。

第一節　母音の音狀態

母音と云へば、同じく四つの特質を具へて居るのではあるが、同じ母音でありながら、ア、イ、ウ、と音色の異なるは、主として共鳴室の形に原因する。

母音の共鳴室は、モルガニー竇、上聲門、咽頭、口腔であるが、形狀に變化をそなへて、最も重要なる共鳴部は、口内の腔洞である。均しい聲帶の顫動に成りたる音も、此處に共鳴せられて、種々の音色を生ずるのである。即ち口腔の形が種々に變るが如く、母音に種々の異なりたる音がある。此くの如く口腔は、形を種々にかへると云ふものゝ、齒や口蓋などは、其形を變じて共鳴室を變化させることは出來ぬので、共鳴室の形狀變化は、主として、舌の運動と唇の開閉、即ち開口狀態に由らねばならぬ。

(1)、舌の運動

口蓋は、口腔の天井で、舌は其の床板である。此天井は、固定したまゝで變形することは無いが、床板は或は高まり或は低まることが、自由自在である。即ち舌の高まりは、低き共鳴室を作り、舌の低まりは、高き共鳴室を作る。舌の前部の高まりは、奥廣き共鳴室を作り、後部の高まりは、前廣き共鳴室を作る。

此くの如く、舌の新しい狀態が新しい共鳴室を作り、新しい共鳴室は、新しい母音を作るので、言を換へれば、舌の新しい狀態は、新しい母音を作るのである。

舌の運動が、地平動と鉛直動とに區別される。地平動とは前後への動きで、鉛直動とは、地平動に對して、直角をなす上下への運動である。

地平部に成る母音は、更に前部に關するものと、後部に關するものとに分けられ、其の中部に成るものをも併せて、

後母音
中母音
前母音

とす。例へば、ア、イ、ウ、エ、オ、の五母音の中で、イは舌面の前部に成る母音で、ウは後部に成る母音で、アは中母音で、エはイとア、オはウとアとの中間母音である。

鉛直部に成る母音は、舌の高低に生ずるので、口蓋を距ることが、遠ければ遠いほど、其母音は低母音で、近ければ近いほど、其の母音は高母音である。即ち吾々は、其の高度に於て左の三母音を區別する。

高母音
平母音
低母音

例へばイ、ウは高母音で、アは低母音で、エ、オは平母音である。先輩伊澤氏の視話法には、アエを平母音として、オを低母音とされてあるが、アは最も開口の大なる母音で、口角の大なる、腮角の大なる母音である。是れ即ち低母音であるまいか。イ、ウは口角の最も小なる母音で、即ち高母音である。オは兩唇の距離がアに於けるより近く、ウに於けるより遠くて、腮角亦アに於けるより小に、ウより大である。即ち是れ舌の高さがアに於けるより高く、ウに於けるより低い平母音ではあるまいか。

是等高平低の三狀態が、後中前のいづれの母音にも適用されるので、同じ後母音でも、高母音も、平母音も、低母音もあり、中母音にも、前母音にも、それ〳〵に高平低がある故に、母音を確定する舌の位置に於て、九個の基本狀態があることになる。

高後母音　　平後母音　　低後母音
高中母音　　平中母音　　低中母音

高前母音　平前母音　低前母音

例へば、アは中低母音で、イウは同じく高母音ではあるが、就中、イは前母音でウは後母音である。エオは、同じく平母音ではあるが、エは前母音で、オは後母音である。此くは云ふものゝ、舌の狀態は、全く此の九種に限るものなどと早合點してはならぬ。前後にでも、上下にでも、微細の差別は千萬無量で、精密に之を數へたてたならば、數へ盡されぬ無限の狀態がある。（此は次の中間母音の處を見合せてほしい。）其中で、學習の都合上、此九種の狀態を基本とし、標準とするのである。

ついでに言うて置くが、母音は、舌の狀態に關することが大なるものなれば、練習を積んで、舌の高低、進退を自由ならしめ、隨意の母音が發せられる樣になつて居ることは、音を學ぶ上には大切なることである。舌の練習は、初めに、舌の前部を出來るだけ低く置き、次第に高めて平位に置き、更に高めて殆ど口蓋に着くばかりにし、次第に低めて平位を取り、低位を取る母音狀態を反覆し、之に熟練したならば、中部にも、後部にも、之を試みなければならぬ。其次には、舌の位置を高めたるまゝ、前部より次第に後部に、後部より次第に前部に、進退せしめ、低部にも、平部にも、之を試み、或は高前母音より、斜に平中母音にうつり、低後母音より高中母音狀態に移ることなども、十分に練習して、基本母音は、いづれでも自由に發生せられるのみならず、自己の舌狀態は、今何母音の狀態に在ると云ふことが、音を發せぬ前にわからなくてはならぬ。

基本母音は、此くの如く九個あるが、各國語は、皆此九個を語りつゝあると云ふことは無い。吾國語では、現に五つの母音があるのみである。

(2)開口

前にも說いた如く、母音の差別は、舌の狀態に原因し、舌の狀態は、腮角の大小等に關係する。而して、腮角の大小は、上下兩唇の距離に遠近あらせ、口角に大小あらしむるもの故に、母音の差別は、また口の外形に關係し、相伴ふものである。熟練したる啞者が、其の聲音は聽かれぬに拘らず、單に口の外形によつて、音の幾分かを知るが如き、以て證するに足る。

口の外形は、高さと廣さに就いて區別せられる。高さとは、上唇と下唇との距離で、即ち口角の大小である。廣さとは、口の橫徑で、口角點と口角點との距離である。

ァは、高さが最も大に、廣さが最も廣い母音で、ィは、高さは最も小に、廣さも亦ァよりも狹く、ェは、高さと廣さに於てァとィとの中程にあり、ゥは、高さは殆どィと同じく、廣さは高さと同じ程に狹くて、小圓形にすぼみたる外口をなし、ォはゥとァとの中間の狀態にあつて、やゝ大なる圓形を呈する。

第二節　廣母音、狹母音

母音に於ける舌の狀態は、既に之を述べたが、尙母音を發するに當りて、舌の局部に、凝固や緊縮を感ずる音と、然らざる音とがある。凝縮を感ずるとは、聲の流出が舌の或る一點に集注するので、ィの如き母音には、特に著しく之を感ずる。此くの如き母音を狹母音と云ひ、然らざるを廣母音と云ふ。視話法には、吾國語音ではァ一つが廣母音で、其他は皆狹母音であると云はれてある。

第三節　圓口母音

口の外形が、ゥ、ォの母音を發する時には、圓形を呈することは上に述べたが、尙著しく圓形をなすのみならず、唇と齒との間に含まるゝものあるが如く、殆ど齒の前に一個の共鳴室を增加した如く、唇の凸出した外口の狀態に於て、廣狹諸母音の發せられるものを圓口母音と云ふ。

九つの基本母音が、一つ毎に廣狹の二種類をもちて、十八の母音がある。此の十八の母音が、更に圓口せられたものと、然らざるものと有るので、都合三十六の母音があることになる。其の母音は左の通りである。

狹母音			廣母音		
高前	高中	高後	高前	高中	高後
平前	平中	平後	平前	平中	平後
低前	低中	低後	低前	低中	低後

圓口狹母音			圓口廣母音		
高前	高中	高後	高前	高中	高後
平前	平中	平後	平前	平中	平後
低前	低中	低後	低前	低中	低後

此の三十六の母音が、歐米の聲音學者の、基本母音とおつて居るのであるが、併しすべての母音が、英とか、佛とか、獨とかの國語に現在するものでは無い。スヰート氏の統計では、英語で十五の母音、佛語が十三、北日耳曼語が十六、羅甸語が十一、希臘語

では八つで、而して、吾國語音は更に貧しくて、僅に五つである。

第四節　母音各論

是からア、イ、ウ、エ、オ、の五母音に就いて、一つづつ研究して見よう。

ア

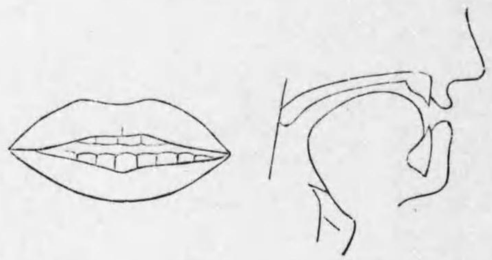
第廿一圖

アは廣母音で、發音に際し、或る局部の凝縮を感ずるが如きことは少しも無い。舌の中部に於ける低母音で、舌は口腔の下底に在り、之より更に前母音に進めばエ、イの母音となり、後母音に進めばオ、ウの母音となる。開口は第廿一圖の如く、縱徑に於ても、横徑に於ても、最も廣大なる母音である。

イ

イは狹母音で、舌の前部が殆ど口蓋に着くばかりに高まりたる狀態に、共鳴せらるゝ高前母音である。前母音であることは同一であるが、此の高まりが稍、低まりて、平母

第廿二圖



エ

音の狀態をなす時は、エを生ずるのである。開口はきはめて扁平で、兩唇の距離は著しく接近する。

東北の方音では、此母音は、キ、シ、チ、の如き綴音をあつす時には、明に存在を認められるが、單音としては存在して居らぬので、舌狀態は稍、低まりて、エとあり、若しくはイ、エの中間音、即ちイより低くエより高き前母音に轉訛して發音せられて居る。是等はもとより訂正すべき方音である。

先づ開口の外形を示して、之に倣はしめ、己むを得ずば、指もて其の唇を抑制して、適宜の外形を作り、舌面の前部を口蓋に着ける程高めて發音させることを練習して、之を矯正しなければならぬ。

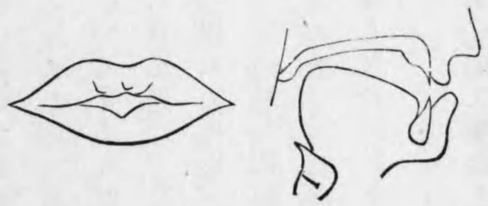
イに同じく狹母音で、舌面の稍、前部に關係して發するが、イよりは稍、後部で、イとアとの中間母音である。高さに於ても、イとアとの中間狀態で、平前母音であるが、特

にイの口蓋狀態に近いのである。開口に於ても、第廿三圖の如くイとアとの中間狀態である。

第廿三圖

イとエとは、此くの如く、舌面の前部が口蓋に接近するに由て成る母音である故に、之を口蓋母音と云ふ。就中、イは、エより更に著しく口蓋に近く持ち來られる母音である故に、著しい口蓋母音である。

第廿四圖



ウ

ウも狹母音で、舌の後部が、軟口蓋に着くばかりに高まるに由て發する高後母音である。其後母音であることはオに同じいが、オは舌の高まりが、ウに比べてやや低く、平母音狀態を示して居る。唇は最も前方に凸出し、開口は、圖の如く、縱徑、横徑共に最も小にして、殆ど小圓形にすぼんで居る。此母音も、奥羽の方音では、ウ

とオとの中間音、即ちウより低くオより高き後母音として、發音せられてあることがある。

第廿五圖

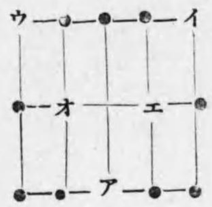
オ

オもウと同じく狹母音で、舌の後部に發するが、精密に云ふとウほど後母音では無く、アより後母音である。ウの高母音なるに對して、此は平母音であるために、舌の後部がやゝ低まりて中程にある。唇はウの如く凸出しない。開口は、上圖の如く圓形を呈して居ることは、稍ウと同じいが、ウより大きい。然し、アの樣に大きくは無い。

此のウ、オの二母音は、開口の外形が圓いために、圓口母音であるが如く誤解せられ易いが、圓口母音はウ、オの二母音に比しては、著しく緊りある圓形を帶びるのみならず、唇は著しく凸出せられて、殆ど齒の前に一の共鳴室を作りて、口腔内に修飾せられた母音が、更に齒と唇との間に於て共鳴せられる

ものである。

イ、エ、の口蓋母音に對して、オとウとは唇の圓みに於て特徴のあるところから、唇母音とも云はれる。就中、ウは緊りあるすぼみに於て、著しい唇母音である。上に說いた母音の舌狀態を圖で示せば。



の如くで、エ、オ、は高低に於ても、前後に於てもイとア、ウとアとの中間狀態で、開口狀態も同樣である。

第五節　中間母音

同じ前母音でも、エはイより後部であり、平母音とは云ふものゝ、エはアよりイに近いが如く、精密に云ふ時は、舌の上下進退の運動や、開口の大小廣狹の差別の無限であるに隨ひて、共鳴室の形狀は無限である。たとひ、聲門の廣狹や、聲門の緊り弛みは同一であるにせよ、是等口、唇、舌等の位置形狀等の度合を精密に分別し、計算したならば、音の差別は、實に無限で無ければならぬ。如何なる精密な機械でも量り盡されぬ無限の差別がある筈である。同じ人の發

音でも、今發したアと、次に發するアと、音色に於て、音狀態に於て、大體同一であることは云ふまでも無いが、精密に同一であるか、どうかは知れるもので無い。否、精密に同一なる音は、同じ一人でも發し得ることを期せられまい。況や副管部の廣狹とか、其內面粘膜の厚薄とか、聲帶の廣さ長さ、舌の樣子、唇、齒の形おどの、各、異なる人と人とが、精密に同一なる音の發し得らるゝことは殆ど無い筈である。約言すれば、人の發音狀態の差別は無限で、更に人と人との發音狀態の相違は無限である。隨ひて、聲音の差別は無限である。併し、吾々の不精密なる耳は、此くの如く極細極微の音相違を、精密に聽き分けることが出來ないので、數十年の經驗を積んだ老練の學者でも、其耳に聽き分けられる音は誠に少ないのである。

聲音學の上では、三十六の基本母音が定められて居る。三十六といへば、吾國語音の如く、四つ五つの母音しか有たぬ貧しい目には、甚だ夥しい樣ではあるが、之を無限の母音に比ぶれは、蒼海の一粟、九牛の一毛と云うても足りない。されど歐米の何處の國語でも、此の三十六母音中で、其國語音に存在する標準母音は、半數以下であることは前に說いた。

吾國語音でも、東北、西南地方の方音などをも併せたならば、尙有るでもあらうが、兎に角、現今國語の標準音と認められて居る母音は僅に五つである。此の僅々五つの母音が、他の父音と綴り合せられて綴音となり、或は單音のまゝでも存在するのである。

實際吾々の發し得らるゝ母音が無限である故に、吾々の發する母音が、動もすれば、此の五つの基本母音の外に出づることのあるは、決して怪しむに足りない。寧ろ當然のことである。例へば吾々の前に出したる舌を、高め低める度合は無限である中に、漠然と舌の高きものは高母音イ｜であると定め、稍〻低きものを平母音エ｜と定めて、其他の無數の狀態は、捨てゝ之を取らないのではあるが、實は東北の方音なる、イ｜程舌を高めず、エ｜ほど舌を低めず、舌を曖昧なる中間に置く音がある。エ｜より低き母音も無くてはならぬ、更に前母音イ｜、エ｜と中母音ア｜との間にも、ア｜と後母音ウ｜、オ｜との間にも、ウ｜とオ｜との間にも、それ〴〵に母音が存在して居るのである。音韻統一の上から、是等の母音を中間母音略しては間音と云ふ。

苟も聲音に志あるものは、此間音を等閑に看過してはならぬ。この間音が、實に實に音變化と云ふ重大なる作用の階段である。例へば

たゝかいて(戰ひて)……たゝこーて
あいて(逢ひて)……おーて

になるが如きも、初めから突然ア｜イ｜の母音が、オー｜にあるものではない。必ず互に近い中間音になつて、次第次第に相近き、其の區別が極めて微細で認識し難い音となつて、遂に全く變化するのである。從來の語學者が、猥りに之は通音である、轉音である、同行相通同列相通であるなどゝ言ふのみで、何故に轉じ、何故に通ずるかを知ることの出來なかつたのは、此の間音と云ふものがあつて、縱横に連續し、斜に關係することを知らなかつた爲である。然れば、此間音研究と云ふことは、聲音學の上には、最も價値ある、最も興味あるものゝ一つである。

間音は、單音として存在する母音にも、父音と綴合せる綴音の上にも同じく存在する。例へば高前母音に成るキ｜と、平前母音に成るケ｜との間にも、此のキ｜、ケ｜と、低中母音に成るカ｜との間にも、それ〴〵に中間音があるので、

さけよい(酒醉)……さかよい

すし(鮓)……しし

などに轉じ訛るのである。

尙是等の中間音は、母音の上にのみでは無くて、父音にも存在するのである。

第六節　鼻化母音

母音の發生に際して、懸壅垂は後上方に壓し上げられて、鼻への通路を閉塞するものであるとは、前に述べたが、若し母音の發生に、懸壅垂の作用が完全で無くて、鼻への路が少しでも開いて居る時には、聲の一部が鼻からぬけて、其の母音は、やゝ鼻にかゝる響きを生ずるのである。就中、開口の大なる母音は、小なる母音より鼻にかゝり易く、後母音は、前母音より鼻にかゝり易い。例へばオ、アは、イ、エより鼻にかゝり易く、ウは最も鼻に近い後母音であるために、最も鼻にかゝり易い傾向がある。鼻にかゝる母音即ち鼻化母音が、父音と綴合する時には、其綴音はやはり鼻にかゝることは言ふまでも無からう。東北の談話音が、常に鼻にかゝるのは是に原因する。故に之を訂正するには、懸壅垂の運動を明確にするより外に方法はあるまい。若し聲が、口腔内の或る局部に其流出を妨げられるために、懸壅垂は著しく壓し下げられて、全部が鼻へぬける時には、完全なる鼻音であつて、父音である。其は尙、父音の處に述べよう。

第十三章　二重母音

二つの母音の重り續く場合に於て、一つ一つの母音を、離れ離れにし、聲門の狀態を改めて發音することもあり、同じ聲門の狀態を持續けて、同じ樣に聲の音を顫動させて置きながら、唯、開口狀態や舌狀態だけをかへて、共鳴室の形だけを、甲の母音から乙の母音に移り滑らせて發音することもある。この際には、一母音は、殆ど父音の如く、不明瞭にかすれて發音せられて、二母音で一音節をなす。この後の場合、即ち同じ聲門の狀態を持ち續ける場合を二重母音、畧しては二重音とも云ふ。談話音で二つの母音の重る時は、この二重母音をなすことが普通である。

愛……あい

上野……うえ

行かない……あい

歸る……わゑ
仰ぐ……あぉ
家……いえ
買ふ……あぅ
魚……ぅお

の如きは皆此二重母音である。

青……えぃ
經營……えぃ

も二重母音であるが、是等は今日の發音では、下の不明瞭なる母音は、上の明瞭なる母音に同化されて、セーネン(青年)ケーエー(經營)と云ふが普通である。此かれば、二重母音では無くて、エの一母音の長音である。このことは、尙後の母音同化の處に述べよう。

此くの如く、二母音の連續は、二重母音をなすものであるが、仔細に注意すると、二つの面白い現象が認められる。其一は、アよりイ、ウ、エ、オ、オよりイ、ウ、エ、エよりイ、ウ、に

滑るが如く、廣き開口より狹き開口の母音に移る時は、後の母音がかすれて聞える。其二は、この反對で、開口の狹き母音より廣きに移る時は、前の母音がかすれて聞ゆるのである。之は實驗によつて直に知れるであらう。

第十四章　父音

父音は、モルガニー實以上、即ち副管中の或る局部に於ける、音の摩擦、密閉等によりて生ずるものである。前に母音の特質として擧げたるものを知らば、母音ならざるものゝ特質も推量せられるであらうが、とにかく、父音と母音との根本的區別に於て、下の如く說くことが出來る。母音に於ては、口腔は單に有聲の音を共鳴するので、有聲の音と云ふが母音の本質であるが、父音は口腔内に於ける音の通路を狹窄して、摩擦音を生じたり、密閉して之を破裂して、一種の破裂音を生じたりするので、口鼻腔内の調節が其の要素で、聲門の開閉はどうでもよいので、時には開いて息の音たり、時には閉ぢて聲の音たることが出來る。

大槻博士の廣日本文典には、父音のみにては未だ音をなさず、母音をまちて始めて

音をなすものなれば Consonant. を譯して、父音、子音と云ふは、之を取らず、改めて發聲と云ふとある。同書には、別に音と聲との定義を掲げて、氣息の聲帶に觸れて顫動して、耳に聞ゆるものを聲と云ふとある。此く言はれながら、又、各行の父音を發聲と名づけられた、則ちサ行ハ行カ行等の、聲帶の顫動せぬ氣息音までを聲と云はれてもある。之は矛盾ではあるまいか。次に、又、音に定義を下して、聲の一氣息に成れるものを音と云ふとある。聲帶の顫動に成りたる音が、更に一氣息に成るとは有聲父音と云ふことであらうか、一音節、一綴音、一音簇と云ふことであらうか。甚だ了解に苦む定義である。とにかく、同書には、綴音即ち成熟音と云ふことは認めてあるが、母音の外に單音は認めて居られぬらしい。吾人の觀る所では、聲門の開閉によりて成る、聲と息との相違はあるが、父音 Consonant. も皆音である。例へばタ行の父音 t は、舌頭と齒槽突起との密閉が、破裂する瞬間にきこゆる音で、cat. note. の t と同じい音が明にきこゆる。シャ行の父音 sh. は、舌面と口蓋との摩擦音で、brush. bush. の終りの音と同じい音をもつことは明に知れる。唯、國字には、單父音をあらはす文字が無いために、キャット、ブラッシュと書くけれど、實際の音では、トよりオの母音 o、シュ shu. より母音 u を引去りたるもので、其れだけでも、明に一破裂音、一摩擦音が認められる。其がタ行シャ行の父音である。其他ダ行の父音(bad. good. の d の如き)、ガ行の父音(dog. grand. の g の如き)などは、父音なれども完全なる音をなすものである。況や、マ行ナ行の父音 n. m. の如きは、必ずしも說明をまたぬことである。父音は、既に此くの如く音をなすものなれば、必ずしも發聲など云ふ、異なる名目を立てるには及ぶまい。

第一節　父音の分類

父音は、其の音質の上から區別すれば、左の二類となる。

有聲父音
無聲父音

有聲父音は、聲門の密閉に際して、聲帶が顫動して生ずる聲に成る音で、其の聲が、副管の或る局部に摩擦せられ、密閉せられて發する音である。聲から成る音なれば、母音を併發せずとも、明に聽き取られる父音である。ガ行ザ行ダ行ナ行マ行バ行ヤ行ラ行ワ行及び其口蓋化、唇化したもの等は之に屬する。

無聲父音は、聲門開放に際して、聲帶に顫動無き息の音より成るものである。息の音なる故に、別に聲の音を綴合しなくては、明瞭に聽き取られぬ父音である。カ行サ行タ行パ行ファ行、其の他、上の口蓋化齒化唇化した父音は之に屬する。此の區別は、喉頭の外部に當てたる指の感覺によつて、認められることは、前にも話した。

父音は、又發音機關の作用狀態によりて、左の四種に別けられる。

摩擦音
顫動音
密閉音
反響音

摩擦音は、唇と唇、齒及び口蓋と舌との如く、副管の局部を甚しく狹窄して、息と聲とが、其の狹窄部に摩擦されるに由て生ずる音で、息と聲とが、持ち來られる間はつゞけられる續音である。無聲音では、フの父音サ行パ行等の父音、有聲音では、ワ行ヤ行ザ行等が之に屬する。

顫動音は、實は摩擦音の一種である。空氣が口腔の一狹窄門を通過する際に、局部に著しい顫動を生ずるによつて發する音である。ラ行音が之に屬する。即ちラ行音は、聲帶の顫動に成りたる聲が、懸垂垂を刺戟して、之を振動し、一の顫音を生ずるのである。此顫音が、更に舌頭と口蓋との狹窄門に摩擦せられて、ラ行音は成り立つものである。

以上、摩擦、顫動の二音は、局部が狹窄せらるゝのみで、別に閉塞せらるゝことが無いもの故に、次の密閉音に對して之を開通音と云ふ。

密閉音は、開通音に對する名で、發音局部の閉鎖に原因する音である。氣息の通路の閉鎖せらるゝ間は音が無い、其閉鎖が吹き破られる時に成る音である。故にまた破裂音とも云はれてある。密閉が無ければ破裂は無い、破裂しなければ音を成すものでない、畢竟、破裂音と云ふも、密閉音と云ふも、同一物を觀る方面の換つた名である。時には密閉したまゝで、破裂せずに、休止することがある。之を音中止、又は音密閉と云ふが、其は後に詳說しよう。此の密閉破裂音は、無聲音ではパ行タ行カ行の父音等で、有聲音では、バ行ダ行ガ行の父音等である。

反響音は、全く有聲音である、即ち聲が常の如く口腔に流出するが、唇と唇、齒槽突起

と舌頭、口蓋弓と舌根との如き、途中に於ての密閉に遮斷せられて、反りて鼻腔に入り、鼻腔内に共鳴せられて、前鼻孔より響き出づる音で、鼻音が是である。是故に、反響音は、口腔の密閉鼻で、鼻腔の開通音である。マ行ナ行の父音、及び舌根鼻音は之に屬する。

以上、諸音の關係は左の通りである。

父音
- 開通鼻音（摩擦音、顫動音）
- 密閉音…破裂音
- 反響音……鼻音

（開通鼻音・密閉音・反響音：口音）

父音は、又、發音機關の局部の相違から、左の五種類に區別せられる。

舌根音
舌面音
舌頭音
舌尖音
唇音

舌根音は、音根と軟口蓋の後部、口蓋弓との間に關係して、生ずる音である。此間の通路が狹窄して、其狹窄門に息が摩擦せられて生ずるのが、ハ行（フを含まず）父音である。若し、此處に密閉が生じ、其密閉が吹き破らるればカ行ガ行の父音が生ずるし、此密閉が破裂せずに、中止の壯態を取る時は、ガッコー（學校）クッケー（活計）に於ける音中止となるのである。若し、此處が密閉したまゝで、懸壅垂が壓し下げられ、聲が鼻からぬける時は、グンカン（軍艦）カンガク（漢學）に於ける舌根鼻音を生ずる。舌面音は、舌面の中部と口蓋とに關係して生ずる父音である。此路が狹窄せられて、聲を摩擦するに由て生ずる音が、ヤ行の父音である。

尙、すべての父音が、イ或はエの口蓋母音に同化せられて、一種の變化せる父音を作る時は、キ、シ、チ、ニ、ヒ、等の如く、其發音局部は、轉じて舌面音となりて、或は密閉せられ、或は摩擦せらるゝものである、是等の父音は、便宜上後に至つて說かう。

舌頭音は、舌の前部と齒槽突起との間に關係して生ずる父音である。聲が此間に作られたる狹窄門に摩擦せられて生ずる音は、ラ行父音で、此の密閉破裂音が、ダ行

タ行である。更に此密閉が破裂せられずに、中止の狀態を取る時は、ハッタ(八田)キット(必ず)等に於ける音中止となるので、若し、此處が密閉したまゝで、懸垂垂が壓し下げられ、鼻音をなす時には、オンナ(女)ナンヂ(汝)に於けるナ行父音を生ずるのである。

舌尖音は、舌尖と上門齒尖との間に關係して生ずる父音で、此處の狹窄門に、息が摩擦せらるれば、サ行音となり、聲が摩擦せらるれば、ザ行となる。

唇音は、兩唇間に關係して生ずる父音である。息が此處に作られた狹窄門に摩擦さるれば、フ行音が生ずる。此局部の密閉が破裂するために生ずる音は、パ行音パ行音で、就中、パ行は息の音で、バ行は聲の音である。此の密閉が破裂せずに、中止の狀態を取る時は、ラッパ(喇叭)ハッピ(法被)等に於ける音中止となるのである。若し、此の局部が密閉したまゝで、鼻音となる時は、ンメ(梅)ンマ(馬)に於けるマ行父音を生ずるのである。

口音				
無聲音	開通音	摩擦音	舌根	は行(h.)
	密閉音	破裂音		か行(k)
有聲音	開通音	摩擦音	舌面	や行(y)
		顫動音	舌頭	ら行(r)
	密閉音	破裂音		が行(g)
				だ行(d)
鼻音	反響音			な行(n)
				ん(n)
無聲音	開通音	摩擦音	舌尖	さ行(s)
	密閉音	破裂音		た行(t)
有聲音	開通音	摩擦音	唇	ふゝ父音(ph)
		顫動音		ぱ行(p)
	密閉音	破裂音		ざ行(z)
				ら行(r)
				ぢ行(z)
				わ行(w)
				だ行(d)
				ば行(b)
				な行(n)
				ま行(m)

第二節　父音各論

(甲)口音

(一)舌根音

ハ行の父音(h.)

上圖の如く、舌根がやゝ高められて、軟口蓋の後部、口蓋弓との間に、さほど著しからざる一の狹窄門を生ずるので、廣開せる聲門をくゞつて來た氣息が、此の狹窄に逢うて、柔軟なる一の摩擦音を響かすのが、此の父音である。故に無聲音である。上圖の喉頭に於ける○は、聲門の開放に成る息であることを標したのである。

第廿六圖

是音は、舌根局部の狹窄が著しく無くて、摩擦が極めて柔軟微弱であるために、全く口腔内の影響を受けざる音、即ち喉音の如く思はれて居るけれども、注意して之を實驗する時は、微弱ながらも、舌根に於て、摩擦せられて發する父音である。之に母音を綴合して、ハ ha.、ヒ hi.、フ hu.、ヘ he.、ホ ho. の五綴音をなすものであるが、ヒ、フ、ホの二音は國語音に存在しない。

科學的研究でない從來の五十音圖などに因て、是音は、ヒ、フと父音が同じい樣に誤

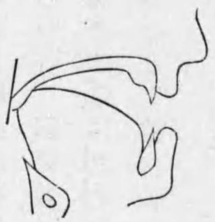
解せられて居つたが、此三父音は同じい摩擦音であるのみで、其局部に甚しき相違がある。フは兩唇間の摩擦音で、ヒは舌面と口蓋との摩擦音である。而して之は舌根の音で、決して同一の父音を基礎にして居るもので無いことは、實驗に徵して明かである。

此音は、上古には唇密閉のパ行音、若しくは唇摩擦音のファ行であつたのが、次第に軟化して輕き摩擦となつて、今日のハ行音を成したものなることは、パ行ファ行の處に述べる。

カ行の父音(k.)

同じく無聲音である息の音の流出に際して、上圖の如く舌根が著しく高まりて、軟口蓋の後部口蓋弓に密着して之を妨げることがある。其を破る瞬間に成る破裂音が此父音である。故に斷音であつて、摩擦音などの如く續音ではない。(すべての密閉音は斷音であつて、續音でないと云ふことを忘れてはならぬ。)

第廿七圖



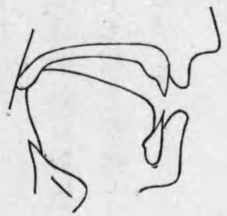
之に母音を綴合すれば、カ ka クィ ki クゥ ku ケ ke コ ko の綴音を生ずるのである。就中クイの一音は國語音には無い音である。

キの父音は、常にカクの父音と同じく思はれて居るけれども、實驗上、音局部に相違のあることを認めなければならぬ。其は口蓋化父音の處に述べる。

ガ行の父音(g)

カ行は息から成る無聲音で、ガ行は聲から成る有聲音であると云ふことを除けば、音狀態音局部に於て、此兩父音は同一であることは、上圖に照して知れる。圖中喉頭に一線を畫したのは、聲門密閉の狀態で、聲から成る音なることを標したものである。

第廿八圖



其他のすべてはカ行音と同じい。

之に母音を綴合すれば、ガ ga グィ gi グゥ gu ゲ ge ゴ go の五綴音を生ずるが、グィは國語には存在せぬ音である。

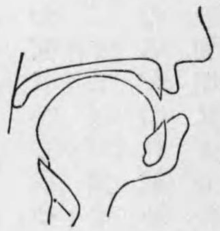
(二)舌面音

ヤ行の父音(y)

上圖の如く舌面が高まりて中口蓋に接近して、一の狹窄門が出來る。流出せる聲が、やがて此狹窄門に摩擦されるに由て生ずるのが、ヤ行父音で、有聲音で、摩擦音で、續音である。

ア、イ、ウ、エ、オ、の母音を綴合すれば、ヤ ya イ yi ユ yu. エ ye ヨ yo の五綴音を生ずる中に就いて、イ yi とエ ye とは、今日は其父音を脫落して、イ i. エ e. の母音となつて居る。

第廿九圖



假字が出來る頃は、既にヤ行のイ、エ、は其父音を脫落して居るので母音と混同しまつたのでもあり、今日の國語音に存在せぬ音でもあり、實用上之を區別する必要も無いが、聲音學の上では、此二つを區別することが出來る。即ちヤ行のイ、エ、は綴音である故に、父音と母音と云ふ二つの異なるものに分解することが出來る。

初めには舌面を高めて中口蓋に近けて、其間の狹窄門に一摩擦音を生じ、やがて舌の高まりは、舌の中部より稍〻前に移りて、高母音イ、の音狀態をなす、此が綴音イ yi である。エ ye は更に區別し易い。前の如く高められたる舌面と中口蓋との中間の摩擦 y の狀態より、舌頭は斜に前下方に前進して、平前母音エ の音狀態をなすに由

て發音せられるのが綴音のエyeである。

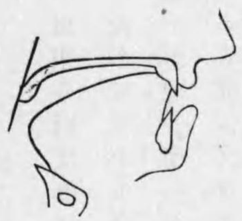
（三）舌頭音

タ行の父音（t）

上圖の如く、舌頭と上門齒の齒槽突起との間に、密閉が生ずる、此密閉の破裂する一瞬間に生ずる父音で、無聲音で、密閉破裂音で、斷音である。

此に母音を綴合すれば、タta、ティti トゥtu テte トto の綴音を生ずる。

第三十圖



チ、ツ、も亦、タ、テ、トと同じ父音から成る樣に思はれたのは、非科學的であつた從來の誤りである。上古に於ては、或は同一の父音から成つたものかも知れぬが、今日では、チとツとタ、テ、トとは音局部が違ふ。チは音局部をやゝ內方へ進めて、舌面と口蓋との密閉に成り、ツは更にチとも異なる父音に成るので、舌頭は齒槽突起を離れて前下方に移り、齒の後緣及び齒頸との密閉によりて成るので、之に母音を綴合したものがツァ行音である。

以上說いたところで、タ、テ、ト、とチ、ツとは、父音が同一でないことは明白であらう。

ダ行の父音（d）

ダ行とダ行と比較して、息の音である、聲の音であると云ふ特點を除けば、齒槽突起と舌頭との密閉音であると云ふことも、斷音であると云ふことも、皆同一である、唯ダ行音の無聲音であるに對して、此音は有聲音である。

無聲音のチ、ツと、タ、テ、トとは、父音は違ふが、二つながら猶、密閉音として現在に勢力ある音である。此の有聲音では、ヂとヅとは既に滅亡して、唯、ア、エ、オの母音より成るダda デde ドdoの三音が存するのみで、ヂ、ヅの代りにはザ行のズ、ジャ行のジを用ゐること

はぢ（耻）……はじ

もみぢ（紅葉）……もみじ

みづ（水）……みず

なまづ（鯰）……なまず

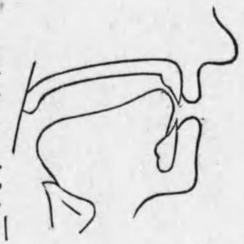
である。併し四國の或る地方音には、このヂ、ヅの有聲音が存在して、フジ（山の名）フヂ（藤）が明かに區別せられて居るが、之は國語音の大勢上、方音と見る外は無い。の

みならず是も次第に標準音に浸蝕せられて居る故に、やがて滅亡するであらう。

ラ行の父音(r)

顫動音の性質、音狀態に就いては前に述べた。此の父音は、聲が懸垂を衝き動かして、規律ある顫動を生ずるので、顫動音である。其が更に舌頭と口蓋及び齒槽突起との狹窄門に摩擦せられるので、摩擦音で、續音である。之に母音を綴合すればラra ルィri ルru レre ロroの綴音が出來る。其中で、ルィは標準音には無い。

第卅一圖



是音は、顫動が高ければ高いほど、一種の强き感じを人に與へるものなれば、もとより舌頭の稍〻反り身の氣味ある上に、彼の芝居役者の臺詞の如く、或は所謂ベランメー語の如く、一層顫動を高からしめる爲に、流出する聲の方向に逆ひて、舌頭を內へ卷き込むことがある。此際には舌頭にも著しい顫動を生ずるので、之をラ行の卷舌音と云ふ。

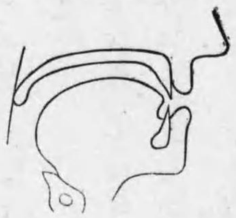
此他にも、舌頭を齒槽突起と前口蓋とに輕く著けたる時、舌の兩側より聲が洩れ出で、成るラ行音(l)即ち側音と云ふものもあるが、其は外國音で、國語音で無い故に之を省く。

(四)舌尖音

サ行の父音(s)

圖の如く前出したる舌尖が、上門齒の齒尖に接して、きはめて少き間隙を存して居るのみである。氣息はこの狹窄門に遭うて、急に壓搾せられるがために、一の鋭き摩擦音を生ずるのがサ行の父音で、無聲音、摩擦音、續音である。これに母音を綴合すれば、サsa スィsi スsu セse ソsoの五綴音を生ずるが、スィは標準音には存在せぬ。

第卅二圖



シshiは、從來サ、ス、セ、ソの四音と同じ父音より成るものゝ如く思はれて居たが、其は誤解である。何となればシはサ行音の如く、舌尖音ではなくて、シャ行の如く舌面音である。舌面と口蓋との間に成る摩擦音である。發音局部が違ふ以上は、父音の異なるものであることは甚だ明白である。尙シに就いて詳細なることは、次の

口蓋化父音の處に述べる。

ザ行の父音(z)

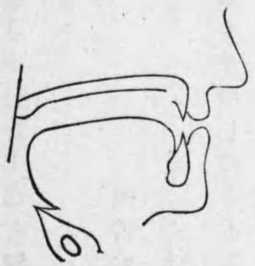
此父音の、舌尖と齒尖との間の摩擦音であること、續音であることなどは、皆サ行音と同じい。唯、相違する點はサ行音は息の音で、ザ行は聲の音である。

ジの、ザ、ズ、ゼ、ゾ、と父音を異にすることなども、シの、サ行に於ける注意を繰り返せばよろしい。

此父音に母音を綴合したものが、ザ za ズィ zi ズ zu ゼ ze ゾ zo の五綴音であるが、ズィは國語には存在しない。

(五)唇音

第卅三圖



フの父音(ph)

上圖の如く、上下兩唇を相締めて、相近けて、氣息が其狹められた兩唇に摩擦せられて、吾人の耳に聽くべき音を發するのである。やがて舌の後部が高まりてウの母音狀態をなして息の音は聲の音とかはればッを生ずるので、

之に各母音を綴合する時はファ pha. フィ phi. フ phu. フェ phe. フォ pho を生ずるがフの外は皆方音である。

從來音韻の研究が、非科學的であつた時には、深き思考も費さずに、フはハ行音と認められて、ハ、ヒ、フ、ヘ、ホと排列せられ、同じ父音から成り立つものゝ樣に思はれてあつたが、實驗上フは、決して他の四音と基礎を同じうして居る音では無い。即ちフの唇音に對してヒは舌面音で、ハ、ヘ、ホ、は舌根音である。

此ファ行の父音は、從來 f を以て標されてあるが聲音學上、f は下唇と上門齒尖との間の摩擦音である。然るに吾國語音でフの父音は兩唇間の摩擦で、上門齒尖などに關することは無い。故に同一であるとは云はれぬ。wh. を以て標して居る人もあるが wh. は兩唇間の摩擦の外に、齒と唇との間に含まれたるものゝあるが如き音なれば、また國語音のフと同じではない。完全に同一なる音は無いにしても、比較上、h よりは f、f. よりは wh、wh. よりは ph. が、最も國語音のフに近からうと思ふので之を採用した。

聲音の歷史的研究は、此書の目的の如く、現在の聲音を研究する上には、必要で無い

のであるが、我國のハ行音は、元はパ行音で破裂音であつたらしい、其は、紀記萬葉などのハ行音(今日の)を示すに借りたる波、比、不、邊、賓等の多くが、唐土の原音パ行pに當るによつても明である。其からやがて、同じ唇音なるファ行音に頽れ移つたらしい。其はなほ、紀記萬葉等に、ハ行音(今日の)として用ゐたる芳、飛、富、夫等の、實は唐土の原音がfであるので明かである。尤もパ行からファ行に化つたものか、ファ行からパ行に化つたものか、パ行、ファ行が並立して居たかに就ては、種々の説もあらうが、今日のパ、ピ、ペ、ポが、もとはフと同じく唇音であつたのが、次第に輕くなつて、今日のハ行音に轉じたといふことは確實である。其證は、カハ(河)サハ(澤)などのハを、今でもカワ、サワと呼び、ハシル(走)ハツカ(僅)が、ワシル、ワズカとなつて居るは、もとハは唇音であつたために、同じ唇音なるワになつたのである。又一證は、奥羽、北陸、山陰の方音には、今でも唇音ファ行が多く殘つて居て、ハナ(花)ヒ(火)ヘースケ(牛助)などを、ファナ、フィ、フェースケ、などと言うて居る。

ワ行の父音(w)

フの父音を説明するために書いた圖は、此のワ行父音の説明にも殆ど用立てるとが出來る。上下兩唇を接近させて作りたる狹窄門に、摩擦せられて發する音が吾人の耳に聞ゆるので、其の唇摩擦音で、續音であることなどは、皆ファ行と同じい。此の兩行の異なる點は、ファ行の無聲音で、ワ行の有聲音であることである。是父音に母音を綴合すれば、ワwa ヰwi ウwu ヱwe ヲwoの五綴音をなすものなることは云ふまでも無いが、其は既に遠くの昔で、今日は、ヰ、ウ、ヱ、ヲの四音は其の父音を失うて、其父音は僅にワの一音に見られるのみである。併しなほ、スウル(据る)ウヲ(魚)ツクヱ(机)ツヱ(杖)などの如く上に唇母音を置く場合には、其下に來るウ、ヲ、ヱは往々此父音wを認められる。

東北の地方、特に越中の或地方には、此のワ行音に、珍しい一種の轉訛がある。其は、

わろ—(笑)……ばろ—

いお(魚)……いば

つえ(杖)……つべ

と云ふたぐひである。聲音統一の上から、もとより退くべき訛音ではあるが、昔はワ行音が、ヰwi ウwu ヱwe ヲwo皆唇父音のあつた爲に、同じ唇音仲間のバ行音に轉じ

たので、今日の如く、イi ウu エe オoの母音と擇ぶところの無い音では無かつたと云ふ參考にはならう。轉訛せる類似音のことはなほ後に述べよう。

パ行の父音(p)

圖の如く密閉してある兩唇を、吹き破る瞬間に生ずる斷音で、摩擦音の如き連續音では無い。即ち吹き破る際に一の破裂音が生ずる、やがて母音と綴合する時は、パpa プィpi プpu ペpe ポpoの綴音となるので、無聲音である。

第卅四圖

此音も亦、從來書きあらはす特別の音標がないために、パ、ピ、プ、ペ、ポの文字を借りて居るところから、パ行音と同一の音でもあるが如く、誤解されて居るが、パ行音は舌根音で摩擦音であり、パ行は唇音で密閉音であることを見たならば、兩行音の甚だ異なる音であることが知れる。此音に就いて、尙重大なる研究問題があるが、其は後の濁音の處に述べよう。

バ行の父音(b)

密閉した兩唇を吹き破る瞬間に生ずる斷音で、破裂音である。音狀態や音局部は、全くパ行音と同一である。然れども、バ行音の無聲音なるに對して、之は有聲音である。

此の音も書き標す音標が無くて、パ行音と同じ文字を借りたがために、パ行音と關係でもあるが如く思はれて居るが、其誤解なることは、なほバ行のパ行に於けると同じい。

（乙）鼻音

（一）舌根音

ン(n)

舌の局部狀態をカ行ガ行の如くして、舌根と軟口蓋の後部、口蓋弓との間に密閉を作り、聲の口より出づるを防ぎて、懸壅垂の壓し下げられて、開かれたる道を過ぎて、鼻音となるものである。

鼻音の唇密閉が破れて母音と綴合する時は、マ行の綴音が成り、舌頭密閉が破れて母音と綴合すればナ行の綴音が成る如く、此の舌根鼻音の密閉が破れて母音と綴合すれば、ンガ行を生ずるのであるが單音として存在する時は、舌根は密閉したま

まで、聲が鼻からぬけるのである。

此音は、書きあらはす音標が無かつた爲に、久しく其存在を世間に認められなかつたが、實際國語音に於ては、此の鼻音の勢力が最も强大である。孤立する單音の上より見てこそ、唇鼻音はかゝる音であり、舌頭鼻音はかゝる音であると、明白なる區別は立つが、音の綜合即ち談話音として觀る時は、

唇鼻音は、下にバ行バ行マ行の如き唇密閉音の來る時でなくては存在しない。

オモンバカル(慮)
ナンピト(何人)
ナンブ(南部)
サンベン(三返)
ンマ(馬)
ンメ(梅)

舌頭鼻音は、下にタ行ダ行ナ行ザ行等の舌頭舌尖音が來る時でなくては存在しない。

ブンテン(文典)
ハンダン(判斷)
ミンナ(皆)
インネン(因緣)
カンジ(幹事)

以上二つの鼻音の存在する場合を除けば、其他の場合に用ゐられる鼻音は、皆舌根鼻音である。

元來、鼻音は、聲を鼻腔内に入れる音である故に、已むことを得ざる場合を除く外は、鼻への入口即ち後鼻孔に向つて引き付けられる傾向がある。詳に言へば、聲は唇まで出て返されるよりは、舌頭で返されることを望み、舌頭よりは更に舌根で返される鼻音にあらうとするのは、當然の傾向である。唯、下に他の唇音舌頭音などがある時は、其に引き付けられて、止むを得ず唇鼻音、舌頭鼻音であるけれども、苟も然らざる限りは、鼻腔に最も近い密閉音即ち舌根鼻音となるのである。サンベン(三返)の初めの鼻音は、下なる唇密閉音に引きつけられて、唇鼻音たることを失はない

19148

が、終りの鼻音は、下に引き付ける勢力となるべき音の無いがために、自然、後鼻孔近くへ伴ひ去られて、舌根鼻音となるのであるブンテン(文典)の初めの鼻音も、下の音が舌頭であるために、其に引き付けられて舌頭鼻音であるが、終りの鼻音は引き付けるものゝ無いために、鼻の入口近くへ伴ひ去られて舌根鼻音となるのである。

(二)舌頭音

ナ行の父音(n)

第三十圖ダ行の父音の如く、舌頭と齒槽突起との間に密閉を作りて、聲の流出を遮斷する鼻音となるのである。之に母音を綴合すればナ行の五綴音をなす。

(三)唇音

マ行の父音(m)

第三十四圖バ行パ行の父音と同じく、上下兩唇を密閉して口より聲の出口を遮斷する鼻音である。之に母音を綴合すればマ行の五綴音をなす。

(四)鼻音餘論

すべての父音は、母音と綴合して用ゐらるゝので、單音のまゝで存在するとは稀であるが、唯、此鼻音のみは單音のまゝで用ゐられることが頗る多い。例へば、ンマ(馬)ブンテン(文典)グンカン(軍艦)に於ける鼻音の如きは、馬のマを除けば、皆單音のまゝで用ゐられるのである。

昔の國語音には、唇鼻音のみで、舌頭鼻音は無いのである。後世にこれあるは、支那音を傳へたのと、音便の轉訛より外には全く無いと云ふ說を唱へる人があるが、若し全く舌頭鼻音が無かつたなら、ナ行音は無かつたであらうが、ナ行音は、此舌頭鼻音を父音として成る音である。

然し、文獻の上に徵せられる奈良朝頃の單鼻音は、皆唇鼻音であるし、しかも其唇鼻音は、明かに舌頭鼻音と區別されて居つたと云ふことは、紀記萬葉に一々正しく

ゆかん(將行)……行六
ゆるさん(將許)……許寒
わかれなん(將別)……別南
みけん(見)……見兼、見計牟

の如く、多くの漢字音より擇んで、必ず唇鼻音を用ゐ、舌頭鼻音を斥けてあるので知

れる。

ついでに云ふが、漢字音のうちで、

下平聲　十二侵、十三覃、十四鹽、十五咸、
上聲　廿六寢、廿七感、廿八琰、廿九豏、
去聲　廿七沁、廿八勘、廿九豔、三十陷、

の十二個の韻に屬する音は、皆唇鼻音にしてmの語尾をもつものである。

正身……そーじみ
燈心……とーしみ
三位……さんみ
陰陽師……おんみょーじ

の如く、マ行音に轉じ、或は次の音をマ行音にかへることがあるのも、是等、身、心、三、陰等の音が、唇鼻音であるためで、是等についてなほ、後に章を改めて說くことがある。

次に、舌根鼻音はと云ふに、この音は、當時の國語音には無かつたらしいのみならず、外國音を學ぶにも、自國音に無いために、之を聽き取り、之を模倣することが難かつたに違ひはない。何故に此く云ふかと云へば、漢吳音で

上平聲　一東、二冬、三江、の三韻、
下平聲　七陽、八庚、九青、十蒸、の四韻、
上聲　一董、二腫、三講、廿二養、廿三梗、の五韻
去聲　一送、二宋、三絳、廿三漾、廿四敬、廿五徑、の六韻

は、舌根鼻音で、しかも其聲の一部分は、輕く舌根の密閉を破りて口より出づる故に、

東……どんぐ
平……へんぐ
宗……そんぐ
相……さんぐ
陽……やんぐ

で有つたのである。

漢吳音で、此う云ふ音である故に、吾國人が從來この舌根鼻音に就いて、經驗があつたなら、聽き分けることも出來たであらうし、模倣することも出來たであらうし、音

其のまゝに傳はつたに違ひは無いのに、此舌根鼻音を口音ウ|とし、

東……とんぐ……とう
平……へんぐ……へう
宗……そんぐ……そう
相……さんぐ……さう
陽……やんぐ……やう

と發音したのを見ても、舌根鼻音が國語音に無かつたことが知れる。併し、このウ|とン|ゲとは、舌の後部音であることは同じいが、一方は鼻音であつて、ウ|などを以て示さるべきものではない。其を强ひてウ|を以て標したもの故に、終には、此等の鼻音であることをも知るものがなくなつたのである。

さりながら、當時の音韻の大體に通じて居つた人は、これらの音が、實はウ|と異なる音で、舌根鼻音でン|ゲ音であることは知つたらしい。

チョーソガベ(姓氏)に長宗部
サガミ(國名)に相模

シグレ(時雨)に鍾禮
イグレ(地名)に勇禮
オタギ(地名)に愛岩

を借音して、宛字せるを見れば、宗、相、鍾、勇、岩、が舌根鼻音であることを知つて居て、

宗……そんぐ……そが
相……さんぐ……さが
鍾……しょんぐ……しぐ
勇……いょんぐ……いぐ
岩……たんぐ……たぎ

に借りたと云ふことは明白である。朝鮮の地名に

平壤……へんぐじゃんぐ

であり、支那音には今でも

長陽……ちゃんぐやんぐ
凉州……りゃんぐちゅー

などの音の多いを見れば、思ひ半に過ぐるであらう。此くの如くして、漢字音には、一字毎に、之は唇鼻音の字で、之は舌頭鼻音、舌根鼻音の字であると區別されて居るので、支那の音韻では、唇内音、舌内音、喉内音と云うてある、唇内は唇鼻音のことで、舌内は舌頭鼻音、喉内は舌根鼻音のことである。漢字の原音では、此くの如く、一字一語ごとに、之は何内音と定まつて居つたけれど、今日の國語音では、一字ごとに定まつて居ることは無く、下に來る音に引きつけられて、上の鼻音の種類は定まるのである。

第十五章　母音化父音

前章に述べたる各種の父音が、下の母音に引き付けられ、同化せられて、父音それ自身の音局部を變ずることがある。之には、母音の舌狀態に同化せられるものと、唇狀態に同化せられるものとある。舌狀態に同化せられるものは、更に舌の口蓋に對する狀態に同化せられるものと、齒に對する狀態に同化せられるものとある。之を口蓋化父音、齒化父音、唇化父音と云ふ。

第一節　口蓋化

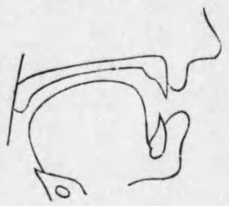
各父音が、母音のイ|と綴合するに際して、イ|は口蓋母韻とも云はれて、舌が高く上がつて口蓋に近づく母音なるのに引き付けられ、同化せられて、初めから口蓋狀態を豫想して、音の密閉局部摩擦局部を、舌面と口蓋との間に移すことがある。キ|、シ|、チ|、ニ|、ヒ|、ミ|、リ|等の父音が、カ|、サ|、タ|、ナ|、ハ|、マ|、ラ|の各行父音と比べて、發音局部を異にして居るのは、畢竟之が爲である。例へばサ|行の父音は、舌尖と上門齒尖との間の摩擦音で、之に母音を綴合すれば、サ|、スィ、ス|、セ|、ソ|の綴音を生ずるのであるが、スィsiの綴音を作るに際して、父音sは次に來る母音イiの口蓋狀態に同化されて、初めから、舌面を高めて待ち設けるので、舌尖摩擦が、舌面口蓋の間の摩擦となりて、サ|行父音とは異なる父音sh.を成すのである。即ちsh.はsの口蓋化したものである。更に之に母音イ|を綴合すれば、シ|shiを生ずるので、サ|行音のスィsiと違ふと云ふことは、實驗上明かに之を認識しなければならぬ。

ヒャ行の父音(hy)

此音は、無聲音で、摩擦音で、續音である。

ハ行の父音は、第廿六圖の如く、舌根と軟口蓋後部との摩擦音である。此父音が、口蓋母音のイと綴合する時は、ホィhiの綴音をなすものであるが、國語に於ては、この場合には、次に來べき口蓋母音の口蓋狀態に引き付けられて、舌面は自から高まりて、摩擦局部を舌面と口蓋との間に移して、第三十五圖の如き父音狀態を成すものである。更に之に母音イを綴合すれば、ホィhiと稍、音の異なるヒhyiを生ずるのである。此發音局部と第廿九圖とを比較したならば、ハ、ヒ、フ、ヘ、ホ、と排列して、ヒとハヘ等と同一の父音に成るもの丶如く思うて居ることの非科學的であることが知れる。第廿六圖の父音に母音を綴合すれば、ハ、ホャ、ヘ、ホの綴音をなし、第三十五圖の父音に母音を綴合すれば、ヒャhyaヒhyiヒュhyuヒェheヒョhyoの五綴音を生ずるもの故に、精密なる實驗を以て、ハ、ヘ、ホ、とヒとの差別を知らねばならぬ。但し、ホィ、ホャ、ヒェ、は國語音には現在せぬ音である。

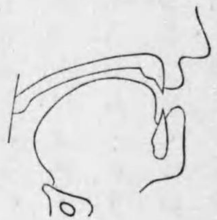
第廿五圖



シャ行の父音(sh)

サ行の父音sが、舌尖と齒尖との音局部に摩擦せられて後、母音イを綴合すれば、スィsiの綴音を生ずるのであるが、國語音のこの場合に於ては、下に續く母音イの口蓋狀態に同化されて、初めから、摩擦局部を舌面と口蓋との間に移して、圖の如き狹窄門を造る。此處に氣息を摩擦して生ずる父音がシャ行音で、音狀態は殆ど前のヒャ行と同じい。唯、ヒャ行と異なる所は、ヒャ行は氣流の稠密なる鋭き音である。

第廿六圖



シャ行の父音(j)

シャ行音は、息の音で、無聲音で、ジャ行は聲の音で、有聲音であると云ふ特點を除けば、此の兩行音は、音狀態も音局部も同一で、同じく摩擦音で、續音で、氣流の稠密なる鋭い音である。此父音に母音を綴合すれば、ジャja.ジjiジュjuジェjeジョjo.の綴

音を成すので、ジェの幾内中國の方音にはあるが、標準音には無いことなども、シャ行に於けるシェと同じい。

キャ行の父音(ky)

此音は無聲音である。前に述べたが如く、カ行の父音は、舌根と軟口蓋後部との密閉破裂に原因する父音で、第廿七圖に示せるものは是である。此の音狀態から明瞭に母音イに移れば、綴音クィkiを成すものであるが、クィは國語音に存在せぬ音である故に、實際この場合に於ては、父音kは、次に來る口蓋母音に同化されて、密閉局部を、やゝ、舌面口蓋の間に移して、第卅七圖の如き父音狀態を作るのである。之に更に母音イを綴合すれば、クィkiとやゝ音の異なる綴音キkyiを成すのである。尚精密に試驗すれば、ケの父音もキほど明瞭では無いが、カ行音kとキャ行音kyとの中間に於て密閉し、破裂する音であることが知れる、密閉音である故に無論斷音である。

第卅七圖

此父音に母音を綴合すれば、キャkya. キkyi, キュkyu. キェkye. キョkyo. の五綴音を生ずるもの故に、キを以てカ、クィ、ケ、コと同じ父音に基くものと思うてはならぬ。但し、キュは國語音に現在せぬ音である。

ギャ行の父音(gy)

無聲音なるキャ行の父音は、無聲音なるカ行の父音の口蓋化したもので、有聲音なるギャ行の父音は、有聲音なるガ行の口蓋化したもので、之に母音を結びつけた綴音は、ギャgya. ギgyi. ギュgyu. ギェgye ギョgyo である。が、其中で、ギェは國語音にはない音である。要するに、キャ行は息の音で、ギャ行は聲の音であると云ふことを除けば、其他に於ては、此の二行音は一致する。

チャ行の父音(ch.)

タ行の父音tは第三十圖の如く、齒槽突起と舌頭との密閉が吹き破られて生ずる破裂音である。之に母音を綴合すれば、タta ティti トゥtu テte トto の綴音を生ずるのである、が、ティ、トゥは實際國語音には存在せぬ音で、此タ行父音tが母音のイと綴られる時に、イの口蓋狀態に引きつけられ

第卅八圖

て、密閉局部を舌頭から舌面に移して、舌面密閉をなすと第三十八圖に於けるが如し。之に更に母音イを綴合すれば、綴音チィをなすので、ア、ウ、エ、オ、の母音を綴れば、チャ、チュ、チェ、チョ、の綴音を生ずる。即ちタ行とチャ行とは密閉局部が違ふ。

もと、口蓋舌面音は、舌頭音舌根音などに比べては、發音し易い音であるために、音の經驗や練習を積まぬ幼兒などには發せられ易い。特に幼兒は、聲帶の狀態よりして、音調のはなはだ高きものなれば、音調が高くて口蓋舌面音なるチャ行の如きは、最も幼兒に適する音である。

ヂャ行の父音(dy)

無聲音なるチャ行を有聲音に更へたまでゞ、同じく中口蓋と舌面との密閉音で、破裂音で、斷音である。之に母音を綴合すれば、ヂャ dya. ヂィ dyi ヂュ dyu ヂェ dye ヂョ dyo の音となるのであるが、此音は父音綴音とも、今日國語音として現在せぬ音で、すべてジャ行に化つて、唯土佐あたりの方音として存在し、ジャ行と區別されて居るのみである。然し、聲音の學問上で、之を區別することは六つかしいことは無い。同じ有聲音ではあるが、ジャ行は局部が狹窄せられるのみで、ヂャ行は密閉せられて、其が破裂するに原くと云ふことに注意すれば出來る。

リャ行の父音(ry.)

此音も有聲音である。

ラ行の父音　は、第三十一圖の如く、舌頭を高めて作れる狹窄門に聲を摩擦するものであるが、此父音の母音イと綴合するに際して、父音自身までが母音に同化せられて舌面が高く口蓋に近づき、第三十九圖の如き舌狀態を作るのである。即ち懸壅垂の顫動を受けたる聲が、此音局部に摩擦せられる。之がリャ行の父音である。

第卅九圖

ラ行の父音が、母音イと綴合して綴音を作るに際して、第三十一圖の局部に成る父音と綴合すれば、ルィ yr 音を成すのであるが、ルィは國語音に存在せぬ音で、第三十九圖の局部に成る父音から移るのである。是がリ ryi. である。

此リャ行父音に母音を綴合すればリャ rya リィ ryi. リュ ryu. リェ rye. リョ ryo. の五綴音を生ずるが、就中リェはリェンコン(蓮根)などと發音する幼兒音を除いては、吾國語音に

は現在せぬ。

ピャ行の父音(py)

パ行の父音は、前にも說いたが如く、唇密閉の破裂音であるが、此父音が母音と綴合するに際して、パ行父音p即ち第三十四圖から母音イに移れば、ピィpiを生ずるが、ピィは國語音には存在せぬ音であるので、此場合には、次の母音に同化されて、初く內の方を擇ばうとするのである。是がピャ行の父音狀態である。

第四十圖

さて、此のパ行ピャ行の、二つの父音は、其相違が細微ではあるが、ピpyiの方は、たとひ母音iを取り除いても、高まりたる舌面によつて、破裂音が既によほど口蓋の影響を受けるが、ピィpiの方は母音iを取り除いたならば、口蓋や舌面の影響がなくて、單純なる唇密閉の破裂であると云ふことを認めるがよい。

無聲音で、斷音であることは、パ行と同じい。

此父音に母音を綴れば、ピャpya. ピpyi. ピュpyu. ピェpye. ピョpyo. とあるが、ピェは國語音に

存在しない。

ビャ行の父音(by)

音の狀態と發音の局部とは同一であるが、ビャ行は息の音で、ビャ行は聲の音である。之に母音を綴合すれば、ビャbya. ビbyi. ビュbyu. ビェbye. ビョbyo. が出來る。其中でビェは國語音には存在せぬ音である。

ニャ行の父音(ny)

口蓋化父音の中でも、今まで說き來たヒャよりビャまでは、有聲、無聲、密閉、摩擦などの差別は有つたが、皆口音であるに、次のミャ行と此ニャ行とは鼻音である。鼻音である故に聲の音であることは言ふまでも無い。

舌頭鼻音nの齒槽突起と舌頭との密閉局部が或場合に於ては、舌面の著しい高まりに由て、密閉局部を口蓋と舌面との間に移すこと、第卅八圖のチャ行父音の如くして、聲が鼻にぬけ鼻音をなすことがある。之がニャ行の父音である。即ちナ行父音なる舌頭と齒槽突起とによる鼻音nに母音イを結合すれば、ヌイniの音をなし舌面と口蓋との密閉鼻音ニャ行父音ny.に母音イを結合すれば、ニnyiの綴音を生

ずるので、就中ヌィは國語音で無く、ニの方は現在の國語音である。

ミャ行の父音(my)

ニャ行の父音がチャ行の父音と口腔内の密閉狀態が同じいが如く、ミャ行はピャ行と唇密閉や舌の高まりが同一である。此の如くして、聲を鼻から通ずれば、ミャ行の父音となるのである。此父音に母音を綴合したものが、ミャ mya ミィ myi ミュ myu ミェ mye ミョ myo である故に精密にマ行の綴音マ、ムィ、ム、メ、モと比較して、其差別を知らねばならぬ。其中で、ムィとミェとは國語音には現在せぬ音である。

第二節　唇化父音

各種の父音がイの母音と綴合するに際して、其母音に引き付けられ、同化されて、其母音と同じき、或は近き舌狀態に口蓋化せらるゝことは、前節に述べたが、此處のは、父音が母音ウと結合するに際して、其母音に同化せられ、引き付けられて、其母音の如く若しくは、其より甚しき開口狀態に唇化せらるゝのである。

クヮ行の父音(kw.)

カ行の父音kは第廿七圖の如く、舌根と軟口蓋との密閉に原因する。此密閉が吹き破られる時に、一の破裂を生ずるのであるが、聲音を學ぶものは、此場合に於ける唇の狀態に注意しなければならぬ。

其一は、唇の開き、即ち開口がやゝ廣くて、聲や息が別に此両唇間に摩擦せらるゝことが無い。之が第廿七圖に於けるカ行の父音kである。

今一つは、上圖の如く、唇が著しく狹窄せられてあるので、密閉局部に於ける破裂音は、破裂するやがて此の狹窄に摩擦せられて、フの父音ph.の如き狀態を呈するのである。之がカ行の唇化父音クヮ行である。

第四十一圖

カ行の父音kが、母音ウと綴合するに際して、第廿七圖の父音から、明瞭に母音に移れば、クkuの綴音をなすものであるが、此場合には、父音kは往々次に來る唇母音の唇狀態に同化せられて、未だ母音に移らざる先に、即ち父音の初めより、第四十一圖の如く、外口を狹窄して一種の父音kw.をなす。之に母音を綴合すれば、クヮ kwa. クヰ kwi. クゥ kwu. クェ kwe. クヲ kwo. をなすものであるが、クヮの一音を除く外は、國語音に現在せぬ音である。但し、此等の現在せぬ音の中でも、クェとク

ヰとは、中古頃までは存在せる音であつたことは、歴史の上に明に證據だてることが出來る。蹴鞠のクヱマリ、變化のヘンクヱ、光明のクヮーミョー、荒廢のクヮーハイ、と發音せるが如き誰も知る事實である。今日には、是等の音が消滅したのみならず、此のクヮすらも、國内の大半には其唇化狀態が脫落して、關係クヮンケー、愉快ユクヮイ、生活セークヮツがカ行音となりて、カンケイ、ユカイ、セーカツと發音せられて居る。

彼の唇音であつたファ行音は、もとは唇の摩擦音であつたものが、長年月の間に次第に變化して、後口蓋と舌根との間に變じたにも拘らず、獨りフのみが、依然として、他の四綴音と分離しても飽くまで唇摩擦音たることを失はないのは、然あきだにフの父音は唇音なるを、更に母音ウと綴合するに際して、益唇狀態を強めるからである。

グヮ行の父音(gw.)

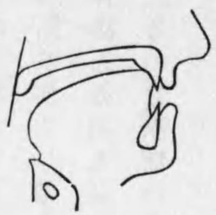
グヮ行音は無聲音で、グヮ行は有聲音である外は、此兩行音は、音局部も音狀態も同じい舌根密閉音の唇化したもので、斷音である。之に母音を綴合すれば、グヮ gwa グヰ gwi グヮ gwu グヱ gwe グヲ gwo の綴音をなすものであるが、やはりクヮ行と同じく、グヮの一音の外は國語音には現在せぬ音で、其のグヮでも、今日は大半カ行音に變じて發音する人が多い。

第三節　齒化父音

ツァ行の父音(ts.)

タ行の父音が母音ウと綴合するに當りて、ウは舌頭が低まりて、舌根の高まる母音である故に、父音はウの舌頭の低まりに同化せられて、上圖の如く舌頭を低めて、密閉の位置を稍、下方に下し、齒頸及び齒冠の後緣に於て新しい密閉をなすことがある。此の密閉の破裂が、タ行父音tの齒化したもので、ツァ行の父音 ts である。之に母音のウを綴合すればツ tsu. の綴音を生じ、アイエオを綴合すれば、ツァ、ツィ、ツェ、ツォの綴音を生ずるが、ツィ、ツェ、ツォは吾國語音に現在しない、ツァは稀に

第四十二圖



そーだっつぁ(然だとさ)

おとっつぁん(父様)

等に於て、之を聞くことが出來る。

舊式の音韻では、タチツテトと排列して、五音ながら皆同じく父音から成る樣に思うて居たけれども、タ、テ、ト、は第三十圖の如く齒槽突起と舌頭との密閉音で、チは第三十八圖の如く口蓋と舌面との密閉音である。而してツは第四十二圖の如く齒冠の後側緣と舌頭との密閉で、何れも、此の如く音局部を異にして居るもの故に、聲音を學ぶものは、精密に之を區別しなければならぬ。

第十六章　母音、父音、及び綴音表

以上述べ來た母音及び父音綴音を此處にまとめて見よう。

	母音				
無聲父音	ア a	イ i	ウ u	エ e	オ o

ハ行 h	ヒャ行 hy	ファ行 ph	カ行 k	キャ行 ky	クワ行 kw	タ行 t	チャ行 ch	ツァ行 ts	サ行 s	シャ行 sh	パ行 p	ピャ行 py
ハ ha	ヒャ hya		カ ka	キャ kya	クワ kwa	タ ta	チャ cha	ツァ tsa	サ sa	シャ sha	パ pa	ピャ pya
	ヒ hyi			キ kyi			チ chi			シ shi		ピ pyi
	ヒュ hyu	フ phu	ク ku	キュ kyu			チュ chu	ツ tsu	ス su	シュ shu	プ pu	ピュ pyu
ヘ he			ケ ke			テ te			セ se		ペ pe	
ホ ho	ヒョ hyo		コ ko	キョ kyo		ト to	チョ cho		ソ so	ショ sho	ポ po	ピョ pyo

有聲父音

ガ行	ギャ行	グヮ行	ヤ行	ラ行	リャ行	ダ行	ザ行	ジャ行	バ行	ビャ行	ワ行
g	gy	gw	y	r	ry	d	z	j	b	by	w
ガ	ギャ	グヮ	ヤ	ラ	リャ	ダ	ザ	ジャ	バ	ビャ	ワ
ga	gya	gwa	ya	ra	rya	da	za	ja	ba	bya	wa
	ギ				リ			ジ		ビ	
	gyi				ryi			i		byi	
グ	ギュ		ユ	ル	リュ		ズ	ジュ	ブ	ビュ	
gu	gyu		yu	ru	ryu		zu	ju	bu	byu	
ゲ				レ		デ	ゼ		ベ		
ge				re		de	ze		be		
ゴ	ギョ		ヨ	ロ	リョ	ド	ゾ	ジョ	ボ	ビョ	
go	gyo		yo	ro	ryo	do	zo	jo	bo	byo	

ン	ナ行	ニャ行	マ行	ミャ行
n	n	ny	m	my
	ナ	ニャ	マ	ミャ
	na	nya	ma	mya
		ニ		ミ
		nyi		myi
	ヌ	ニュ	ム	ミュ
	nu	nyu	mu	myu
	ネ		メ	
	ne		me	
	ノ	ニョ	モ	ミョ
	no	nyo	mo	myo

以上は、今日現に使用して居る國語音である。即ち國語では、以上の母音と綴音と父音の幾分とを用ゐて、隨時に隨意に、其思想を發表するものである。是に由て從來の五十音以外に、多くの綴音の存在することは、耳からも目からも、十分に認めなければならぬ。

我國語音は、母音を除いては、多くの場合に於て、綴音に由て談話するものであるが、又、父音を單音のまゝで用ゐるものもある。特に鼻音は鼻からぬける音で、聲の音であり、必ずしも口からぬける音を待たずとも音をなすものなれば、單音のまゝで用ゐられることが多い。

とくほん(讀本)
あんない(案内)
んめ(梅)
おんな(女)

に就いて見ることが出來る。其他鼻音ならざるものも、

そーです(然です)……Sōdes
つき(月)……Tskyi
した(下)……Shta
ふたつ(二つ)……Phtatsu
わたし(私)……Watash

などが、單音のまゝで使用せられることは、實驗上知らねばならぬ。尤も之は、東京音に就いて云うたので、地方によりては、必ずしも、此くは云はぬ。

第十七章　類似音

母音と同じく父音もまた無限である。例へば、此處に摩擦音がある。摩擦音は、局部の狹窄に聲や息を摩擦するもの故に、狹窄の度合によつて音を異にする。其度合は、精密に之を計つたならば無限である。故に此摩擦音は無限である。局部も同樣である。ハ行の父音は、舌根と軟口蓋の後部、口蓋弓との摩擦音であるが、ヒの父音は、舌面と中口蓋との摩擦である。されば、此舌根に舌面、口蓋弓と口蓋との間に、摩擦の中間局部がある。即ちハ行とヒャ行との中間にも、無數の父音があることは、道理上からも、實驗上からも、明白なることである。密閉音にしても同樣である。タ行の父音は、舌頭と齒槽突起との密閉であるが、チの父音は、舌面と口蓋との密閉で、ツの父音は齒冠と舌頭との密閉である。是等の父音の中間父音がまた無ければならぬが、不精密なる我々の聽官では、一々之を聽き分けることが出來ない。況や方三寸の口腔内に於て、種々に調節せられ、樣々に共鳴せられるのである故に、其音狀態や音局部に類似のものがあり、其音に類似の音があることは、當然のことで

あるが、精密に之を辨へて、差異を知り、方音訛音を避けて、國語音の統一を計ると云ふことは、實用的聲音學の最大要務である。

然し、標準とすべき音の狀態は、前に之を述べたるに、今また此に反復して、各音狀態を比較したり、訛音を矯正する方法を說いたりするのは、無用であるかもしれぬ。

音を矯正する方法や方便は、色々あるであらうが、己知の最も近い音を基とすることが原則である。語ることの不能である音に最も近い音は何であるかを看出して之を基とするのである。例へば此にゥ音を語ることが出來ぬので、首にあるゥは、ジンゴ(林檎)ジクチ(陸地)の如く轉じ、尾にあるゥは、クスイ(藥)トイ(鳥)の如く訛る兒童がある。然れども、此兒童がル音を語られることを見出して、之を基として、ゥ音を授けるのである。

(一)イとエ

同じく前母音で、口蓋母音である故に、互に變り合ふのである。其中で、イは舌の高まりが甚しくて、殆ど口蓋につくほどであるし、エはやゝ低うて平位に在る。開口狀態は、第廿二圖の如く、イは最も扁平で、殆ど兩唇がつかうとするし、エはやゝ廣くて、イとアとの中間狀態にあること第廿三圖の如し。此の二母音の區別は、舌狀態と開口狀態とによらねばならぬ。

(二)母音のイ、ヰ、エ、ヱとヤ行のイ、エ

實用上では今日此區別の必要がない。如何となれば、ヤ行のイ、エは既に滅亡した音で、今日存在せぬ音である。唯、學術上此等の音の相違する點を簡單に述べて見よう。

母音の特質は、再び此處に繰り返す必要はあるまい。之に對して、ヤ行音は父音である。摩擦音である。舌面を口蓋に近けて著しい狹窄門を作り、聲をこゝに摩擦し、聽き取り得べき摩擦音を生ずるのが、ヤ行父音yで、之に母音を綴合したのが、ヤ行の五綴音である故に、ヤ行のエの如きは、高まりたる舌面が摩擦を生じて、やがて母音エに移りゆくので、殆どイェに似たる音が響くので、此イは決して母音では無くて摩擦に成る父音yである故に、單純なる母音のエとは明に區別されるのである。イiとイyiとは、其區別は更に難いが、其の摩擦音があるか無いかを試みて知る外はあるまい。

(三)母音とワ行

共に有聲音ではあるが、就中ワ行音は著しく窄められたる唇に、聲が摩擦せられる音で、其摩擦は、唇粘膜の上に明かに感せられる。之に母音を綴合して生ずるのがワ行音である故に、ワ行は殆どウァ、ウィ、ウゥ、ウェ、ウォの如く響くのであるが、此ウは決して從來の音韻書にしるしてあるが如く、母音のウuでは無い。唯、書きあらはす文字が無いために、ウを以て記してあるが、全く母音とは音質の異なる、明瞭なる唇摩擦音である。其中でも、ウuとウwuとの差別はやゝ難いが、其も唇に於て粘膜が顫動するか否か、即ち摩擦が聽かるか否かを試みれば知れる。

(四)カガとクヮ、グヮ、

カ行ガ行の舌根密閉の破裂音が、更に唇に於て摩擦せられるのがクヮ行グヮ行である。大指と食指とで、上下兩唇を開いて摩擦を妨ぐる時には、カ行ガ行が發音せられて、クヮ行グヮ行の發音が出來ぬことは、注意すべきことである。

(五)ガ行とンガ行

ガ行音が有聲音で、舌根音で、しかも密閉音で、最も舌根鼻音に近いために相通ずるのである。之は懸雍垂の運動に注意して、鼻の道を開かぬ樣に、鼻音を作らぬ樣にするより外は無い。

(六)キとチ

キkyは、舌根の密閉破裂音kの發音局部が、舌面に移りたる音で、チchiは、舌頭の密閉破裂音tが、舌面に移りたる音である。元來カ行kとタ行tとは、其音局部はよほど離隔して居るので、相通ずる筈は無いが、既に口蓋化して、舌面音と化ったチャ行とキャ行とは、音狀態音局部ともに、よほど類似接近して居るために、相通ずるのである。奥州北部の方言に、

きんきゅー(緊急)……ちんきゅー若シクハちんちゅー

きんちゃく(巾着)……ちんちゃく

と響くは是がためである。之を訂正するには、カ行音kの舌根密閉、タ行音tの舌頭密閉に近けて、引き直すが早路である。

(七)ギとジ

この音もまた、ガ行gとザ行zとは、直接に轉化しあふほどの親しい關係は無いが、

其口蓋化したものギャ行とジャ行とは、共に舌面音で、共に有聲音で、音狀態も近似せるもの故に、誤り誤られるのである。

ぎゅーにく(牛肉)……じゅーにく

じゅーるい(獸類)……ぎゅーるい

つゝじ(躑躅)……つゝぎ

と言ふが如きは是である。之を訂正するには、舌根の密閉に導いて、ガ行を思はせ、舌尖、齒尖の狀態を重く見させ、密閉音でないことを顧みさせたならば、訂正されるであらう。

八、シとヒ及びサセソとハヘホ

ひげそり(髭削)……しげそり

ひけし(火防夫)……しけし

しちや(質屋)……ひちや

の類の音轉化は、頗る多くの地方に於て聞かれるのであるが、此二音は、共に口蓋と舌面との間の摩擦音で、同じ無聲音である故に相通ずるのである。然し、シは、サ行音と同じく著しい狹窄で、氣流が稠密であるし、ヒはゆるき狹窄で、氣流がやゝ稀薄である故に、之に注意すれば言ひわけられる。

サ行音サセソとハ行音ハヘホと相通ずることもあるが、此二行音は、無聲音の摩擦音である故に、直接に通じ合ふ筈は無いので、之は、互に其中間音階級音に於て通じ合ふのである。即ちサ行音が口蓋化してシャ行となり、ハ行音が口蓋化してヒャ行となつた時、音質も音狀態も音局部も甚だ類似して來るのである。此中間狀態は、國語音の上に明かなる痕跡は存して居ぬが、

さて(扨)……はて

サテがシャテに近つき、ヒャテになり、更にハテに化つたものと思はれる、其は、この口蓋化音シとヒとが相混じ合ふと云ふことは、多くの地方に於て見ることが出來ると云ふことでも確められるし、

お竹さん……お竹はん

おません(御座らぬ)……おまへん

そら見ろ(其れ見よ)はらみろ

などゝ通ずることが、サセを常に口蓋化音シャシェに呼びかへることの最も多い幾内方面に多いことなどは、此音轉化の階級を示す一痕跡と見て差支へは無からう。

フphは誤つてハ行に陳列されてはあるが、全くハ行セャ行とは父音を異にして居ると云ふことは前に述べたが、此にも之を確める一材料がある。其は上の如くハヒヘホの各音は、サシセソの各音と多少親しい關係があるのに、フは獨り、サ行ともシャ行とも關係が無いのである。

(九)ハ行音とファ行音

はな(花)……ふぁな

ひ(火)……ふぃ

へーたい(兵隊)……ふぇーたい

の如く音が互に交通するのである。元來ハ行pファ行phであつたものが、次第に微弱になつて、唇狀態を失ひ、遂に喉音に近い舌根音hに化つたのであらうとは、一般に認められてゐるが、今でも、山陰北陸あたりの方音に、ファフィフェフォのファ行音が多く存在して、ファナ(花)フィ(火)の如く語られて居るのである。此訛音の訂正は、第一に、唇と舌根との狀態に注意することが肝要である。即ちハ行は、舌根の微弱なる摩擦音であるが、ファ行は、強き唇摩擦音である故に、若し、食大の二指で、兩唇の近接を妨げて狹窄させぬ時は、ファ行は發することが出來ぬ。

以上のファ行の中で、フの一音は方音では無い、現在の國語音である。

此ファ行の語られる地方では、ヒとフとを誤りて、

ふゆ(冬)……ひゆ

ひと(人)……ふと

と云ふ樣に思はれて居るが、吾人の實驗によれば、之は、精密に聽き取つた結果では無くて、全く

ふゆ(冬)……ふぃゆ

ふぃと(人)……ふと

となつたので、父音までが、唇音phから喉音hに化つたのでは無くて、父音は依然た

るphで、唯、母音狀態の移轉したのみである。其は、此音轉化が、ファ行の語られる地方に限つてゐるによつて知れる。

(十)ハとワ

いは(岩)……いわ

かはる(變る)……かわる

など、此二音の相通は、其例が甚だ多くて、全く普通である。僅に音簇の初めに在る時のみ原音のまゝであるが、其他の場合に於ては、全くハはワに變りはてたのである。

元來ハの舌根摩擦音hであるは、後の話で、唇の無聲摩擦音phであつたらうといふことは、前に說いた。其phが、上に有聲音なる母音を受ける時は、下なるphaは、之に同化されて、ワwaとなるのである。ファ行phの唇摩擦のまゝで、無聲音を有聲音にすれば、ワ行wになることは前に說いてある。

此くの如く、ハがワに變るのは、有聲音同化されるので、上に單音若しくは綴音となりて、母音が存在すると云ふことを明に認めなければならぬ。是理が會得されたならば、上に母音の無き時、即ち音簇の首めにあること、ハナ(花)ハタ旗の如き場合には、ワに轉化せぬ道理も明白であらう。

なは、此他のハ行音

かひもの(買物)……かいもの

くふ(食ふ)……くう

なへ(苗)……なえ

しほ(鹽)……しお

なども、類推することが出來よう。

(十一)ユとヨ

此二綴音は、其母音が、共に後母音であるために、音轉化をし易いのである。

ふゆ(冬)……ふよ

ゆき(雪)……よき

ゆーびん(郵便)……よーびん

などの轉化音は之に屬する。其他にも多く類がある。是の轉化は、最後母音ウが

發し易い中部母音に向つて移り頽れ、其中間母音オに化つたものである故に、之を訂正することは、母音の狀態に注意せねばならぬ。即ちユの方は、舌の後部が著しく高まり、ヨの方はやゝ前部で、其高まりもさほど著しくない。開口狀態にあつて、ユは最も小さくしまりたる圓みを呈し、ヨはヤとユとの中程である。

舌の狀態まで辨別して區別されるなら、最も完全であるが、其を望むことの出來ぬ幼兒などには、單に開口狀態に由ても、大方は之を訂正することが出來るであらう。

(十三)ヤ行とラ行

二つながら有聲音で、發音局部も甚だ接近して居る故に、互に相通ずるのは怪むに足りない。

いわるゝ(所謂)……いわゆる
きかる(所聞)……きこゆ
しられて(所知)……しらえて
くすり(藥)……くすい
おれ(我)……おい

などは、昔も轉化し、今も轉化するのである。引きたる例の終りの二つは、薩摩の方言である。

此くの如く、ヤ行とラ行とは、音局部音狀態が似ては居るが、精密に注意する時は、ヤ行音に比して、ラ行音は舌の前部に關する音である。即ちラ行音は、舌頭と齒槽突起との間に、ヤ行音は舌面と日蓋との間に發する音である。其に懸壅垂が顫動すると云ふことも、ラ行音の特徵である。

若し、ラ行音が、懸壅垂を顫動せずに發音される時は、ヤ行音y、或は之と酷だ肖たる音に變化するので、彼の舌のあやつり方の不具合なる地方や人や、發音に未熟ある幼年者などには、時々ラ行音がヤ行音に訛られるは、是がためである。

(十四)ダ行とラ行

たんご(團子)……らんご
れんこん(蓮根)……でんこん
うどん(饂飩)……うろん
ろんごよみのろんごしらず(論語讀みの論語知らず)……どんごよみの

どんぐしらず

此音轉化は、九州の或る地方に於て甚しいが、其他にもぼつ〳〵聞かれる。元來此二行は、同じ有聲音ではあるし、發音局部も同じである故に、轉化し合ふのである。即ち㋟行もラ行も、齒槽突起と舌頭とに關係して生ずる音である。唯㋟行は密閉音で、ラ行は摩擦音である故に、舌頭が齒槽突起に密着して破裂すれば、㋟行dが生じ、殆ど着いて僅に離るれば、ラ行音rを生ずるのである。

若し、此二行音を混同するものがあつたなら、舌頭を十分齒槽突起に着けさせることゝ、間隙を置くことゝに注意させるがよろしい。其に、懸壅垂の顫動すると云ふことも注意させるがよい。

口蓋化したものではあるが、リャ行とヂャ行とを通じ、更にヂャ行がジャ行に頽れて、

うりゐ(雲林院)……うじゐ

りょーごく(兩國)……じょーごく

じんりき(人力車)……りんりき

と云ふことなども、類推して知ることが出來、訂すことが出來るであらう。

(十四)チ行とツ行

この音もまた地方により人によりて混同せられて、

つち(土)……つゝ

などと言はれるが、チは㋟行音tの口蓋化したものtsである故に、チは口蓋と舌面との音で、ツは齒の後側緣と舌尖との音であることに注意するが肝要である。其に、チは母音イから成り、ツは母音ウから成るものなれば、母音の舌狀態開口狀態にも注意しなければならぬ。チはチーと長く引いて、母音イを感ずるけれども、ツの方は長く引けば、母音ウを感ずるのである。

此混同は、東北地方では特に甚しい。

(十五)ダ行とナ行

一は口音で、一は鼻音であるけれども、口腔内の音狀態が同じいために相通ずることがある。

だい(内)……ない

どぅ(奴)……ぬ

どー(農)……のー

いただく(戴く)……いなく

などは是である。之は、ダ行もナ行も同じい齒槽突起と舌頭との密閉音であるので、此密閉を破る勞を憚りて、其のまゝ聲を鼻から洩す時に通ずるのである。

(六)ダ行ッァ行とサ行

サ行音は齒尖との摩擦音で、ダ行は齒槽突起との密閉破裂音ではあるが、同じく舌頭舌尖の無聲音であるために、互に其中間音ッァ行を階段音にして、親しい關係をもて相通ずる。

はあつ(放)……はなす

けす(消)……けつ

はなとー……はなつぁー……はなそー

けさん……けつぁん……けたん

と云ふ階段變化を經るものと思はれる。尙口蓋化音シとチとの相通も、之に準じて知れる。

(七)ヂとジ

ヂは消滅してしまった音で、實用上之を區別すべく研究する必要は無い、併し、今でも土佐の方音には、あほヂの古い音が殘つて居るが、其は、今日では一方音に過ぎない。

唯、聲音學の上からは、ヂは舌面を口蓋に密着し、ヅは舌尖を齒の後側緣に密着して、其を破る破裂音であるが、ジズは、舌面と口蓋、舌尖と齒尖との間を狹めて、摩擦する音であると云ふことに注意すれば、容易く區別される。

(八)シとス

この二音も、亦音質の似よりから互に混用されることがあるが、シはサ行の口蓋化音で舌面に生ずるし、スは上門齒尖と舌尖とに生ずると云ふ、音局部に注意させることが肝要である。其に、シは母音イから成り、スは母音ウから成ると云ふことも、少しく注意すればわかる。シは母音がイである故に、舌の前部が著しく高まり、スは母音がウである故に舌の後部が著しく高まる、若し、此舌狀態を明に認めること

が出來ぬならば、開口狀態に注意させるがよい。シの方はイと同じく扁平である
が、スの方は、ウと同じくしまりある圓形を呈して居る。シの方は、長く引けば母音
イを感じ、スの方は、母音ウを感ずるのである故に、區別することが必ずしも難くは
無からう。

ジとズも之に準じて知つてほしい。

東北地方では、特に此二綴音の混同が甚しい。

(十九)サセとシャシェ

さけぶ(叫)……しゃけぶ

せんせー(先生)……しゃんしゃー

さけ(鮭)……しゃけ

と音轉化する、この音轉化は、特に畿內方面に多く聞かれるやうである。畢竟サ行
音sの代りに、其口蓋化した父音shを用ゐるのである。之は、發音局部に注意すれ
ば其區別は明かである。シャシェは舌面と口蓋との間の音で、サセは舌尖と上門
齒尖との間の音であることに注意させれば、容易に訂正される。

(二十)サとチャ

特に、音に練習を積まない幼兒にありては、口蓋化音即ち舌面口蓋の音が發し易い
ので、サタの舌尖音舌頭音もシャチャの舌面音に化り易いことは前に述べたが、此
處には、何故にサがチャに化るかを述べよう。

前に述べた理由で、サがシャに化るが、此シャとチャとを比較すると、其差別は著し
く無いにもせよ。シャは摩擦音で、チャは密閉音である。そこで、幼兒は發音の經
驗に乏しいために、シャ行父音の如く、僅に離れる樣に舌面を加減するよりは、寧ろ
無造作に舌面を高めて、口蓋に全く接着する方が容易であることゝ、今一つは、チャ
行は氣流が稠密で音が鋭いし、シャ行はチャ行より鈍い音である。ところが、幼兒
の高く鋭い音調は、シャよりもチャに適するがために、

あさくさ(淺草)……あちゃくちゃ

とーさん(父樣)……とーちゃん

さむい(寒い)……ちゃむい

などが、好んで幼兒に語られるので、次第に音に經驗を積んで、舌のあやつりに馴れ

たり、體格に變化を來したりすれば、訂正されるのである。要するに、サ行がチャ行になるには、シャ行を階段とするのである。

(二十一)リとル

此二綴音も、父音は殆ど同じで、音色も似よつて居るために、

とり(鳥)……とる

くるま(車)……くりま

など〻誤られることがあるが、前のチとツ、シとス等の條下にも述べたが如く、母音の舌狀態と開口狀態によく注意して、リはイに法り、ルはウに法りて、之を訂正することが出來る。加之、リの父音は舌面音で、ルの如く舌頭音で無い。

(二十二)ワ行とバ行

わろー(笑)……ばろー

つゑ(杖)……つべ

いを(魚)……いば

之は、北國の一地方に現在する方言であるが、此くの如く轉化する理由もまた無い

ではない。ワ行とバ行とは、共に有聲音で、共に唇音であるに由て、一は密閉音であり、一は摩擦音であるけれど、音を強く弱く響かせる自然の傾向に隨ひて、或は摩擦が密閉に轉じ、密閉が摩擦に頽れるのである故に、此訛音は其唇狀態に注意させて、指もて其密閉を助け、或は之を妨げるに由て、之を訂正することは容易くある。

(二十三)鼻音

かんご(漢語)……kango

かんじ(漢字)……kanji

かんぶん(漢文)……kanbun

舌根に舌頭に唇に、口腔内の狀態は異なるが、鼻音であると云ふ音質と音色との似て居るがために、相通じ相變ずるのである。併し、此音通が、最も著しい例の怠惰主義に基く、音の頽れであつて、下に來る父音に同化されるものなることは、音變化中の音同化の條に述べよう。

しぬ(死ぬ)……shinu ヲ

しむ……shimu

しんぐ……shingu

といふ方言の如きも之で解釋されるであらう。

(二十四)ヌとノ

父音は云ふまでも無いが、母音も亦ヌはウ、ノはオで、共に舌の後部母音であるために相通ずるので、

よしぬ(吉野)……よしの

ぬしろ(淳代)……のしろ(能代)

ぬま(沼)……のま

のき(軒)……ぬき

などが是である、其中で、ノはヌの如く後部母音に成らないで、やゝ中部に近い母音オから成るものであつて、發し易いもの故に、ノがヌになるより、ヌがノになる方が多い。

此訛音の訂正も、主として母音の舌狀態と開口狀態とに注意することが肝要である。即ちヌは最も後部母音から成り、開口狀態は最も小さき圓形を呈し、ノはやゝ

中部に近い母音で、開口の圓形がヌより大きい。それ故に、ヌーと長く引けば母音ウが殘り、ノーと長く引けば母音オが殘る。

(二十五)バ行とマ行

へび(蛇)……へみ

ばいにち(毎日)……まいにち

かなしぶ(悲)……かなしむ

をみなべし(女郎花)……をみなめし

はいばー(敗亡)……はいもー

ともしび(燈火)……とぼしび

ひも(紐)……ひば

の如く、國語音でも漢字音でも其例に乏しくない。即ち此二行音は、共に有聲音で、唇密閉音で、頗る親密な關係があるので。古來、此二行を親通音などと呼んだものもある。

もと、この音轉化は、密閉を吹き破りて、破裂音を作る勞を憚りて、躊躇する間に、音が

鼻に洩れるより生ずるもので、(玉)に述べたるダ行とナ行との音通と同じ理由に基づくもの故に、ダ行とナ行、バ行とマ行との轉化とは云ふものゝ、ナ行がダ行に、マ行がバ行に化るよりは、ダ行がナ行、マ行になる方は自然の傾向である。

然れども、一は口音で、一は鼻音であれば、懸壅垂の作用を明瞭にしたならば、容易に之を區別されるであらう。

福島縣にはヤ行y音をジャ行j音に呼ぶ地方がある。

えちご(越後)……じゃちご

は一例である、是等は打聽きには類の無い怪しい言として斥けられるものであるが、注意して之が發音を試み、英語のjが獨逸のyに響くことなどを考へたならば、此の二つの舌面音に如何に親しい關係のあるかは知れる。

尙此他にも相通と相轉ずべき類似音はあるであらうが、此には、一寸思ひ浮んだ普通のものゝみを擧げた。

第十八章　拗音、直音

第十五章に說いた或る父音の、口蓋化し、唇化した父音を從來の音韻學者は、拗音と云うてある。拗けた音を設けた故に、拗け無い音、即ち直音も作らねばならぬくなつた。我々は、如何なる音韻聲音の變化を指して、拗けると言はう。拗ける直きなどは、極めて不得要領な不論理な名であるまいか。ナヌネノが直音であれば、ニャニニュニョも同じく直音でなければならぬ。此二つの間に、直とか、拗とか、差別の立てられる筈が無い。ナヌネノと言うて、齒頭突起と舌頭とに關係する音は直音であつて、ニャニニュニョと舌面口蓋に關する音が拗けた音であるとか、シャシシュショと舌面口蓋の音が直音でなくて、サスセソと舌尖齒尖の間の音が直き音であるとか云ふことは、不條理な分類であるまいか。

中には、拗音とは、二重父音である。甲の父音を發するや、やがて乙の父音に移る音である。例へば、ニャ行は、先づ舌頭を齒槽突起に着けて、ナ行父音nの音狀態を作り、やがて舌面が高まりて口蓋に近き、ヤ行父音yの音狀態を取る鼻音である。シ

ヤ行は先づ齒尖と舌尖との間に摩擦音サ行sを生じ、やがて、舌面は高まりて口蓋に近づき、ヤ行音を發するのである。此くの如き二重父音を拗音と云ふ人もあるが、此說のまた信ずるに足らざることは、決してニャ行シャ行は甲の父音より、乙の父音に移るものでは無いと云ふことを知れば、直に看破される。即ちニャ行は、ナ行からヤ行に移るのでは無くて、初めよりナ行ともニャ行ともつかぬ一種の父音狀態、父音の發生局部を擇ぶのであり、シャ行は、サ行ともヤ行とも異なる一種の音狀態音局部音質を特有するので、皆それ〳〵に獨立せる父音であることを認むるは、さほど困難のことではあるまい。或は口蓋化したり、或は齒化したり、唇化したものではあるが。皆各、音の原則に基いて、新しい父音を作つたもので、別に甲は拗音で、乙は直音であるなどと云ふ道理も無からうし、必要もあるまい。例へば、二男から成らうとも、三男から成らうとも、既に成つた上の相續權に於て違ひの無いと同じく、何れの局部に發する父音でも、父音としての價値や性質に於て差別は無い。併し、昔の如く五十音圖と云ふものを完全無缺のものと見た時代には、五十音以外のものに、別に名を定めて置いた方が都合がよかつたかも知れぬが、今日科學的の研究に於ては、此から事情に拘泥せぬでよからう。

唯、終りに斷つて置くのは、ナヌネノ、サスセソの音標に對して、ニャニュニョ、シャシュショと書く音標が、何となく隸屬的なるかの如く思はれるけれども、之はもと文字を作つた人の考へが、これまでは科學的でなかつたため、是等の重要なる父音を標すべき文字が無い故に、是非なく、既に在る文字中の近い音を借りたのである。文字と音とを混同して、思ひ惑うてはならぬ。

第十九章　清音濁音半濁音

舊來の音韻では濁音といふものがあつて、

がぎぐげご
ざじずぜぞ
だぢづでど
ばびぶべぼ

の四行二十音を之に充てゝ居る。濁音がある故に、之に對して清音をも作らねば

第十九章　清音濁音半濁音

ならず、半濁音(次清音)と云ふものもあることになる。

ぱ　ぴ　ぷ　ぺ　ぽ

の一行五音の半濁音(一名次清音)として、アカサタナハマヤラワ十行五十音が清音と云はれて居る。

久しい習慣の上から、さして怪みもせぬが、若し、人ありて、濁るとは音を如何にして發するものか、清むとは如何、半濁次清とは如何と問うたならば、吾輩は何と答へようか、甚だ困らねばならぬ。清濁半濁などと云ふ名も、亦要領を得ぬ名であるまいか。重く濁る音を濁音と云ひ、輕く清む音が清音であると云ふ定義を與へてゐる人などもあるが、其は赤は赤き色なり、白は白色なりと云ふ樣なもので、定義になつては居らぬ。鈍き音、鋭き音と云ふ定義を與へてある人もあるが、音の高低鋭鈍は、寧ろ音調に用ゐられてもあり、其方が適切であるまいか。吾人は、此の清音濁音に對して、完全なる定義と說明とを見たり、聞いたりしたことが無いのである故に、其如何なるものなるかを知るに困むが、カ行のカ行に對するが如く、ザ行のサ行に對するが如く、或る父音の有聲なるものを云うたらしい。此くの如く聲の音が濁音であれば、母音も有聲音である故に、濁音であるが、母音には母音としての特質がある故に、之を除くとしても、兎に角濁音には左の定義が下される。

濁音とは父音の有聲なるもの、

之が最も今日の濁音に近い定義であらう。此くの如く濁音の定義が定まれば、清音の定義は直にきまる。即ち

清音とは父音の無聲なるもの、

此うなれば、清音なるか、濁音なるかは、聲帶に顫動ある父音か、無い父音かに由て定まるので、指で喉頭を壓しつけて、之が發音を試みて、指頭に顫動を感ずると否とによつて、音の清濁が決定せられる。此くの如く試驗した結果、カ行ザ行ダ行バ行の濁音なることは勿論のことで、其他今まで清音であるなどと解して居つた、ナ行マ行ヤ行ラ行ワ行の諸父音も、有聲音即ち濁音であることになる。而して後、カ行サ行タ行ハ行ファ行等の諸父音の清音であることが知れる。口蓋化した父音、唇化した父音の清濁も、之に準じて知られるであらう。無聲音なるカ行の口蓋化父音キャ行は、清音で、有聲音なるガ行の口蓋化父音ギャ行は、濁音である。シャ行は清音で、ジャ

行は濁音で、グヮ行は清音で、グヮ行は濁音である。

清音濁音に就いて大體を知つた我々は、更に重要なる問題に就いて考へねばならぬ。

(一)パ行父音pは濁音なりや。

(二)バ行父音bはハ行父音hに對する濁音なりや。

の二問題である。

パ行音の濁音なるかを試驗するには、第一に指を喉頭におし當てゝ、聲帶に顫動があるか否かを試みねばならぬ。此くの如くしても、指頭に何の顫動も無い。即ちパ行は無聲音なる唇密閉音である。

無聲音――清音

パ行父音――無聲音

是故に、

パ行父音――清音

であることは甚だ明かである。況やパ行音は、重く濁るとか、鈍いなどと云ふべき音ではなく、むしろ清鋭なるに於てをや。

パ行父音bは、どの父音に對する濁音であるかに就いては、音狀態、音局部を實驗することが肝要である。パ行は唇密閉音である。然るにハ行音hは舌根の摩擦音で、ヒャ行は舌面の摩擦音である故に、音狀態も音局部も大に違ふ。フは唇音ではあるが、密閉音でなくて、兩唇間の摩擦音であれば、是亦パ行とは音狀態が違ふ。是故に、パ行を以て、ハ行の濁音であるなどと思ふはあやまりである。

然らば、吾國語音の中で、パ行と父音狀態の最も近い音は何音であるか。唯一つのパ行音は、パ行と音狀態音局部を同じうしてゐる。共に唇音で、共に密閉音である。同じく密閉せる唇を吹き破るに由て生ずる破裂音で、斷音である。其異なる所は、パ行音は無聲音で、パ行は有聲音である。故に、パ行は清音パ行に對する濁音である。然るを、音質、音狀態、音局部の異なるハ行音hに對するものと思うてはならぬ。

此外に、半濁音(一名次清音)など云ふものを設けて、パ行音を以て宛てゝあるけれども、其理由なきことは前に述べた。若し、強ひて清音と濁音との中間にあるものを求めて、半濁次清音を定むるなら、聲門が開放と閉塞との中間狀態にありて、聲帶に

著しい顫動を感じ無い音が、この有聲音と無聲音との中間音で、此に云ふ半濁次清に相當するであらう。其は叩き音である。

第二十章　音中止

母音父音及び之によりて成りたるすべての綴音は、或は口音に、或は鼻音に、密閉破裂音に、摩擦音に、何にくれに、音の種類は種々あれども、是等の諸音は皆一種の音響を特有して、吾人の耳に感覺を與へるものであるが、此に又、吾人の耳に聽かれぬもの、音響を有たぬもので、談話の一要素を成すものがある。其を音中止或は音密閉と云ふ。音中止は、或る發音局部が、密閉のまゝ中止するもので、例へば、

らっぱ(喇叭)
にっぽん(日本)
がっこー(學校)
くわっけー(活計)
せっつ(攝津)

ひったん(筆端)

に就いて、ラとパ、ニとポとの間にあるものゝ、聽くべからず語るべからずと雖も、一種の狀態が存在して、談話音の一要素をなすことは明かである。之を音中止と云ふので、破裂せぬ密閉に由て成るものである。

從來の音韻上では、此音中止を促聲或は促音と云うて、ツの文字を側よせて小さく記して音標として來たが、實驗上促聲促音と云ふ名の不穩當なることは、さておいて、此音中止にも三つの種類がある。其はラッパに於けるが如く、唇密閉音の前に此音中止が生ずる時は、其中止は唇密閉の中止で、ガッコーの如く舌根密閉音の前に生ずる時は、其音中止は舌根密閉の中止である。若し、ヒッタンの如く舌頭密閉音の前に生ずる時は、舌頭密閉の中止である。つまり音中止は、下に來る密閉音に同化されて、其と同じ局部に於て密閉中止をなすものなることは、前に引ける例に就いて知ることが出來る。即ち密閉音に於て三種あれば音中止も三種ある、其を一つのッを以てあらはしてあるので、三鼻音が一つのンであらはされて區別が無いと同じく、聲音研究の上には頗る不都合を感ずるが、何か區別すべき音標を得た

いものである。

次に、從來この音中止を促聲とか促音とか名けてあるが、其は誤りである。音中止は聲でも音でも無いものあることに注意してほしい。即ち密閉音は、密閉するやがて破裂する音で、密閉音と云ふよりは、寧ろ破裂音と云ふべきである。唯、摩擦音等の開通音に對して區別し易いために、暫く閉音、密閉音と云ふのである。然るに音中止、音密閉は、其局部の密閉が破裂せずに密閉したまゝで、次の音に移るもので、音は無いのである。

第二十一章　促音

いっさい(一切)
くっし(屈指)
まっすぐ(眞直)
かっせん(合戰)
せっそー(節操)

之も、イとサ、クとシとの間に、前章と同じい音中止がある樣に考へて居る人もあるが、精密に實驗する時は、完全なる音中止で無いことが知れる。但し、サ行音sの生ずる局部は、極めて著しい狹窄門である故に、廣き口腔を過ぎ來る氣息は、一時に此の狹窄門に急促されて、音中止に似た狀態を呈するけれども、其は音中止と同じく視るべきもので無いことは、左の特徴によって認識される。

(一)明に鋭き一種の摩擦音の連續が響くこと、

(二)音中止の如く同じ狀態を永く保たれぬこと、

音中止に聲音の無いことは前に說いたが、本章の音は、吾人の耳に連續する一の鋭ゝ摩擦音が響く、故に決して音中止で無いと云ふことは、多言を要せぬことである。然も音中止であるならば、中止を續くる間は同狀態を維持されるのに、此音は一時狹き門口に逢うて、氣息の大部分の呼出が妨碍せられたまでゞ、密閉せられたものでない故に、氣息は次第に呼出されて、何時しか滯る所が無くなるので、其急促狀態を永く維持することが出來ない。之を譬へれば、此處に多人數が列をなして通る道路がある。其道に一の板塀を立てゝ、一人も通られぬ樣に通行を遮斷すること

があると想像せよ。之が音中止の狀態である。若し、其塀の中央に小さき門を設けたならば、多人數が同時に出られなくて、一時は門際に込み合ひ促り合ふけれども、全く通路を遮斷した次第でない故に、二人づゝなり、三人づゝなり出で行くことが出來る。本章の音はこの狀態である。

尙此音が、音中止と異なることを知るに、極めて適當な例がある。其は

まっすぐ（眞直）

と云ふ語で、マとスとの間にあるものゝ、本章の急促音であることは前に云うたが、此時に、舌頭若しくは舌尖を齒に密着して、其處に音中止をなす時は、次のスは發することを得ずして、必ずツにかはり、

まっつぐ

となるので、サ行シャ行の前にあるのは、音中止で無いことが知れる。

前章には、音中止を音と見做して、促音と云ひ促聲と云ふことの、不當なることを述べたが、此章のは、全く音でありて、氣息の急促に成る音である。即ち促音と云ふ名は彼には適せぬが、却って此に適する故に、之を促音と名けたのである。

各單音綴音に就いて、固有の音質、音狀態、音局部の一斑を說いたが、更に以上の各音に通じて研究すべき問題がある。遂次に之を述べよう。

第二十二章　音量

音量即ち音の分量は、音の長短を云ふので、音の長くなるのは音量が增すので、短くなるのは音量が減ずるのである。

密閉破裂音は斷音である故に、同じ發音を永く續けることが出來ぬ。摩擦音は續音ではあるが、國語では、父音が單音として存在することは頗る稀で、其の稀に存在する場合には、多く甚だ短き雜音躁音として存在するものなる故に、こゝに云ふ音の長短は、主として母音に就いて云ふことになるのである。母音は同じ發音狀態に於て、長短意の如く發音することが出來る。我々の聲の續く限り、即ち風管より送る聲の續く限りは、同じ音を續けることが出來る。

聲音學上、音の長短を五つの階級に區別する。

甚だ長き音

長き音
普通の音
短き音
甚だ短き音

こゝに理會を早くするために、樂典の音符を借りて說明しよう。今普通に用ゐる音符に、全音符より十六の一音符までがある。其中で四分の一音符が長短の中位にある普通音で、二分の一音符が長き音、全音符であらはされるものが甚だ長き音である。其反對で、八分の一音符が短き音、十六分の一音符が甚だ短き音に相當する。然し、談話音の實用上には、此くの如く精密に區別する必要が無いので、僅に

長き音
普通の音
短き音

とせられ、或は更に省略して

長き音

短き音

の二つを區別して滿足されて居る。即ち長音は「ー」を以て標され、短音は無じるしである。

あるこーる(酒精)
はびこる(蔓る)

前のは、綴音コーの母音オーの長音なることを示し、後のは無じるしである故に、コの母音は短音である。

音狀態が同じくて、音色、音質は同一であつても、其音量に於て、長短增減がある。以上は、聽官に感ずる響きが同一であるとは云はれぬ。是を以て、聲音學者は、異なる音に注意するには、音の分量にも注意しなければならぬ。例へば、標準語に於ては、

葉……は
根……ね

の如く短母音であるけれど、大坂邊では長母音で

葉……はー

根……ねー

である。「如何トモ爲シ難シ」を、標準語では

どーもならん

で、ドーは長音である。西京邊では短音で

どもならん

と聞かれる。感歎詞のハは短音に在りては、單に應諾を意味すれども、長音ハーは驚歎を意味する。ナルホドと短音の時には、輕き承服を意味すれども、ナールホドと長音を用ゐる時には、重く承服したることを表はす。其他すべての感歎詞は、其音量を增加すれば、然らざる時に比して、深き感歎をあらはすものである。此の如く音量の相違は、あらはす思想の上にも、少からず影響するものなれば、言語教授の任に當る人、國語國音の統一を計る人は、此點にも思ひを致さねばならぬ。

第二十三章　音勢

音勢の大小强弱は、主として音波の大小によるのである。音波とは、空氣が彈力ある板面を刺戟して、其板面に彈力作用を起す時に、其緊張と弛緩とに關係して、波狀形の顫動をなすものを云ふ。即ち空氣の力が强ければ强いほど、彈力板に對する刺戟は强く、彈力作用を起させることが强くて顫動の幅が大きい。之を大なる音波と云ふのである。同じ音調で、遠くに聞ゆるものと聞えぬものとあるは、音波の大小即ち音の力の强弱に原因するものである。例へば、琴の同じい絃の同じい塲處を彈ずるに、高く彈くと低く彈くとで、音に强弱があるは此理に基くので、高き彈きは、幅の大なる音波を生じ、低き彈きは、幅の小なる音波を生ずるのである。喉頭の聲門帶は、最も重要なる彈力板で、之を刺戟して顫動させて、音波を生せしむる動力は、氣管枝氣管を經て肺臟より送り出す空氣である。即ち送り出す空氣が强ければ强いほど、聲帶を刺戟し、顫動して生ずる音波は大きい。此くの如く大なる音波は、所謂大聲を響かすのである。其音が父音であり無聲音であっても、强く押し出したる空氣が、大なる音波を生ずることに於ては、變りが無い。くれ〴〵も注意するが、大聲と云ふは鋭音のことでは無い。音の鋭鈍は、主として音波數の多少に關するもので大小では無い、此のことに就いては、猶次の音調の處に述べる。

音波の大小は、肺より送り出せる氣管内の空氣の氣壓を計つた左の統計によりて、之を確めることが出來る。

普通の音	一六二ミリメートル
強き音	二〇〇ミリメートル
甚だ強き音	九四五ミリメートル

而して、常の叫き音が三〇ミリメートルの氣壓を示す。

談話音に在りては、肺内に容れたる空氣に限りあるを以て、呼出するに隨うて稀薄になりて、氣壓が減少する故に、談話音の力は、次第に弱ると云ふが自然の傾向である。例へば、

書く

の初めの音カは、終りの音クより強き力を以て發せられ易い。是故に、長き音簇の最後の音は、短き音簇のより弱く發音せられる。

かわく(乾)

のクは、カクのクより弱き音を以て談話せられ易い。更に

かゆいところに手がとゞく

のクは、音の力が減衰して居ることは勿論である。尙此國語音が減衰であるため、人の談話の初めが大聲であればあるほど、呼出する空氣の力が早く減衰して、終りには叫音の如くなるが常である。彼の教授者が、學生に向つて、終りを強くと絶えず注意を與へるのは、此自然の傾向に背いて、語尾を明瞭ならしめるためである。

今一つは、減衰が普通である故に、ある緩音、ある音節に於て、特に他と區別し、他の注意を求むる時には、其をば強く發音することがある。或る音を強める爲には、其前なる音を弱めて、次の音を強むる餘力とすることがあり、前の音に強き力を與へた爲に、次のは自から弱く發せられることがある。之を音の抑揚と云ひ、アクセントと云ふ。

カキ(垣)のカを強め、キを弱めて、柿と區別し、チチ(乳)の初めのチ、ツチ(槌)のツを強めて、父、土と區別するなどは是である。此のアクセントは、言語としては必ずなくてはならぬものでは無い、世界の言語中で、英語などは最もアクセントの發達した言語で、殆ど語毎にアクセントがあるが、我が國語音などには、アクセントの無いのが普

通である、漸衰に任せるか、又は、減衰では語尾が聽き取れぬ故に、音と音とを同じ力に發音すべく勉めるのが普通である。唯或る言語に限りて、アクセントを置くと云ふに過ぎない。其も元來重要せずに、自然に拋擲して置いたものゆゑに、國の東西部によつて、アクセントを異にして居るものが少くない。例へば、ハナ（強）は、東京語では人の名で、アクセントの無いハナは、植物の花であるが、西國語では全く反對で、アクセントの有る方が植物のである、タケ（強）は、東京では人の名であるが、西國では植物である等の違ひが多いために、この兩地方の人の出合うた對語に、思想の傳へあやまりした失敗談がいくらもある。

一綴音に、アクセントがあるのみならず、時には、連續せる談話のある部分に、特別なる注意を要するためにアクセントを置くことがある。例へば、

明日はきっとですよ

の談話に於いて、キットは最も強く、明日は之に次ぎ、デスヨは補助である故に弱く響く、此くの如く音の力の強弱大小は、また自から人の注意を求むる輕重の度合と一致するのである。

音簇即ち成句に就いても同樣である。音の均一なる力は、沈思默考や虛心平氣の談話に用ゐられ、大聲即ち力強き談り方は、

君もゆくか
すわ大變

の如く、疑問若しくは警戒の語に用ゐられ、

そーです
君も行け

の如き命令若しくは答へに於ては弱く話される。併し、其疑問が、必ずしも人の注意を要するでは無くて、自己の心裡に獨語するが如きものならば、弱く語られるが、命令も感情の激昂になつて、怒罵の意を含む時には強く語られる。禁止の命令は、禁止ならざる命令よりは強く語られるし、答などは、知れきつた答は知れきつた程弱く語られる。

第二十四章　音調

音調は、音の高低鋭鈍である。音響の高低は、主として一定時間に於ける音波數即ち彈力板の顫動に由て生ずる音の顫動數に關係する。彈力板を刺戟して音波を生ずるは主として音の力によるけれども、其顫動の多少即ち音の高低鋭鈍は、彈力板の狀態に關するのである。彈力板は、狹く薄ければ狹く薄いほど、其感じが鋭敏で、短ければ短いほど、其顫動が快活で音波數を多からしむるものである。語をかへれば、音を鋭く高からしむるものである。

例へば、琴の同じ絃を同じ力で彈ずるにも、柱を左右して、枕と柱との間を遠くすればするほど、音が低く鈍くあるし枕と柱との間を近くすればするほど、音は高く鋭くある、又力も同じく、枕と柱との距離も同じでも、音が細ければ細いほど音が高く鋭くあるので、音の高低は彈力板の狀態に關することが知れる、而して、絃が長くて太くて、生ずる音が鈍い時には、絃の顫動が甚だゆるくて、肉眼にも明に之を認められるが、次第に絃を細く短くして、顫動が急なるに隨うては、肉眼には到底認め難くなるに由て、音の高低は、絃の顫動數に關係し、絃の顫動數は、絃の大小長短に關係することは、容易く知れる。

以上は音響の原則であるが、人の聲音も此原則に據らねばならぬ。喉頭の聲帶は最も重要なる彈力板で、音の高低は、主としてこの狀態に原因する。即ち聲帶が薄ければ薄いほど、狹ければ狹いほど、而して短かければ短いほど、其感じが鋭敏で、顫動數が多いために鋭音高音を發するものである。語を更へて言へば、聲帶の長さや廣さと、其顫動數の多少及び音の高低とは、反比例をなすものである。

邪熱に感じて、聲帶が十分の緊張をなされぬ時に、音の鈍い皺がれ聲の生ずるは、彈力板の厚みを覺ゆるためで、小兒の聲音の大人のより高く鋭く、婦人の聲音の男子より高く鋭いのは、主として其聲帶に長短あるためである。同一人でも、彼の丁年前著しく身體の發育成長する時に、聲がはりと名けて、同じ力で空氣を呼出するに拘らず、急に音聲が鈍くなること、のあるのも、身體の發育するに隨うて、喉頭も亦急に發達し、其口徑をなす聲帶が、急に長くなるに原因する。此に言ふ同じ力で空氣を呼出しても、聲帶の狀態によつて、音に高低があり、鋭鈍があると云ふことは、決し

て忽に視てはならぬ。音の力と音調とは親しい關係あるために、とかく混合せられ易いが、此點の注意に由て其區別が了解されるであらう。

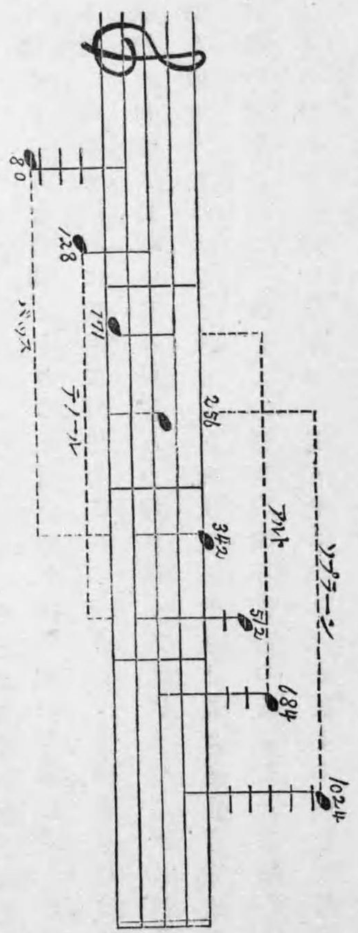
人の身體の人毎に同じからざると共に、聲帶の長さも人毎に多少の相違はあらうが、統計上生理學者の唱ふるところは左の通りである。

子供（十歳前後）			六乃至八ミリメートル
大人	婦人	弛みたる時	一〇乃至一五ミリメートル
		張りたる時	一五乃至二〇ミリメートル
	男子	弛みたる時	一五乃至二〇ミリメートル
		張りたる時	二〇乃至二五ミリメートル

此聲帶を種々に緊張し弛緩して、生ずる音の高低鋭鈍は、左の式によりて知られる。

音符の下に記したる數字は、一秒時間に於ける聲帶の顫動數である。

即ち男の最高テノール音を語る人が、聲帶の顫動數が毎秒百廿八乃至五百十二を語り、最低バッス音の人が八十乃至三百四十二で、女の最高ソプラーン音の人が、二百五十六乃至千〇廿四で、最低アルト音の人が百七十一乃至六百八十四である、是



に由て之を觀れば、男と女とは通常一音階の差があるので、同時に同じ譜を見て歌ふ時に、男子が「1（ハ）」「2（ニ）」音ならば、女子は「•1（•ハ）」「•2（•ニ）」で、女の「1」「2」は男では「1•」「2•」である。

此くの如く、ソプラーンなら二百五十六乃至千〇廿四、テノールなら百廿八から五百十二までの如く、同一なる人の語られる顫動數と顫動數との間を、其人の語り得る音域と云ふ。

あは音樂家の實驗によるに、男の罕なる低音家は顫動數四十二の低音を語り、特別なる女の高音家は一千七百〇八の音を語ると云ふことである。是等音響に關して詳細なる研究を要する人は、專ら音響學に就いて學ぶがよろしい。

此くの如く音の高低は、單音として研究せらるべきものであるが、併し、音は單音として孤立して居らずに、談話となり、音簇となりてあるもの故に、音の高低も、甲音より乙丙音は次第に低まる、乙音より丙丁音は次第に高まる、若しくは、甲音より乙音に移り、丙丁音に移るに音調が平等であると云ふ樣に、關係的比較的に話される。これで音量と音の力と音調とを、ざつと說いたが、就中、音の力即ち談り方の强弱と音調即ち音の高低とは、特に親密な關係あるものである。如何となれば、すべて熾んなる感情は、自然に高調子なる聲音と、力强き語り方とによつて表されるものである。即ち感情の甚だ大なる激昂は、甚だ大なる音波と甚だ數多き音波數に伴ふことは自然の狀態である。但し、人の聞きを憚る秘密の談話などが、熱心に力ある談り方はするけれど、音調はなるべく低くせられることはあるが、之は特別の場合である。

第廿五章　音色

同じ力を風管から送つて同じ幅の音波を生じ、同じ音波數を彈力板に起して、同じ音調にしたならば、其音は悉皆同一であらうと早合點する人もあるであらうが、必ずしもそうはゆかぬ。琴と三味線、笛と尺八とを同じ調子に合せて、音波の大さと數とを同じにしても、尙其音調以外に、琴には琴、尺八には尺八の持前の音があつて、聞き馴れた耳には、一聲聞けば其の何たるかが知れる。之が音の色である。

音色の差違は、主として副管部の共鳴音に關係する。副管部は、彈力板に生じたる音を、更に調節し、共鳴する腔室である。例へば、三味線と琴との副管部共鳴部ある胴と下樋との形とが異なつて此に生ずる共鳴音の異なる以上は、如何に同じい音調を以てしても、音色を同じうすることは出來ぬ。笛と尺八もまた類似の樂器ではあるが、吹き鳴されたる音の、更に共鳴される筩內の形狀が異なるからには、音色の異なるのは當然である。更に精密に言へば、同じ笛でも、竹に大小あり、長短の差があるならば、たとひ、其差が如何に微細でも、多少音色に相違のあるものである。

此に最も適切なる例は、人の聲音である。

人の聲音の共鳴室は、モルガニー竇以上口鼻腔までであるが、最も主要なる共鳴室は口腔である。次に鼻腔である。吾人の聲音は、是等の場處に調節せられ、共鳴せられて、音色が定まるのであるが、人の身體容貌の十人十色なるが如く、其口腔や鼻腔や咽頭腔の如きも百人百種である。是故に甲には甲の音色、乙には乙の固有の音色があつて、たとひ音調を同一にしても其音色は一致し難い。聞き馴れた人の聲音は暗夜でも、障子を隔てたる廣人稠坐の中にでも、一たび其聲を聞けば、直に誰なるかを辨へられるが如きは、この音色を聽き分けるのである。

此くの如く、音色は其人の自然に具ふる共鳴室の形に原因するので、それ〳〵に特有するものではあるが、多少は故意に其形を變へることも出來る。甲の人が乙の人に近きものを作りなし、乙が丙の聲を眞似るが如き、所謂聲作り、作り聲、假聲づかひと云ふことは、故意に其形を作りなしたる共鳴室に成るものである。

第廿六章　階段音

凡そ吾々が、一母音を發し、一父音を發するに際して、其發音局部にそれ〳〵の準備をなして、風管より送り來る空氣を待ち受けて、突然音の響く時と、初めから風管よりもそろ〳〵空氣が來る、同時に發音局部の準備もそろ〳〵やる、此くの如くして次第に完全なる發音狀態に達して、望むところの音を得る時との二つがある。例へば、甲は或る母音を發するに、聲門を初めから密閉して呼出氣を待ち、乙は肺から空氣を呼出しながら聲門を次第に閉ぢるので、初め聲門が開放せる時には、こゝを通過する空氣は無聲音となり、聲門が次第に狹まりて半を鎖し、第十二圖の乙の狀態をなす時は、此處を通る空氣は叫き音をなす。尙、横斜破裂筋の作用で、殘半の三角形空虛が鎖されゆくに隨ひて、聲帶は顫動を初め、同圖の丙の如く全く密閉されるに及びて、完全にして明瞭なる聲の音が聞かれるのである。

音の終る時も、音の終りて他の音に移る時も同樣である。例へば、母音から父音に移る時、母音を發し終へるや、一たび閉ぢたる聲門を開放して、肺より送り來る空氣

を絶ち、更にサ行父音とかタ行父音とかの發音局部に發音狀態を準備し、再び肺より空氣を送り出して、それ〳〵の音を發する時と、肺より絶えず空氣を送るうちに、聲門を半開にし、全開し、母音狀態をなしたる舌は、次第に前出して齒尖に近づき、或は次第に高まりて齒槽突起に密着して、父音狀態に移る。其の間有聲音は、叩き音になり、無聲音になり、次第にｓｔに近き音となりて、遂に完全なるサ行タ行をなす時との區別がある。即ち甲の場合に於ては、分離せる單音であつて前後の音に關係をもたぬ。第六章に論じた分解的研究は、この場合の音を研究するので、乙は純然たる綜合的研究である。

音研究には、甲と乙との二つの場合はあるが、實際談話音として存在し、音簇として在る場合は、乙の場合で、スミ(炭)といふ語を發するにも、先づ空氣が肺から呼出される、聲門は廣開されて、サ行父音ｓの無聲音となる、これから母音ウｕに移るには、開けたる聲門が次第に半開になりて叩き音となる。更に次第に密閉して母音ウの有聲音が響く。次のマ行父音ｍも其次ぎの母音イも同じ有聲音である故に、其間は同じ密閉狀態を持ち續ける。而して其共鳴室なる口腔の狀態は、初めは口が開いて、舌尖が著しく前出して齒尖に對し、その間に一の狹窄門を生じて、此處に摩擦音ｓが作られる。やがて、舌尖は退縮して、舌の後部が次第に高まり、母音ウの狀態となり、やがて舌は平位に復し、口は密閉してマ行父音ｍの狀態をなし、懸壅垂が壓し下げられ、聲が鼻に近づき鼻にぬけて鼻音を生じ、懸壅垂は再び壓し上げられて、鼻への通路を塞ぎて口音となり、舌面次第に高まりて口蓋に近づき、母音イの狀態をなす。

上の如く、一音狀態から一音狀態に移り滑る間には、無限の音狀態がある。而して連續せる呼出氣は、無限に連續せる中間狀態に調節せられ、共鳴せられて無限の中間音を成す。之を談話の階段音と云ふ。スミのｓからｕ、ｕからｍｙ、ｍｙからｉに移る間には無數の階段音がある。

第廿七章　音の變化

單音としての研究には、發音狀態の酷だ似て僅に異なる無限の類似音中間音があり、綜合音としての研究には、音と音との關節に連續せる無數の階段音がある。是

等の類似音及び相隣りせる階段音は、其差別のきはめて微細なる舌唇咽喉等の狀態に由て作られるので、其狀態は殆ど無意識なる軟骨や筋靱帶の作用に基くことを思へば、類似せる音と音との如何にまぎれ易く、變化し易いものなるかは知れる。元來我々人類は、聲音を構成する原料の發音機關や呼吸作用は具へて居るが、各種の聲音を初めから具へて居るものではない。各種の聲音は皆成長するに伴うて、學んで之を得たものである。此くの如く自然に聲音を學ぶと云ふことは、つまり一の摸倣に過ぎないので、

耳によりて學ぶもの、
目によりて學ぶもの、

の二つの場合がある。就中、前の場合が最も普通であつて後の場合は之に伴ふ。即ち子供が周圍の人の語るを聽きて、初めは不完全なる摸倣を試みるのである。次第に年長け經驗を積むに及んで、やゝ完全にはなるが、屢々言うたが如く、一旦學び知つた聲音は、殆ど無意識に發音されるものなれば、兎角不完全であつた自己流の發音に傾き易い。假令我々の聽官が、きはめて精密に完全なものであつてもさうであるのに、實際我々の聽官の不精密は頗る驚くべきもので、この無限の中間音階段音の幾分なりとも聽き分けられぬ。標準音と中間音との區別が十分でない故に、中間音をも標準音と聽き誤り、標準音をも中間音と聞き誤ることがある。是故に、標準音を學んだ積りで、實は中間音を學んで居ることも多いであらう。此くの如く接近した音から接近した音へ、次第に聞き誤りて模倣する。之が聲音變化の一原因である。

目は直接には音を傳へることは無いが、間接には音を傳へることが出來る。如何となれば、吾々は音響を見ることは出來ぬが、音狀態を見分けることは出來る。音狀態の相違は、即ち音の相違である。併し、此目もまた不精密なもので、大體の音狀態は區別されるが、無限の中間音中間狀態などを見分けることは到底出來ない故に、少し位の相違は、之を同音狀態と見做して摸倣する。之もやがて音變化の一原因となる。又一つは、音標文字の不精密不完全なるために、異なる音も同じ音と誤られて學ぶことがある。例へば、國語の音標には、アクセントを置くことが無いために、之を無視して、雲をも蜘蛛と發音し、土をも槌と發音することがある。別に音量をあらは

す特別な定め無かつた時代には、アーと云ふ歎聲をも、アァと音標したために、二つの母音と思ひちがふこともある。況やヒフがハ行音として排列せられたるために、舌根音と誤られ、ニがナ行に排列せられたるために、舌頭音チシのタ行サ行と誤られることがある。口蓋化音を書き示す文字が無くて、シャキャの如く二字を列記するために、ギリシヤ(希臘)、ロシヤ(露士亞)のsia をば、一綴音shaの如く思ひあやまりて、ギリシャ、ロシャの如く發音することもある。しかし、少し考へると、また如何に精巧な文字でも音標でも、限りおきすべての音を標し出すことは出來るものでは無いことは、エとイとの母音、タとチャとの父音の間にも、スミ(炭)の階段音としても、無數の音がある。其を皆文字を以て記し標すことの出來ぬことが知れる。畢竟如何に文明國の精巧なる文字でも、僅に音の一部分が記されるに過ぎない。

又たとひ耳は完全に聽き、目は正しく視分けても、なほ發音機關に個人個人の相違があるために、之に由て生ずる音の多少異なることもある。

完全なる音摸倣は、此くの如く困難で、やゝもすれば、耳の不精密、目の不精密なるために、發音機關に個人的相違のあるために、細微なる音相違を區別し難い傾向がある。其轉化した音を聞く人も、また此の如き原因で、いくらか轉化する。甲も然り、乙丙も然り、之を音の變化的勢力と云ふので、世人は皆多少此勢力の發動者となる。其他氣候地勢の相違、例へば、寒國の人は、口を開いて寒氣を呼吸することを厭ふ習慣から、鼻にぬける音を多く語り、海岸の人は、喧しき波濤の聲に妨げられる習慣からして高調の音を語り、或はハ行音の如き微弱なる音は、ファ行バ行に換へることがある。及び教育の有無等は、音の變化を或る方向に進むる、多少の勢力原因となるに違ひはない。

說き來ると音に統一といふことが無くて、破壞から破壞に進んで止まる所が無い樣であるが、一方には又、平均的勢力保守的勢力となるものがあつて、破壞に抵抗し、原音を永久に維持する傾向がある。若し、已むを得ずして變化する場合には、なるべく原音に酷似して、相違の少ない音を擇ぶと云ふ傾向がある。此保守的勢力の最も有力なる根據は、「言語は、最も偏通的でなければならぬ」と云ふ言語の原則である。即ち言語は最も多くの人に了解されなくてはならぬ。己れ一人が勝手に變化させても、人が承知しなければ、人に通じなければ用をなすものでは無い。言語

がさうである故に、言語の形式たる聲音は無論さうであくてはならぬ。己れ一人が、勝手に變化させた怪しい音を用ゐても、人に通じなければ用をなすものでない。滔々たる聲音の變化的勢力は、この有力ある保守的勢力に喰ひとめられて、常に烈しい戰爭するのであるが、兎角變化的勢力破壞的勢力の方が優勢であつて、やゝもすれば、少しづゝ變化してゆく、然し其變化は極細極微であつて、不精密な耳には聽分けられぬほどのものでなければならぬ。此變化が甲より乙、乙より丙、甲の時代より乙の時代と云ふ樣に、人と時とを經るに隨ひて、大なる著しい音相違となるのである。即ちダヂヅデドとラリルレロと誤り合ふにしても、サシセソがハヒヘホと變化するにしても、耳に聽き分けられない微細の變化を積んで、此くの如く著しい音變化をしたものである。決して唐突に變化したものでは無い、我々が何とも氣付かぬ間に於て、發音は絶えず變化して居るが、其變化はきはめて微細であるために、吾吾は之を認識せられないので、吾々が之を認識する時は既に塵積つて山となつた時で、塵の積りつゝある間は、吾々の不精密なる耳と目とでは、之を認められないものなることを會得しなければならぬ。

述べ來たことに十分會得が出來たならば、音が時代によつて變ることも、同時代でも、東西南北の地方に由て變ることも、例へば、パ行音であつたものが乙の時代にファ行音で、丙の時代にはハ行音、丁の時代にはヒャ行音であることや、東北地方に現在するクヮ行グヮ行音が、中國及び西南地方に在らざることや、土佐地方にはなほ餘命を保つて居るヂヅとジズとの區別も、多くの地方では滅亡してしまつたことなども、決して怪むに足りない。否寧ろ當然のことであると了解されるであらう。此くの如く音變化の場合は少からざるものではあるが、發音に就いての勞力を減少する怠惰に原因すると云ふことは、如何なる場合にも共通の原因となるやうである。即ち發音は多くの場合に於て困難を避けて、平易なる方に滑り頽れることは、聲音言語の學者の偏く認めて居るところである。唯、言語はなるべく偏通なるものでなければならぬと云ふ保守的勢力が、この變化力に顧慮をさせて、二の足を蹈ますのである。次に列記する變化の箇條も、この怠惰の滑りが行はれる時と場處と狀態とを類別したものに過ぎない。

今一つ此處に述べて置きたいと思ふことは、聲音の變化は分解的のものでは無く

て、必ず綜合的で無ければならぬ。如何となれば、音の困難とか容易とか類似とか云ふことは、比較的で關係的である。甲音から乙音に移る時に、其差別が微細であつて之を認識することが困難であるとか、其音相違が甚しくて、音の滑りが甚だむつかしいとか云ふ時に、此音變化が生ずるのである。其は綜合音音簇としては區別しがたい音も、單音としては其區別が甚だ明瞭であることで知れる。例へば、ヰ|キエヲ|やハヒフヘホが、單音若しくは一綴音としては、明かに區別されるが、他の音の下に綜合せられて、それ〳〵に大なる音簇となる時には變化する。

第一節　音通

類似の音と互に通じ、互に變じ合ふもので、第十七章に說いたところの音と音とが變じ合ふものである。之を類別すれば、類似の母音に轉ずるものと、父音に轉ずるものとの二つに別れる。イとエ、ユとヨ、ヌとノ、と通じ合ふが如きは前のもので、ダ行とラ行、サ行とチャ行、シとヒと變り合ふが如きは後のである。又父音母音二つながら類似音に轉ずることもある。其はチとツ、シとスの如き塲合である。從來音韻學者の通音、音通縱通音、橫通音など云うたものと殆ど同じいが、其人々の唱ふるが如く、唯、行が同じく列が同じいために、やたらに通じ合ふものではなくて、同じ行同じ列、もしくは行も列も異なつても、聲音の上に著しい類似がある爲に、或る中間音階段音を媒にして、頽れ合ふものなることは、第十七章其他にも繰りかへしたことは故に此に再びいはない。

第二節　音同化

音と音とが、音簇となりて綜合せらるゝ時に、上の音は下の音に引き付けられ、下のは上のに引き付けられて、全く同化せられ、若しくは近き音に類化されるもので、今概して之を同化と云ふ。便宜上之を母音の同化、父音の同化にわける。

(一)母音の同化

母音が同化の主力となるものである。之にも、其同化力を母音に及ぼすもの、父音に及ぼすものゝ違ひがある。母音に及ぼすものとは、母音の下に母音が連るときに、舌狀態や開口狀態が、甲の母音から乙の母音に移る勞力を省くために、兩母音の間に同化作用を起して、二つの中の一母音に引き付けられるか、或は二つの母音の中間狀態に歸するか、何れにもせよ、例の怠惰主義から割り出されて、音變化をなす

ものである。勿論二母音の中の一母音を擇んで其に歸すると云ふことも、直接に甲音を捨てゝ乙音を擇ぶものでは無い。やはり初めは中間母音になるので、それから更に、甲母音乙母音に向つて次第に變化するのである。

此くの如く音狀態は、其中の一を擇んで一を捨てるが、其音量に於ては、二母音であつた初めと增減が無いものである。例へば、永世はエイセイで二重母音であるが、下の母音イは、上の母音エと同じ口蓋母音で、前母音で、區別が少ないために、一母音に儉約せられるので、下の母音は之に併呑せられるが、音量即ち音の長短に於ては、エイセイの時と同じくエーセーと響いて、エセとはならぬ。此くして一旦完全なる音量を以て變化した後に、更に音量の變化をなして、エーセと響くことはあるが、之は更に二重の變化をしたもので、此に云ふ母音同化に引續きて、後に述べる音量變化をしたものである。例へば、

ゆきぎえ(雪消)……ゆきげー……ゆきげ

である。

(1) 一母音に歸するもの

殆ど一母音が略されて一母音の殘るが如き狀を呈する故に、昔から畧音と云はれてゐるが、單に一音の省略でないことは前項に述べた。

御座あります　(あ＋あ＝あ)　ございます
歸る　(あ＋え＝え—)　けーる
お前ら　　おめーら
赤穗(地名)　(あ＋お＝お—)　あこー
仰ぐ　　おーぐ
書きえ無い　(ら＋え＝え)　かけない
家　(ら＋え＝え—)　えー
昨日　(お＋ら＝お—)　きのー
思ふ　　おもー
丁寧　(え＋ら＝え—)　てーねー
おれあ(我は)　(え＋あ＝あ—)　おらー
持つておる　(え＋お＝お)　もっとる

そうでおす　そーどす

魚津(地名)　(ら＋む＝む—)おーず

(2)中間母音に歸するもの

之は、從來反切約音など、言うたもの、一つである、併し無暗に切約するものではなくて、聲音の原則に從うて、自然に其中間狀態に頽れるものなることを知らねばならぬ。

おはいり(入)　(ま＋ら＝ゐ—)おへーり

大根　でーこん

花が咲いて居る　花がせーとる

有るまい　あるめー

無い　ねー

キョーイッケーオケーケーシマス(敎育會を開會します)なども之に屬するので、アはど口を廣く開かず、イはど兩唇を狹めず、殆ど其中間狀態にある母音はエである。そこで例の儉約主義から、アイの兩母音が相近づいてエに變るは當然のことである。

有難う　(ま＋ら＝む—)　ありがとー

逢ふ　おー

食ふ　くろー

アは最も口を廣く開いた母音で、ウは最もすぼめた母音で、其中間母音はオである、アは最も低母音で、ウは高母音で、其中間母音はオである、アは中母音で、ウは後母音で、其中間母音もオである、そこでアウの二母音がオーに變ると云ふことは、例の儉約主義に於てあるべきことである。

鹽　(ら＋む＝ら—)　しゅー

なども、イの開口の扁平で狹き狀態と、オの圓く廣き狀態、イの高まりとオの低まりとの、舌狀態の中間に滑ったのである。

何と云ふ　(む＋ら＝ゐ—)　なんてー

太い奴　ふてーやつ

なども同じ理で、オとイとの中間狀態なるエに滑ったのであるが、其中で「何と云ふ」は「何でう」になり、更に「何てー」になつたのである。

是等の的例は、なほ何程もあつて、最も普通で最も重要なるものである。

(3)母音の口蓋化

アウオの母音がイエの口蓋母音に續く時に、下の母音は上のに同化せられて、其間に兩母音の階段音として一種の摩擦音を生ずるものである。其の摩擦音は、イの母音狀態に於て生ずる口蓋摩擦音なれば、殆どヤ行の父音yである。即ち兩母音の間に階段音yを生ずるものである。亞細亞がアジヤと響き、ナイアガラ(瀑名)がナイヤガラになり、ピアーノ(洋琴)がピヤーノと語られるが如きは皆是である。此類の重要なる音變化は、舊式の音韻書にはあまり注意せられずにあつたが、吾國語音に於ても普通である。

つきあい(交際)	(i + a = iya)	つきやい	
いーあせん		いーやせん	
みあはせ(見合)		みやわせ	
ひきうる(率る)	(i + u = iyu)	ひきゆる	
もちうる(用る)		もちゆる	
いーおる(言ひ居る)	(i + o = iyo)	いーよる	
ひきおい(勢)		ひきよい	
けあい(蹴合)	(e + a = eya)	けやい	
てあい(仲間)		てやい	
行かなくてあ	(te + a = teya = tiya = tya = cha)	行かなくちや	
めおと(夫婦)	(me + o = meyo = miyo = myo)	みょーと	
食つておる		くっちょる	
いお(魚)	(i + o = yō)	よー	
いう(言)	(i + u = yū)	ゆー	

但し、終りの三つの例は、口蓋母音の中でも、著しい口蓋母音のイを擇び、更に上なる父音を口蓋化して、母音を脱落したものである。

なども同じ作用であるが、上に音が無いために、全く口蓋摩擦音に同化されて、母音の本質を失ひ、初めよりヤ行父音yに變化したのである。

(4)母音の唇化

ア|イ|エ|オが母音ウ|に續く時に、ウ|の口をすぼめる母音狀態の影響を受けて、之に同化せられ、其間に一の唇密閉音を生ずることがある。この摩擦音は、有聲音なる二つの母音の間に介りて在るので、やはり有聲音で、宛かもワ|行の父音wと同じい。

ぐわい(具合)　(u + a = uwa)　ぐわい

ふゐごー(吹革)　(u + i = uwi)　ふゐごー

うゑ(上)　(u + e = uwe)　うゑ

說き來た(1)(2)(3)(4)の母音同化の中で、(1)(2)は一方の音に同化されて、近き音狀態に變るのであるが、(3)(4)は稍趣きが違うて、其中間狀態に、階段音として一つの新しい父音が明に響くものなれば、母音同化であると共に、音の增減の方面からも研究すべきものである。

(5)父音の母音化

父音が母音と綴合するに際して、其母音の影響を受けて一種の父音を作る。それに口蓋化、齒化、唇化の父音のあることは、前に委しく述べた。其中で、口蓋化が最も普通であることは云ふまでもない。

畢竟舌頭音や舌根音に比べて、舌面音は其中間狀態でもあり、自然に近い舌狀態であるために、例の怠惰主義から、諸音は自から此舌面音に變ると云ふ傾向があるので、必ずしもイ|エ|の口蓋母音が下に來る時に限らないと云ふことは、

これしか(此ればかり)……これしきゃ

はなだ(花なり)……はなぢゃ……はなじゃ

などの例が多くあるに由て知れる。唯此口蓋母音が下に來る時は、一層其作用が明瞭に知れるのみである。

此傾向は、特に、音の練習を積まずして發音に不馴なる幼兒に於て、明に認められる。

とーちゃん(父樣)

にゃんにゃ(猫)

あちゃくちゃ(淺草)

などの口蓋化音が、子供に多く發せられるを見ても、此自然の傾向は認められる。

(6)有聲音同化

之も父音に於ける一種の母音化である。即ち母音の下に父音が連る時に、其父音

が有聲父音であれば、母音の聲門密閉のまゝで、父音に連るが、若し、其父音が無聲父音であれば、母音の聲門狀態を改めて、氣息音をなす手數をとらなければならぬ。

かざくるま(風車)

かは(河)

たびひと(旅人)

など皆そうである。然るに、此聲門狀態を變改する手數を省いて、母音の聲門狀態のまゝで下の父音を發することがある、即ち下の無聲父音が發音局部及び音狀態の同じいか、若しくは、最も近似せる有聲音に變化する。從來の音韻に連濁と云うたもの、轉呼音など云うたものは、實はこの同化作用である。

かざくるま(風車)……かざぐるま

よこぎ(横木)……よこぎ

やまさくら(山櫻)……やまざくら

かふぁ(河)……かわ

くふ(食)……くー

などは全く是例である。

こひ(鯉)……こい

いへ(家)……いえ

かほ(顏)……かお

なども此同化であるが、元來ハヒヘホはファフィフェフォであつたので、コフィ(鯉)イフェ(家)カフォ(顏)の無聲なる唇摩擦音が、上なる母音の聲門密閉に同化されて、同じ父音狀態なる有聲音ワ行に近きものとなり、更にワ行の父音wを失うて、コイ、イエ、カオと化つたものであらう。之も、從來の音韻では轉呼音と云はれてをる。

さくらはな(櫻花)……さくらばな

たびひと(旅人)……たびびと

之も、前と同じい理由でハとファ、ヒとフィとは、關係ある音である。而してバ行は、ファ行と同じ唇音で親しい音である上に、有聲音であれば、上なる母音の有聲音同化を受ける場合に、そのまゝ親しい有聲音に變化したのである。

にほんき(日本紀)……にほんぎ

さんせん(三千)……さんせん

たんば(田甫)……たんば

れんちゅー(連中)……れんぢゅー……れんじゅー

は上に母音は無いが、其代り著しい有聲父音なる鼻音を上に戴いて、其に同化せられて、下の無聲父音が有聲父音に化るので、有聲音同化に違ひは無いが、母音の聲門狀態に同化されるものでなくて、父音の聲門狀態に同化されるものなれども、説明の便利上こゝに附加した。

の父音同化の下に屬すべきものなれど

(二)父音の同化

父音が同化の主力となるもので、之も、中には其同化を母音に及ぼすものも、父音に及ぼすものもある。即ち二つの音が連る場合に於て、上なる父音が下なる母音父音を同化し、下なる父音が上なる母音父音を同化する作用である。

(1)鼻音同化

べらぼめー(篦棒奴)……べらんめー

うまい(甘い)……んまい

ぶちなぐる(打擲)……ぶんなぐる

初めの二つは、下なる父音メ|マ|が唇鼻音であるに、同化されて、唇鼻音となり、終りの

は、下なるナ|が舌頭鼻音であるに同化されて、舌頭鼻音となつたのである。

支那字音の話にわたるが、

禁中　kyimchū——kyinchū.

三年　sannen——sannen.

南都　nanto——nanto.

銀板　gyinban——gyinban

本間　honma——honma

散歩　sanpo——sampo

禁、三、南は、もと唇内音唇鼻音であるなれど、下に來るチュ|ネト|に同化されて、舌内音

舌頭鼻音に變つたので銀、散、本は、其反對で、舌内音から唇内音に變つたのではある

が、下の父音に同化されたことは同一である。

三月　sangets——saggets

本月　hongets——hougets　houghets

も下のゲが舌根音なるに同化されて、舌根鼻音いはゆる喉内音に變つたのである。

何分　なんふん　nph——mb　なんぶん

半本　はんほん　nh——mb　はんぼん

官費　くゎんひ　nh——mp　くゎんぴ

の如きは、舌頭鼻音から密閉狀態を解いて、フホヒの摩擦音を作る勞を無くして連續するために、上の音と下の音と互に類似の方向に近づき、ンは唇密閉の鼻音となり、フホヒはバ行バ行となり、同じく唇密閉に同化し合ふのである。なほ

善惡　ぜんあく　gena——genna　ぜんなく

三惡　さんあく　sama——samma　さんまく

散位　さんい　sani——sannyi　さんに

三位　さんい　sami——sammyi　さんみ

南無阿彌陀　なんあみだ　nama——namma　なんまいだ

銀杏　ぎんあん　gyina——gyinna　ぎんなん

と讀みかはるが如き、唯何とも無き讀み癖かの如く思ふ人も多い樣であるが、決してそうでは無い。下に記せる字の示すが如く、三南は唇鼻音mである故に、其音狀態の澁滯や躊躇によつて、マ行父音mを增し、其父音が下の母音と綴合してマミムメモの音をなすもので、上なる父音に同化せられるのである。然るに散善銀は、舌頭鼻音nである故に、ナ行父音を生じ、其が下の母音と綴合して、ナニヌネノの音をなすものである。此他

しんおー(親王)……しんのー

まんよう(萬集)……まんにょー

誰さんわ……誰さんあ……誰さんな

いんえん(因緣)……いんねん

おんよーし(陰陽師)……おんみょーし

を始めとして淳和ジュンナ、仁和ニンナ等此例はいくらもあるが、皆上の父音の餘韻に隨ふのである。

此處に注意して置くことは、此父音同化は、其澁滯や躊躇によりて新に一父音を增

加したので、音量に相違がある故に、後に云ふ音量の變化や、音の增減の方面からも、研究しなければならぬ。

(2) 密閉音同化

上に音密閉がありて、下に母音若しくは父音の開通音あるに際して、密閉狀態を解除して開音に移るべき勢を憚りて、密閉のまゝ次ぎの音に滑りかゝりて、次ぎの音を密閉音に變化させる作用を云ふ。

おんふん(何分)……なんぶん
さんへん(三遍)……さんべん
くゎんひ(官費)……くゎんぴ

などは、上の鼻音を作る時に作つた唇密閉のまゝで、次のフ|ヘ|ホの開通音に滑りかつたので、其開通音は、急に上の密閉狀態に同化せられて、近似せる唇密閉音に變つたのである。

くゎつはつ(活潑)……くゎっぱつ
じっぱー(十方)……じっぱー
じっふ(實父)……じっぷ

なども同樣で、上に音中止即ち音の密閉があるので、其密閉のまゝ下の音に滑りかかって、下の音を同化させたのである。

はっち(發意)……はっち
せっおん(舌音)……せっとん
けっえき(闕腋)……けってき
せっいん(雪隱)……せっちん

は、ホ|とイ|との間に在る音密閉が、其密閉狀態を解かずに下の開通音に滑りかゝつたので、其密閉の滑りが破裂して、次ぎの音に移る階段音として、タ|行父音を生じたので、つまりは前のと同じい密閉同化である。唯之は、密閉同化から新しい一父音を生じたものなれば、音の增減の方からも研究しなければならぬ。

第三節　鼻化

口音を發する時には、聲が鼻からぬけてはならぬので、懸壅垂と云ふ鼻への門の扉は、後上方に壓し上げられて其門を密閉するものなるが、若し、此の閉ぢ方が完全で

ない時は、大部分は口から出るが、其一部分が鼻へ洩れるので、其音が鼻聲を帶びることがある。之を鼻化すると云ふ中にも、取分けてガ行は鼻にかゝり易い。

うなぎ(鰻)……うなぁぎ

ひがし(東)……ひぁがし

えのぐ(繪具)……えのぁぐ

にげる(逃る)……にぁげる

かご(籠)……かぁご

畢竟ガ行は鼻音と同じく有聲音ではあるし、舌根音で鼻には最も近い音ではあるし、舌根鼻音と同じく舌根の密閉に成る音であるなどの類似によりて、變化し易いのである。

第四節　母音の調和

或る綴りの母音の勢力が、隣りの綴りに及んで、其母音を同じ母音に變へることを母音の調和と云ふ。例へば、上野下野邊の方言に

はらいさげ(拂下)……へれーさげ

ふところ(懷中)……ほところ

と云ふ。之は、ライが母音同化によりて、中間音レーに化つてハレーサゲが出來た其時に、優勢なるイの母音エは、隣音ハの母音アをエに換へさせて、ヘレーサゲを生じたのである。フトコロは、ト以下の三音が皆オの母音をもつので、其優勢なることは云ふまでも無い。そこで第一の綴音は、いつしかウの母音をオに換へて、ホトコロとなるのである。フの母音ウをオにかへたものなれば、フォとなるべきなれども、フォは國語音に無き音なれば、最も近き音ホを擇んだのである。

くすのき(楠)……くすぬき

なども、上の二綴音の母音がウなるために引き付けられて、ノの母音オは、ウに換へさせられたのである。

ほくろ(黑子)……ふくろ

なども皆同じい故に、類推すれば知れる。

第五節　母音の不調和

母音の調和があれば、之に對して不調和がある。若し、調和のみで不調和が無かつ

たならば、言語音は如何に單調に、如何に無趣味のものであらうにと、吾人はつくづく自然の妙理をゆかしく感ずる。

同じ音が重なる場合に於て、同じ音狀態を繰り返すことを厭うて、其母音を變ずる作用で、前節のとは反對である。

行かるゝ……行かれる
見さする……見させる
感ずる……感じる
うゝる(植)……うえる

などは、此場合の例にはまるであらう。併し、之も同じ音を繰返すことが五月蠅いとか、同じ音が重りて強きに過ぎるを和ぐるとか云ふ、一種の音調和であるので、不調和と云ふ名は、不適當であるけれども、暫く前節に對して此く名くることゝした。

第六節　音顚置

後に隣りする音が前に隣りし、前のが後になる

せきちく(石竹)……せちぎく……しゃちぎく……しょちぎく
つごもり(晦)……つもごり
つるべ(釣瓶)……つぶれ
かるわざ(輕業)……かりわざ……かじわら
ちゃがま(茶釜)……ちゃまが
たまご(鷄卵)……たがも
あらたし(新)……あたらし
あらぶる(荒暴)……あばるゝ
とだな(戸棚)……となだ
からだ(身體)……かだら
こがたな(小刀)……こなたが

の如き音變化をなすもので、各地に散在するものを一々書きたてたならば、なほ面白いものもあるであらう。之を音顚置又は隣音交換と云ふ。

此變化は、重に其人の無學であるか、不注意であるかに原因する。即ち新しい一音簇を得る時に、之が何となく既得の或る音簇に類似して居ると、いつしか其に引き

付けられて變化するのである。例へば、ステーションと云ふ語を初めて聞く時に、切符を賣り、汽車に上下させる場處、役所と云ふことから、無學にも不注意にも、郡役所、裁判所、交番所、警察署のショを連想して、いつしかショを終りに持ち來り、ステンショと訛り、更にステンバと訛るが如きたぐひである。セチギク(石竹)は、越後の或る地方の方言である。花の咲く草の樣子の、唯何となく菊と云ふ既知の語を連想するために、其に引き付けられて音顛置をしたのである。ツゴモリ(晦)の語が、ツモグル、モグル(蟄)など盛に使用せらるゝ既知の語に引きつけられ、ツルベ(釣瓶)に對して、潰しなどの既得語のある時に、無敎育で不注意なるために、其に引き付けられて顛置するのである。

之に就いて注意すべき一現象がある。其は、此くの如く甲音乙音は顛置されるが、母音の調和的勢力が強いために、父音は顛置されるが、母音は依然として、舊位置に舊音を維持するのである。例へば、ツルベのルとベとの顛置に於て、ラ行rバ行bの父音は顛置されるが、母音のウとエとはもとのまゝなるために、ツベルとは云はずして、ツブレと轉置する。タマゴに於ても、タゴマと顛置せずして、タガモ　なるなどもさうである。(之は越中の方言である)チャマガのチャガマに於ける、ツモゴリのツゴモリに於けるは、言ふまでも無いことである。我輩はまだ飽くまで十分なる斷言はなし兼ねるが、多くの場合に於て、音顛置は父音の顛置で、母音で無いことを認めることが出來る。

この間、或る書に、カジワラはカルワザの音顛置と說いてあつた。之に據ると、母音もかはつた樣であるが、之は、直接にカルワザからカジワラになつたもので無い。如何とあれば、北國では大方カルワザとは云はぬ。其ル音は、必ず口蓋化してリとなり、カリワザとなつたものが通用する。其がカジワラと化つたので、やはり父音のみの音顛置である。

第七節　音の增減

音が減ずると云ふことは、或る音狀態から或る音狀態に移る時に、其中間音を脫落することである。しかし初めより明瞭に脫落するのでは無くて、次第に弱められ、不明瞭にせられ、音量を減せられ、若しくは、明瞭なる隣音に近いて、之に併呑せられ、終には全く脫落するのである。

白き花……白い花
書きて……書いて
嬉しき……嬉しい
指して……指いて
出して……出いて

は、キシの父音が口蓋化した父音であり、母音は口蓋母音であるために、口蓋狀態が重きをおして、いつしか父音が脱落する。

寒く……さむう
暑く……あつう
うれしく……うれしう
有難く……ありがたう
白く……しろう

母音から父音カ行kに移るには、舌根に於て密閉破裂音を作らねばならぬ勞を省きて、其のまゝ母音から母音に滑りて、父音kを失うたものである。但し此場合には、二母音が連續するために、其間に同化作用を起して、一音に歸するか、中間音になることは、母音同化のところに述べた通りである。

さむう……さむー
うれしう……うれしゅー
ありがたう……ありがとー
しろう……しろー

以上の二の場合の父音脱落は、從來之を音便と云うた。

くふ(食)……くう……くー
かひ(貝)……かい
いへ(家)……いえ
しほ(鹽)……しお

の如く從來轉呼音と名けてあつたものゝ如きも、又此父音脱落の結果である。何故に脱落するかに就いては、有聲音同化のところに述べてある故に、此には述べない。

ヲ行の綴音ヲレは、懸壅垂や舌の顫動を失うて、ヤ行音yの如く響き、或は更に母音イエの如く響くことがある。例へば、

御座ります……ございます
くだされ……下さえ……下さい
まわたり(馬渡)……もーたい
おれ(自己)……おい
われ……わい
くすり(藥)……くすい

下の三語は、鹿兒島あたりでよく聞かれる語で、此處の音脱落である。

ワ行の父音も、亦其唇狹窄をゆるめて、唇摩擦を失ふがために、母音の如くひゞくことがある。

それにわ(其には)……それにあ
おのれわ(己は)……おのれあ

を初めとして、其他キウエヲのワ行音が、父音wを失うて、母音に併せられるが如きは、此音脱落である。

以上は、專ら父音の脱落であるが、同じ理由で、なほ母音の脱落することも珍しく無い。さきに本章の第二節の甲の(1)及び(2)に說きたる、二母音が一母音に歸し、或は中間母音になるものゝ如きは、又この母音脱落の方から觀ることが出來る。

いかに(如何)……いかん
行かなけりゃ……いかんけりゃ
しらぬ(知)……しらん
よみて(讀)……よんで
あります……ありんす
來て見なさい……きてみんさい

などは皆母音の脱落である。母音の脱落は、鼻音に接する時に最も著しい。之は鼻音より母音に移り、更に鼻音と口腔の狀態の同じい、若しくは近似せる父音に移る時に、母音が脱落されて、鼻音から其のまゝ父音に滑りかゝるのである。

よくあり(善く有り)……よかり

おほくあり(多く有り)……おほかり

は、クの母音が脱落して單音kとなり、それに次ぎの母音アが綴られたもので、從來反切約音など云うたものゝ一つである。

述べ來た音脱落を一二繰り返して見れば、

ございます

の、連れるアアの二母音が、アーになり、アになりて、

ございます

と變り、更にラ行音が懸壅垂や舌の顫動を失うて、ャ行音に軟化し、又其父音を脱落して母音となり、

ございます

マは母音アを失うて、單鼻音となり、アイの二重母音は其中間になり、或は一方の音に歸して、

ございんす

ございす

と變化する。其後は、懸壅垂を壓し下す手數までが省かれて、鼻音を失ひ、ザイゼも其父音を失ひ、

ごあす

ごえす

となり、又二重母音の一母音を失うて、

がす

げす

となるのである。

そーでおます(然うである)

鼻音の次の母音が例の如く脱落して、

そーでおんす

となり、例の怠惰主義から懸壅垂の作用を落して、

そーでおす

と變り、更にエオの二重母音は一母音となりて、エを失ひ、

そーどす

となるのである。

また(無ケレバ)が、

なけれわ

なけれわ

なけーわ

なけわ

なきゃ

と變化することを思へば、行カナケレバの行カンキャに化り、行カナキャになることも知れるであらう。

音の增すと云ふことは、つまり或る音から或る音に移る階段音が明瞭に聞ゆるか、懸垂垂の作用を曖昧にする爲に、聲の一部が鼻にもれて鼻音を生ずるからである。

さんい(三位)……さんみ

いんえん(因緣)……いんねん

こんや(今夜)……こんにゃ

てまり(手毬)……てんまり

富士てー山……富士ってー山

まったく(全)……まったく

などは、音狀態の躊躇と澁滯とによつて、階段音が聞え、音中止を生ずるので、

ずば(不)……ずんば

すでに(既に)……すんでに

ごぼー(午蒡)……ごんぼー

ばば(馬場)……ばんば

かご(籠)……かんご

かゞし(案山子)……かんがし

いや(否)……いんにゃ

などは鼻にかゝり、或は全く鼻音を增加した之は下に口腔の狀態が鼻音と同じく、若しくは之と近似せる父音の在る時に限る。

とばす(飛す)……とばかす
はしる(走る)……とばしる
ろしや(俄羅斯)……おろしゃ

なども、一種の音增加であるが、之は、畢竟發音をなだらかにし、語勢を强めるために附加せられたものである。

第八節　音の自然傾向

一般の音變化は、大略之を說きをへたが、音には、尙何地方では、口を窄めて發音することを好むとか、何地方には、好んで口を大きく開けるとか、何處では、前母音を多く語つて、後母音をも前母音にしようとする傾きがあるとか、寒國の人は鼻音が發し易くて、口音をも鼻音にしようとするとか、海邊の人は大聲で高調子の音を發し易くて、氣流の稀薄な音をば稠密の音に發しようとするとか云ふ、自然の傾向があつて、發音を兎角此傾向に近けようとする一種の變化的勢力がある。之を音の自然傾向、或は音の原基と云ふ今其一例をあげんに、

のぞく(覗く)……のずく
よろい(鎧)……よるい
よべ(夜部)……ゆーべ(夕)
きょー(今日)……きゅー
ほんとに(眞に)……ふんとに
それなら(其ならば)……そりなら
まぼり(馬堀)……まぶり
しお(鹽)……しゅー
下されまい……下さりませ

などは口を大きく開けまいと云ふ怠惰主義と、口を大きくあけることは見善くないと云ふ品作り主義からして、開口狀態の小なるものを擇ぶと云ふ傾向に基いたものである。尙余が嘗て住んだ村人は、河をへだてた對岸の村人の物言ふにまで、いやに品作りするを喇りて「草餅＝砂糖ベタベタ着ケテ欲シイ」と云ふことを、

くそ餅にさとべとべとつきてふしい

と云ふなど惡口するのも、此傾向を證明する材料である。

土地により人によりては、此反對で、狹口母音を廣口母音にする傾向をもつものもある。

第九節　音量、音勢、音調及び音色の變化

音の長短や音の強弱大小や音の高低や音色が、既に音質の一部をなす以上は、其相違變化即ちサトー(砂糖)をサトに縮め、ハ(葉)ナ(菜)をハーナーに延べ、クモ(雲)とクモ(蜘蛛)、カキ(垣)とカキ(柿)とのアクセントを取りちがへたり、音調や音色の類似によりて、音が變り合ふことなども、音變化の上に認めなければならぬ。

第廿八章　附錄

(一)幼兒の聲音の發達に就いて

生れたばかりの兒童は、何故に談話することが出來ないかに就いて、主なる二つの理由がある。其一つは心理的理由で、語るべき觀念、概念、思想が無いためである。今一つは物理的理由で、聽官や發音機關が完全で無いためである。前の理由は、心理學の上から研究すべき題目で、後のは、聲音學の研究すべき範圍である。

兒童の聲音の稽古は、單に摸倣にはじまることは、たび〳〵述べた。即ち自己が或る言語音を發し得る先に、他人の言語音を聽き分けられなければならぬ。此の如く聽き分けた上に、之を摸倣するのであるが、孩兒は出生後直ちに音響を聞き得るものにあらず、殆ど數時間は聾者である。次第に練習を積んで、簡單なるものより複雜なるものを、聽き分けるに至るものである。學者の實驗によれば、兒童は生後大凡一箇月乃至二箇月の間に於て、生母の聲を聞いて泣きを止め、乳母子守の唱歌によりて慰められることがあると云ふ。

音響の辨識が、やゝ明瞭になる頃は、其肺臟も次第に完全し、喉頭の筋靭帶及び軟骨なども發達して、聽き分けたる音を摸倣されるに至るものである。トレシー氏は、滿二歳の兒童の使用せる言語を蒐めて、五千四百を數へてあれば、此頃には發音さるゝ聲音も數多かるべきは勿論である。

上古から今日に至るまでの、開化の順序の幾分は、孩兒が大人になるまでの智識發達の狀態によりて類推されるとか、吾々は生れゝより大人になるまでの經歷によつて、太古蒙昧の時代から今日に開化した狀態をくりかへす、と云ふことが確論で

あれば、吾人は、又兒童の聲音發達に就いて、一般聲音の變化的勢力の幾分を知ることが出來るであらう、例へば、アと云ふ中部母音は、兒童の最も早く發する母音であるとすれば、大人に於ても、ウやイなどの後母音前母音が、やゝもすれば、此發し易い母音に近づかうとする傾向は無からうか、マ行バ行の唇音が、早く兒童に發せらる音で、ハ行の輕微なる摩擦音の、兒童に聞き取り難く學び難いと云ふことは、今日のハ行音hが、もと唇音パ行ファ行音であつたと云ふことを確める材料にはなるまいか。是等がいくらか材料になり得るとせば、マクス、ミュラー氏の、兒童の言語は研究すべき價値あるものに非らずと云はれたは、杞憂であるまいか。誤りであるまいか。

孩兒の聲音に就いて、吾人の知る處によれば、母音の中ではアが最も先に發せられる樣である。父音では、ンッ音が最も早いが、之は談話音ではなくて、生後いくばくも無く不快の時などに發する舌根密閉音である、マ行バ行バ行などは談話音として早く發せられる音で、チャ行ニャ行なども、やがて發せられる、要するに密閉音は摩擦音よりは早く發生する樣である、之は摩擦音の局部と局部とが着かうとして纔に離れて居るむつかしい狀態を加減するよりは寧ろ思ふ存分におしつけて密閉する方が容易いのである、サ行音が兒童にはチャ行音として發音されるが如きも之が爲めである

（二）吃りに就いて

吃りは、發音局部の筋の習慣性によりて、同じ局部の同じ音狀態をくりかへすのである。戯れに他人の吃るを眞似し、或は狼狽激昂によりて、一たび此習慣を作る時は、絶えず無意識に續生するので、之を意識を以て矯正することは甚だ困難である。しかし實驗家は、之を全く不可能のことで無いと言うてある。其方法は、第一期と第二期とある。第一期は、筋の習慣即ち吃りの惰力を忘却させるので、一切無言の狀態にあらせるのである。此狀態は長く保てば長く保つほど有効であるが、甚だ劇しい吃りでなければ、一週間位でよろしいと言ふことである。第二期は、吃りの習慣より脱し得た音局部を使用して、新に發音させる時期である。けれども、長く習慣となりたる吃りの惰力は、やゝもすれば再生し易いもの故に、此期間は力めて弱き吶き音で語らせるのである。此狀態も亦長く保つほど有効ではあるが、普通

のものは、大凡一週間で目的を達せられると云ふことである。此二期の治療期を過ぎ、次第に高く大なる音を語らせて、終に常の談話音を語らせるのである。之は多年實驗した人の說で、我々は、未だ之を試みる機會をもたなかつたが、吃りの性質上からも、發音の道理上からも、信ずるに足る說であると思ふのである。

(三)啞に就いて

人は、生れながらにして發音機關を具ふれども、生れながらにして聲音を具ふるものでは無い。即ち聲音は、成長するに伴うて經驗的に得たものである、他人の聲音を摸倣して得たものであることを知つたならば、生れながらの聾者が、國語音を語ることを得ざる啞者たることは、怪しむに足りない。如何となれば、音を聞き知らねば摸倣することは出來ぬ。摸倣によらでは自然に音を學習すべき方法は無い。此聾啞は、聽覺を缺けるために、他人の音を聽き取りて、摸倣することは出來ぬが、既に發音機關と大氣の呼吸作用、即ち聲音發生の原料を完全に具備する以上は、談話音、約束的音、いはゆる國語音は語られねど、何か偶然に特發せる自己特有の音の二三を有つに違ひは無い。此の特發の音を基として、目より音を敎ふることが出來る。之は、聾啞敎育に心がけある人の、最も心を留めなければならぬことである。即ち其音が、國語音の何音と同じいか、若しくは近いかを認めて、其發音機關の狀態を圖解し、己れの發する音は、何れの局部の、如何なる狀態に成るかを知らしめ、同じく圖解を以て、次第に近き音を敎へ、其區別を指示するのである。此敎授法は、現に聾啞敎育に採用せられてをるので、今日は其効用を疑ふものは無いのである。

19148

國語聲音學 終

明治三十五年十二月廿五日印刷
同　年同　月廿八日發行

國語聲音學
定價金六拾錢

著者　平野秀吉

發行者　株式會社　國光社
東京市京橋區築地二丁目二十一番地

右代表者　橋本忠次郎
東京市京橋區築地二丁目二十一番地

印刷者　河本龜之助
東京市京橋區築地二丁目二十一番地

印刷所　株式會社　國光社
東京市京橋區築地二丁目二十一番地

不許複製

發行所　東京市京橋區築地二丁目二十一番地
株式會社　國光社
特電話新橋八八、新橋二六九三

終